醸成す」。歴史は畢竟一團塊のみ、人間史の上より見んか事件に大小の差別あらんや。要するに「歴史は新聞紙を燕溜せるものに他ならず」と。されば彼れは能ふべくば『人間史』を編せんの志ありしがこは彼の『フレデリッキ傳』にだに前後十四年を費し、此の著者の到底成すを得ざる所なりき。但し之れを其の全著に徴するに何れの篇何れのページを問はず此の主義の影は現れたり。其の史的抱負のマコーレーに比して頗かに遠大なりしを見るべし。

彼れ既に斯かる主義を持して史を編めり文致はた此の旨に伴はざるを得んや。彼れは謂へらく史上の出來事は成形の固躰なり幅あり長あり深さあり筆紙の記述し得る所は線のみ線は以て躰の各面を描く能はず況んや其の内部と實質とをやと。於是彼れは其の叙事の躰に一機軸を出だし破格の筆を驅ること不羈奔放ひとへに事件を叙寫して餘蘊なからんことを力めたり。試に『佛蘭西革命史』を繙きて之れを見よ。忽ちにして椒房の麗姫忽ちにして野人ミラボー乃至其の父祖の狂行忽ちにして暴徒の嘯集忽ちにして南園の葡萄架。外國の關渉を叙しては列國公使の容貌態度得失に及び、前代の盛世を論じては英雄事業の頽廢と不滅と

に及ぶ。何れか先何れか後何れか主何れか客秩序あるが如く亦た無きが如く關係あるが如く亦た無きが如し。テーン曰はく「知りて之れを讀めば身活劇場裡にあるが如く知らずして之れを讀めば徒らに頭痛を釀すのみ」と。然りカーライルは該革命の活劇を其の腦中に畫き頭ゆらぎ目くるめくに及びて之れを筆に現じたりしなり。『クロンエル傳』と『フレデリッキ大王傳』はた同一筆法に成れり。冷靜なる史家の眼を以て觀察し愼肅なる史家の筆を以て徐に過去を叙述せんよりはむしろ炎々たる詩人的同情を傾けて全身を其の事件の爐中に投じ造化に代りて再び該事件を活現し以て後の讀者をして大人間史の一端を瞑々裡に看得せしめんとする是れカーライルが修史の理想にして其の文章の滅裂と險怪とは之れに伴へる必然の結果なり。

彼れが本領たりし歴史の特質は略〻以上の如し。以下少しく彼れが人世に對する觀念を窺はん。

テーン曰はく「カーライルは清淨教徒の隨一人なり」と。而してカーライル亦た曰はく「清淨教主義は吾が英雄主義の最後の現象なり」と。然れども彼れは到底純粋

なる清淨教徒にはあらざりしなり。其の信仰の根底のあくまでも眞摯にして上帝を尊び永劫を忘れざるの點はげに全く清淨教徒の所信にひとしと雖も彼の單に己れを持して他を律すること峻嚴に過ぎ遂に人情を離れ冷酷に趨るが如きはカーライルの常に惡む所なりき彼れはかゝる場合には詩人的熱情を以て衆に同感するを常となしにき。清淨教徒は曰はく「何をか道德的精神といふ上帝を尊崇する精神是れなり。何をか善といふよく上帝に奉事すること是れなり。如何にして上帝に奉事すべき。夫れ塵寰は穢土なり人間は罪惡の動物なり人祖が罪惡によりて生まれたればなり。かゝる罪惡の身を以て上帝に奉事せんと欲せば宜しく身を淨うし行ひを正うし五慾を去り七情を捨て直方以て上帝の意に隨ふべし。上帝は畏るべし議すべからず罪大に識小なる人智を以て上帝を議せんとするは徒らに罪惡を重ねんのみ」と。而してカーライルは謂へらく是れ豈に自然と人間との半面を限界するものにあらずや。げにも人間の苦樂は憫むべきものに過ぎざらん人世由來智者に乏しく現在の快樂に耽りて永劫の苦艱を悟らず徒らに一時の惰眠を貪りて深夜に叫喚の聲あるを聞かず。然れども人若し一旦此の迷夢を破らんか未來に向ひておのづから其の地を作ること無きを保せんや。げにや上帝と惡魔とは共に等しく實在なり人を誘ふ者は惡魔に非ざれば上帝なり念々刻々人の行動するや天堂に近づくに非ざれば地獄に近づく而して之れを知り之れを明らめさて自ら其の去就を決す善からずとせんや。換言すれば「人は盲從と束縛とを脱してさて信心堅固なるを得べきにはあらざるか。正義の爲めには不撓不屈而もよく邪を怒るの度を失せざるを得べきにあらずや。德行高くいみじうして而も能く向上擴張の近世的精神を有し得べきにあらずや」と。是に於てや彼れはギョオテが著を繙きて其の所信を固め其の疑團を釋きにき。清淨教徒は曰はく「善を行ひ以て上帝に事へよ」と。ギョオテは曰はく「善美を併せよ一切を併せよ而して圓滿の人となれ」と。見るべし前者の峻嚴にして局し後者の自由にして廣大なるを。是れカーライルの竟に清淨主義以外に逸せし所以なり。

カーライルが哲學宗教に關する思想は獨乙の碩學に負ふ所多し。然れども彼れは抽象的に人間及び天道の解釋を求めんとせし者にはあらず。ギョオテはカント、ヘーゲル等に比すれば其の說一段抽象的ならずと雖も尙ほカーライルとは趣

きを異にす。ハリエット、マルチノー曰はく

「ギヨオテの廣大にして明光ある人生觀は晩年のシエークスピアのに同じく氣霽れたる時高きに登りて靜かに人界の景象を見渡すの概あり。カーライルの豫言者的運動は譬へば垢面敝衣雜沓紛擾の間を縱横に馳驅するの趣あり」

と。然りカーライルは霹靂火なり黑旋風なり及時雨に非ざるなり然れども彼れもまた英國人なり其の世を罵りしは人をして其の過失を悟らしめ正に向ひて猛進せしめんが爲めなりしなり。其の哲學を攷めしは其の智識を借りて世の迷妄を破し之を啓導せんが爲めなりしなり。是に於て彼れは一方に無限絶對を說き一方に差別實際を說けり。其の罵りしは其の愛せし所以其の現在を說きしは其の未來を說きし所以其の未來を說きしは其の現在を說きし所以なり。テーンが「衝突矛盾解すべからず」といへるもの蓋し此に存す。エドワルド、ドーデン曰はく

「『異』、『恐怖』、『崇敬』は皆彼れが熱情より生ぜしものなり(さて此等の者を爲に譬ふれば)其の異を鼓して翱翔するや無限永劫の虛空を背景とし有限定質成形の明白なる知覺と强壯なる活動とを前景とす。」

と。眞に然り。要するに彼れが社會に對する敎導の聲は有爲活潑なる少壯の耳に最も快適なる音響たりしはいふを俟たずやゝ人生を眞面目に考察し之れに處理する最良の法を知らんと欲する者又はたゝ現在有形の快樂に安んずる能はずして未來の方向を知らんと欲する者、要するにマコーレーが所說に滿足する能はざりし輩にとりては實に曉鼓の聲々たるが如きものありしなり。

按ずるに英國第十九世紀の初期は有形無形の事物の一時に伸張せし時なりき。新生存の途の頓かに開かれし時、農業工業商業の希有の勢ひを以て共に隆盛に赴きし時なり而して之れを奬勵し之れに謳歌せし者は彼のマコーレーなり。さもあれ人間豈に永く燦然たる外飾にのみ眩惑して其の當來と歸趨とを知らずして止まんや。カーライルが終生の熱罵も亦た以ある哉。

第十五章　カーライル以後の歷史家

カーライルの歿後歷史界は一頓挫を經驗せり纔かにフルードありて舊全盛の餘光を傳へたりしのみ。さりとて修史の業の全く萎靡せしにはあらず否マコーレー、カーライル等の蹤を追うて一生を史的研鑽に委ね種々の方面に於て史界を開

拓せし者頗る多し。今中に就きて最も有名なる者二三を擧げん。

(一) アレキサンダル、キングレーキ(一八一一—一八九一)は博覽强記考證の精を以て一時に冠たり。サマルセットの人素封家に生れ少にして國會議員に選ばる。始めて其の名の著はれしは一千八百四十七年にものせし"Eothen"と題せる冊子なりこは文章いと華麗なる東洋漫遊記にして同種の書中當時第一の評ありき。後ち"History of the Crimean War"(『クリミア戰爭史』)を編し一千八百六十三年に初二卷を出版し前後二十年にして完成す。傍證博引彼の「恐るべき考證」の一例に屬す。而して著者は最も些細なる事件にだに能く其の相互の關係を發見し一々之れを組織して有機的全躰たらしむる技倆を有せり故に讀みて倦厭を生ぜざるのみならず時には以て人事推動の因緣を探るに足ること猶彼の好小說に於けるが如きものあり、只如何せん一回の戰爭に一卷を費し二年間の記事に八卷を費せる故に史としては寧ろ煩に過ぎたる憾あり。且つ其の文躰は甚だ華麗にして流暢なるも往々にして新聞紙の雜報若しくは小說の如き文躰となり加ふるに著者其の政治上の意見に泥みて記事に公平を失したる個處少からず。

キングレーキとカーライルとの間に出でにし名なる史家三人あり John Hill Burton. William Forbes Skene 及び Charles Merivale 是れなり。バルトン(一八〇九—一八八一)とスキーン(一八〇九—一八九二)とは共に蘇格土の學者にして蘇格土の修史官(ヒストリオグラファルロイヤル)たり。前者は近代史(重に革命以後)に著はれ後者は所謂"Celtic Scotland"を以て鄉國史の宗たり。メリヱール(一八〇九—一八九一)はケムブリッヂ大學の名譽校員にして"History of Romans under Empire"(『羅馬帝國民史』)を著はして名聲ハラム、グロートに次げり。

(二) John Forster(一八一二—一八七六)は多年『エキザミナル』記者として史傳に名あり殊に英國內亂時代の史に精通し"Arrest of the Five Members"を著はし傳記ものには『ゴールドスミス傳』『スヰフト傳』(未完)『ランドル傳』『ヂッケンス傳』等の著あり。又純文學上の考證に長じカーライル及びブラウニングの精通家として名ありき。此等の史家の中にて當時最も異色を呈せしは

(三) Henry Thomas Buckle なり。一千八百二十三年に生れ幼より史傳を讀むを好み又十分なる敎育を受け一千八百五十七年"History of Civilisation"(『文明史』)の第一卷

を著はし同六十一年に第二卷を出版しき。著者はもと全歐洲の文明史を編せんの結構なりしが此の第二卷の出でし翌年に夭折せしかば完成せしは纔に英國の分のみなり。此の書の出でし當時は世間の好評甚大なりしか程なく反動生じて遂には不當の嘲罵をすら蒙るに至りき。蓋し此の書や論旨文致よりも其の編述の躰裁に至るまで盡く純然たる佛國風にして着眼の奇警、觀察の精刻、叙事の明晰、議論の大膽など佛人中にてもテーンを除きては當時殆ど比肩すべきものなかりしならん只動もすれば粗放獨斷に流れ事件の關係を見ることあまりに直線的なりしが上に彼の佛人の口癖を學びて絶えず「英人は職工氣質の人種なり」など嘲罵せしを以て英人の反感を招き攻擊一身に集るに至りき。公平なる眼を以て見るも其の獨斷の甚しき所多きは拒むべからず蓋し其の議論の憑據として引用せる事實は概ね議論の奴隷たる姿あり。彼れは事實を基礎として議論を立てずして議論成りて後ちに事實を取舍選擇せし觀あり。されど其の着眼は流石に奇警にして發明する所尠からざるのみならず其の文章明快にして力あり讀者は知らず識らず其の心を吸引せられて卷を掩ふに至るまでも餘事を思ふ遑なからんとす亦

た以て史壇の名著と稱するに足る。

(四)エドワルド、アウガスタス、フリーマンはバックルと同年に生れて三十年の後に歿しき。文明史家としてはバックルに似たる點も尠からねど教育、好尚及び宗教上の思想は兩者全く途を異にせり。少にして英國古代史を研究し多年の精査を積みて一千八百六十七年より同七十六年に亘りて"History of Norman Conquest"(『ノルマン征服史』)を著はしき是れが一世の名著なり。爾後史及び史論を著すこと若干終に"History of Sicily"(『シヽリー史』)の未定稿を遺して同九十二年に歿しき。フリーマンは一たびも公立の學校に入りしことなかりしかど碩學の聞え甚だ高く初めオックスフォルド神教學校の名譽校員に擧げられ後ち又オックスフォルドの近代史編修官に推され有爲の子弟を率ゐて多年史壇の牛耳を執りにき。彼れは當時の史壇に於ける最も忠實なる學者なりき。其の所說の今尙ほ依憑すべきもの多きはいふを要せず史中に建築の變遷を附說せし彼れが創意は最も推稱せらるゝ所なり。フリーマンが文章の畫的なるは頗る懌ぶべしと雖も動もすれば爲めに冗漫に流れ厭倦を催さしむるもの少からず且つ其のあまりに多く隱喩を

用ひたるは彼のマコーレーが聯句癖にひとしく敘說の躰を傷けて餘りあり。されど兎に角にフリーマンは當時の史界第一流の人たり殊に其の十一二世紀の記事の如きは他の企て及ばざる所多し。彼れは雜誌新聞紙にもたづさはり『土曜日評論』の寄書家として多年社會問題政治問題に筆を執りにき。フリーマンが門下彬々たる英材多し中にも其の翹楚を

(五) ヂョン・リチャルド・グリーン　とす。一千八百三十七年に生れ同八十三年に歿しきオックスフォールドの人なり。マグダレン大學と耶蘇敎大學とにて敎育せられ卒業の後ロンドンにて牧師となり『土曜日評論』の寄書家を兼ねにき。其の名聲は最も歷史に高くあまたの著述ありし中に殊に "Short History of English People" (『英吉利國民小史』)は最も好評あり。グリーンは熱心に時人を導きて社會文學風俗宗敎其の他百般の事に史的觀察を爲すの風を養はんと勵めき。此の希望は以前の史家とても抱けりしがグリーンの如く適當の方法を用ひて好成果を收めし者はなかりしなり。彼れは時人の耳に入り易き近代の思想に基礎を置きて古へを見其の今日ある所以の決して偶然にあらざるを明かにし趣味ある事實を引き來りて之れを例證しマコーレーぶりの瑰麗なる文躰を以て且つ論じ且つ敘し以て讀者をして詩的觀察の趣味と利益とを知らしめき。彼れ又「一事史」に從事し時代を逐うて國史の出來事を詳說し數十篇を以て完結せんの豫定なりしも夭折せし爲めに纔かに "The Making of England" (『英吉利開國』) "The Conquest of England" (『英吉利克服』)等二三篇にして止みにき。

フルード

カーライルの歿後史家として文章家として十九世紀後半の文壇に聲名を轟かせしヂェームス、アンソニー、フルードは千八百十八年四月ダルチントンに生る父は敎會の事務長にしてヂェームスは其の末子なりき。オックスフォールドなるオリエル大學にて敎育を受け一千八百四十四年卒業してトラクテリアンといふ一派に參し敎師ニウマンが感化を蒙りしこと大なりしが遂に一轉して懷疑派に入り一千八百四十九年 Zeta といふ別號にて "Shadows of the Clouds" と題せる小說を作し暗に其の持說の變遷を語りき。爾來專ら文學によりて名を成さんと欲し私かに先輩カーライルの蹤を追ひ先づ『フレーザル』『ニストミンスタル』等の雜誌に筆を執り

て數年を送りき。この間思を史學に潛め一千八百五十六年"History of England from the Fall of Wolsey to the Defeat of the Armada" の第一卷を編しぬ此の書は同六十九年に至りて完結せり。次ぎて其の雜論集"Short Studies"出版せらる。同七十一年より七十四年に亘りて"The English in Ireland"(『愛蘭土に於ける英倫人』)の三卷を著し同八十一年より三年間はカーライルが遺篇の蒐集校訂と其の詳傳の編撰とに從事し兼ねて"Oceana"及び"The English in the West Indies"の著あり。同八十九年"The Two Chiefs of Dunby"を作す遺は愛蘭土に關する歴史小說なり。かくて後フリーマンに代りてオックスフォルドの近代史編修を主り一千八百九十四年に歿しき。"English Seamen"は其の死後に梓に上りぬ。

人の世に在るや常に冷水中に棲むが如きものあり熱湯中に棲むが如きものあり。フルードの如きは後者に屬するか。其が社會上文學上の行爲は毎に時人に批議せられて爭論の中に一生を終へにき。彼れが史の出版せられしやフリーマンの率ゐにし一派は之れを批難し論爭數年に亘りき。又其の愛蘭土に關する著の出でしや愛蘭土の愛國者流は皆之れを難じ剰へ英國の紳士等たに多くは著者に反

對しき。又其のカーライルの遺書を蒐めて其の逸事と性行とを公にせしや先輩の私行をあばきて其の內事をだに暴露せりとて大に時人に難ぜられき。

さもあれ此等批難攻擊は多くは政治宗教等の意見の相異なるより生せしものなればこゝに其の當否を辯ぜんは難し。例へば其のカーライルの"Remains"(『殘簡』)に關する批難を案ずるにこは主として德義上の問題たり著述としての非難にはあらず。彼の「事實に忠にして加ふるに趣味餘りある人物評傳の好模範」として今尙批評家にたゝへらるゝロックハードが『スコット傳』すら當時はフルードの著にひとしく若干の批難を蒙りしを思へば名家傳の編撰の容易からざるを察るべし。

フルードが歴史編述の方を見るに彼れは事實を精敍するを主とせしよりは寧ろ之れを論定することに力めし傾きあり隨うて頗る物議を惹きしが所詮彼れをしてかゝる躰裁を擇ばしめしは半ばは時勢の然らしめし所なり。夫れグロート、マコーレー及び晩年のカーライル等が當時の讀史界に歡迎せられし主なる理由は其の事件を精敍したる點にあり而してかゝる精細詳確なる敍說は多年の調査の結果なりき。然るにフルードの事を敍するや之れに比ぶれば遙に粗にして其の

議論を行るや更に精なり是に於て社會は以爲へらく其の力むる所少くして臆斷頗る多かるべしと。さもあれフルードは彼の三者に比すれば自己の持論を以て して人物事件を褒貶することは却りて少なかりしなり。而も其の長所は敵の爲には缺點と思惟せられ中立者の爲には可不可なきものと見られたり。所謂長所とは何ぞや。第一、彼れは熱心堅固なる愛國者にして能く自國の長所を看取して之れを推奬せしことなり而して之れを難ずる者あるときは全力を以て之れに當り舌に筆に辯駁反論せり。第二、よく歴史の眞義を會得し事實の取捨は概ね其の宜しきに叶ひたり。按ずるに古今史家多しと雖も單に事件を年代的に錄して能事畢れりとなせる者多し隨うて其の記叙するや典據は正確に考證は該博なるも記叙生氣無く往々にして死事實の臚列に止まるもの比々是れなり而してよく此の失を脱し活寫の妙を兼具せる者古くはシウシヂヽーズありヘロドタスありクラレンドンありギッボンありカーライルあり而してフルードの如きは其の尤なる者の一人なり。さてまた第三の長所は其の文致の雅馴と明快となり。彼れが文章はマコーレー、キングスレーキ若しくはラスキンの如き瑰麗を以て勝るものにあらざる故廣く世俗の喜ぶ所とはならざりしも氣品俗を脱し平淡一奇なきが如くにして而も衆妙の躰を具へ貫くに一片靈活の氣を以てせる處與に「十九世紀後半第一の妙文」たるを失はずといふべし。

第十六章　テニソン

第十九世紀後半期の詩歌は之れを彼の純文學の極盛期たりしエリザベス女王朝若しくはアン女王朝の詩歌に比するに種々の點に於て毫も遜色なきのみならず觀念の深邃といふ點に於ては復かに兩者に超越するものあり。夫の辭句の華麗と結構の纖巧とを以て特色とせしアン女王朝の詩歌が其の觀念に於て見るべきものの乏しかりしは更にもいはず彼の情熱と創新とを以て勝れりしエリザベス朝の詩歌と雖も其の形而上の想念は概して卑く若し其の詞句の上に見えたるを標準とすれはスペンサル一人を除くの他は重に人情の浮沈を歌ひ人事の成敗を歌ふに止まり未だ天地人の究竟問題に觸れ人生最奥の消息に接し之れを咏歌することは殆と無かりき。蓋しかゝる問題は當時の社會のいまだ留意せざる所なりしなり。降りて十九世期に至れば時運の大變動は人々の思想を刷新し來り人智

外界の昌平に知足する能はずして反省的となり顧慮的となり眺うて生存の大問題を講ずると共に過去將來を推度して處世の方針を定め安心立命の地を作らんと欲しき隨うて詩人はた此の風潮に化せられ其の多涙多感の性に驅られ率先して這般大疑問の解釋を與へんとせり。是に於て彼等は思ひを凝らし心を潜め哲學宗教の問題に亘りて其の抱懷を抒し其の漸く覺悟する所あるや更に其の聲を高うして慰諭の福音を歌ひたり。彼等はもはや舊詩人の如く單に自然美を謳歌する者にもあらず又單に人情を咏ずる者にもあらずはた又單に自家一身の興感咄嗟の哀樂を吟哦する者にもあらず否仔細に人生の秘機を察し煩惱の由來を概念しさて後も靜かに筆を採りて且つ批判し且つ同感しつゝ作せしなり。是れ其の片言隻句の深邃なる觀念を藏する所以なり。

新詩風の一先驅として又其の代表者の隨一として眞に錚々の名あるものをアルフレッド、テニソン卿となす。

アルフレッド、テニソンは一千八百九年八月リンコオンシアなる一村サマルビーに生れき。其の父博士(ドクトル)ジョルジ、クレートン、テニソンは同村なる寺領の監理者にして其の母エリザベスは一牧師の女なりき。アレフレッドは第三子にして兄弟六人妹一人あり。アルフレッドが初めて其の作を公にせしは一千八百二十七年にして年十八歳の時なりき。こは其の兄チャールスとゝもに作せしを集めたるにて題して"Poems by Two Brothers"(『兄弟詩集』といへり(實は長兄フレデリックも此の著に與りきといふ)。卷中なる諸作は總べて十五歳より十八歳までの作なる由自叙に見えたり。是れより先きアルフレッドは七歳にしてローズの一學校(グラムマル、スクール)に入りしが居ること數年、故ありて家に歸り兄チャールスと共に專ら父の薫陶を受けて人と爲れり。『兄弟詩集』は此の家庭教育間の作なり。かくて詩集出版の翌年(或はいふ翌々年の初めと)兄弟相携へてケムブリッヂ大學の一校トリニチー、コレッヂに入りしが後いくばくもなくアルフレッドは懸賞詩篇に當選して名譽の金牌を得たり"Timbuctoo"といへる詩は此の時の作なり。彼の歴史家ヘンリー、ハラムが子アーサル、ヘンリーと相知りしも亦た此の際なり。後ちにアルフレッドが著はしゝ有名なる傑作"In Memoriam"(『記念の爲めに』)は此の心友を追悼して作せしものなり。其の他在學中の交遊は後年に至りテニソンと共に彼の「ストルリング社(クラブ)」に入りて

文學政治宗教等に錚々たる名を博せし人々なり。

上にいへる懸賞の詩『チムボクツー』は一千八百二十九年中に上梓せられ同年七月の『アセニアム』(雜誌)は好意を以て之れを迎へ其の才藻をたゝへたり。按ふにテニソンが特質の影は已に此の壯時の作に見えたり是れいと稀れなる現象なり。彼のバイロンの如きは近世稀れに見る所の逸才にして其の文致といひ其の感想といひ奇峭矯勁時流に卓然たる所のものありされども其の初めて作りし作"Hours of Idleness"(『閑日月』)には其の特色殆んど見えず尋常の英才と見られしのみ況してや後年のバイロンの影は之れを認むるに由なかりき。(テニソンが此の時の作尙一篇あり"The Lover's Tale"といふ多く『チムボクツー』に讓らざる作なれど意ありて遙かの後年に出版せられき。)

一千八百三十年更に詩集を出版せり題して"Poems, chiefly Lyrical, by Alfred Tennyson"といふ『批情詩を主とせるアルフレッド、テニソンが詩集』の義なり。此集中に載せたるものゝ中"Ode to Memory"(『記憶に寄する長歌』)"The Poet"(『詩人』)"The Poet's Mind"(『詩人の心』)"The Deserted House"(『廢屋』)及び"The Sleeping Beauty"(『睡美人』)の如きは作者が前途のいよ〳〵多望なるを示し且つ其の傑特なる眞相をも現ぜり。(此の中『睡美人』は何故にや後の詩集には省かれたり)。此の集に對する世間の評判、就中諸批評雜誌の月旦は褒貶相半したり恐らくは非難のかた多かりしならん。かくて同三十二年(作者二十三歳の時)に第二の詩集世に出でたり題して"Poems by Alfred Tennyson"(『アルフレッド、テニソン詩集』)といへり。此の集に見えたるうち最も清新と思はるゝは"The Lady of Shalott"(『シャロットの妖姫』)"The Miller's Daughter"(『磨者の女』)"The Palace of Art"(『美術殿』)"The Lotos Eaters"(『無爲の島人』)"A Dream of Fair Women"(『衆美人の夢』)等、何れも皆情理高遠詞致典麗、之れを前年の諸作に比するに風情風姿兩つながら覃然たるものあり。蓋しテニソンが詩人としての本領は此の時に至りて漸く其の圓境に近づけりしなり。之れより前の作は概して筆ならしの趣きあり又詞調の琢磨と修錬とに過半其の力を奪はれたる觀あり。予は三十二年を以てテニソンが詞壇の卒業期と名づけんとす即ち彼れが本色の確定せし時なり。さもあれ當時の諸評家は之れを遇すること必しも厚からざりき。例へばヂョン、ロックハートの如きは戲謔的筆法もて『每週評論』に之れを評し『クォータ

ルヲー評論』の如きも例のローマン派をよろこばざる保守的感情より之れを貶し『ブラックウッド雑誌』の如きもテニソンの作には所謂コックネー派の風調ありとて難じたり。但しコックネー派の風調のテニソンに皆無なることは今は何人も認むる所なり。此のころの評にてはヂョン、スチュアルト、ミルの評のみ獨り允當を得たりき(一千八百三十五年七月發刊『エストミンスタル』所載)。大才は由來世に認められるゝこと遲きならひなりミルトンが『失樂園』すら僅々十二ポンドに購はれしを思へばミル一人の贊辭を得しだに寧ろテニソンの多とすべき所なるべし。爾後十年間は折々雑誌などに寄稿するのみにて久しく長篇を作せしことなく倫敦よりハイ、ビーチ其の他二三處に流寓し窮迫の日月を送りしが一千八百四十二年(作者三十三歳の時)に至りて更に新版の詩集を出だしぬとは已發兩集の粹を抜きて更らに若干の新作を加へたるものなり。新作中の傑作は下の數篇ならんか。曰はく"Ulysses"曰はく"Love and Duty"(『戀と義』)曰はく"The Talking Oak"(解語の槲樹)曰はく"Godiva."曰はく"The Two Voices"(『二聲』)曰はく"The Vision of Sin"(『罪業の夢』)。就中『二聲』と『罪業の夢』とは當年のテニソンを表現するものとして最も留意すべき價値あり殊に前者の如きは「十九世紀のハムレット皇子が獨白」と稱せられたり。此の新詩集出でゝテニソンが詩名は始めて定まりぬ英國の讀書社會は始めてテニソンの大詩人たるを知りぬ。此の集の如何にもてはやされしかは出版の翌年に第二版出で又其の翌々年に第三版出で又其の翌年に第四版出で又其の翌々年に第五版のいでしを見ても知るべし。さて同四十七年に"The Princess; A Medley"と題したる長篇の物語歌成り其の翌年には其の再版出で同五十年に至りては"In Memoriam"梓に上りぬ。此の作は同じ年のうちに版を重ぬること都合三たびに及びきといふ。

一千八百五十年六月ヘンリー、セルウッドの女エミリーを娶りて妻とす時に四十一歳なりき。是れより先同年四月時の桂冠詩宗(ポエット、ロウリエート)ワルヅワルス卒して其の後を襲ぐ者なし。テニソンとエリザベス、ブラウニングとは其の候補者として推されたりしが多少の動搖の後ち輿論はテニソンに桂冠を捧げき。此の決定に與りて最も力ありしものは其の近作"In Memoriam"の好評なりきとぞ。

因に記す。桂冠詩宗は或は譯して勅選詩宗ともいふ其の由來は詳かならず。近世の

所謂桂冠詩宗の職分(即ち毎年國王の誕辰を賀する詩と新年の祝賀の詞とを作ること)は凡そ一百年以前よりの事なるべけれど是れより先き幾百年宮廷詩を務とする職分)は凡そ一百年以前より先き幾百年宮廷詩宗といふ職名の詩人ありて常に宮廷に出入し王家より祿を受けたり。宮廷詩人といふ名はヘンリー三世王の朝に見え桂冠詩宗の名を賜はりしは彼の詩祖チョーサルが嚆矢なり。さて之れを桂冠詩宗といふ由來を尋ぬるにもと大學にて學生が文法學の學位を得るや文法學の中には修辭學作詩學をも含めりしが故に卒業の褒賞として月桂樹の木葉冠を受くると同時に Poeta Laureatus といふ名を得たりき「月桂冠を頂く詩人」といふ程の義なり。さて宮廷に入りて王家の用務に從事せし者は大概大學の卒業生なりしが故に月桂詩人 (Poet Laureate) の名はいつしか宮廷詩人と同義となりやがて宮廷詩宗なば桂冠詩宗と呼ぶに至りしならん。ベルナルド、アンドリウ先づこの職に任ぜられヂョン、ケー是れに繼ぎヂョン、スケルトン其の次ぎに任ぜられエドモンド、スペンサル。サミュエル、ダニエル。ベン、ヂョンソン。井リアム、デーヴナント。ヂョン、ドライデン。並びにトマス、シヤドエル等相ついで任ぜられかくてチーハム、テート。ニコラス、ローよりユースデン。シッバル。ホワイトヘッド。アルトン。バイの五人を經て一千八百十三年ロバルト、ソウシー此の職に任ぜられチルヂチルス之れに襲ぎさてテニソンにうつりしなり。桂冠詩宗、勅選詩宗などいへば無上の榮職のやうなれど必しも然らず時としては一種の榮譽ある奴隷たるに過ぎず少しく氣慨ある者は或は之れを辭し或は之れを厭ひしなり。但し近世チルヂチルスに至りて大に其の位置を高め更にテニソンに至りて一層の價を加へしかば今や桂冠詩宗は名譽の閑職となりぬ。この好例によりて未來の桂冠詩宗は或は第一流詩人と同義に用ひらるゝに至らんか。

さて翌年三月ベッキンガム宮に於て女皇陛下に謁し同月更らに其の詩集の第七版を公にしぬ。"To the Queen" と題したる小品は此の版の卷首に添へしものにてヴクトリア陛下に奉りしものなり。これより後ちの諸作は一々紹介するの遑なしこゝには其の尤なるものゝ題名のみを掲ぐべし。"Maud" といふ長篇は一千八百五十五年に成り同五十九年には "Idylls of the King" の第一出でたり(此の内に "Enid" "Vivien" "Elaine" 及び "Gwinevene" の四篇を含む)世間の歡迎はバイロン以後無比と稱せらる。同六十四年には "Aylmer's Field" "Sea Dreams" "The Grandmother" "The Northern Farmer" の四篇と共に "Enoch Arden" といふ物語歌出で又同六十九年には "Idylls" の次篇出でき。此度は題して "The Holy Grail and Other Poems" といふ此の集の中には "The Holy Grail" "The Coming of Arthur" Pelleas and Ettare" 及び "The Passing of Arthur" の諸篇を含めり。さて又同七十一年には『當代評論』(コンテムポラリー、レビウ)の紙上に "The Last Tournament" しで翌年には "Gareth and Lynette" 同七十五年には "Queen

Mary" (劇の詩)同七十五年には "Harold" (同上)同八十年には "Ballads and Other Poems" いでたり。

一千八百九十二年十月五日齢八十三歳にて歿りぬ。遺骸は彼のシェークスピア、アヂソン以下歴代の詩人英雄の墳墓あるエストミンスタル、アッベーの墓地に葬られ前古稀有の莊嚴華麗なる碑は此の大詩人の爲めに建てられたり。

エミリー・シャープ曰はく「世に大詩人の初期の作を研究するばかり趣味あるはなしさるは其の作の文學として價値あるが爲めならで件の詩人の作として思想進歩の跡を討ね得べければなり」と。此の心を以てテニソンが初期の作を見之れを他の詩人の作と比較する時は趣味一層深きものあり。余は屢きにキーツを叙してセッペリーがテニソンの祖をキーツなりといへるを掲げし因みによりこゝに又同じ人が二詩人を比照せる言を抄せん。曰はく

「人或は英國詩風の傳統を論じてテニソンを以てキーツに紹ぐものとなす。思ふに不當ならじ。テニソンが一千八百三十年及び同三十二年に出だせる詩集中其の圓熟なる作は皆てキーツが新古典(ロマンチック、クラシック)派の風調を折衷せる清新の諧音あると共に時に此の折衷の不熟の操觚を有せしこと彼のキーツが "Grecian Urn" 及び "La Belle Dame sans Merci" に見ゆるものと正さに相同じ然れども正當(ラショナリー)に兩者を比較すれば(物の比較ばかり誤解せられ易きはなけれど)其の相異或は顯然たるものあらん而も兩者もとより大詩人たるに於て擯ぶ所なきは言を俟たずキーツの短命なりしや其の作未だ圓熟に至らずして止みきと雖も彼れをして若しテニソンが例の十年間に爲しゝが如く其の作を自ら批判していろ〳〵修錬琢磨する餘裕あらしめば其の作必しもテニソンに下らざりしならん。

げにもキーツが初作の或るものは當時の批評家も善く之れを離ぜし如く一氣にして千言立ちどころに成るが爲め概れ蕪辭巴調に止まり好尚も觀念も粗雜淺薄なりしことテニソンが初期の作の上にありしならん而も感情の精微といふ一點より之れを見ればテニソンが作中一きしてキーツが傑作に及ぶものなきにあらずや。要するに兩者の類似は爭ふべからず、彼れ等は共に繪畫的表現(ピクトリアル、エキスプレッション)と音樂的表現(ミューヂカル、エキスプレッション)とを併用する妙技を有し彼等は共によく人道(ヒウマニチー)を解し普通の事物に亘りて靜穩平直にして健全なる觀察を有し又此の點に於て彼の實際を離れ現世間を無視せりしシェリーに勝りしなり。」と。キーツを激賞するは近年の傾向なればセンッペリーが言も多少の斟酌を要すべきなれど兎に角にテニソンが初期の作のキーツのに比して卓然たる能はざると其の詩風に多少の類似あるとは爭ふべからざる事實なれば此の點より見て

テニソンの系脈をキーツに求むる必ずしも不當ならじ。されど予は寧ろテニソンのテニソンとなりて生れしはキーツの有無には關せずして寧ろ時勢時潮の必然の氣に因りしものと見做さんと欲す。二官すればテニソンはキーツが子にあらずしてキーツと同腹の弟なり。

而してテニソンの好尚は少時よりキーツに比して多方面にして受容の量一層大に且つ序を逐うて進前する歩武亦たキーツよりは確實なりしなり否な此の點に於てはテニソンは如何なる詩人よりも上にありしなり。彼れは詩人の天職と自己の天才とを認識し古人の名作を讀むも曾て之れが爲に逡巡若しくは眩惑することなく寧ろ其の短所及び不熟の個處を發見して自ら深く警めたりき。之れに加ふるに彼れは詩人として夥多の長所を有せしかば其の初期の作中にても"Claribel" "Mariana" "Recollections of the Arabian Nights" "Ode to Memory" "Dirge" "Dying Swan" "Oriana" の如きは屢口誦して益〻其の妙味の津々たるを覺ゆ。而して第二期の作に至れば思想風姿共に復かに此の上に在り彼れは一作より一作と上進し讀者はた一作より一作と其の賛美を加へしなり。かくて其の卒業期の作に至れば思想の高遠なる想像の美妙なる辭句の精練なる曾前作の比にあらず。此の期のテニソンは其の繪畫的にして又音樂的なる所キーツ若しくはシェリーに讓らず。繪畫的にして音樂的なることは作技の上より見れば詩歌の極致とする所にして何れの時の詩人も之れに到らんと勗めしは明かなるとにして彼等の聰明なるものは能ふべくば先づ繪畫(色彩の美)を情感(センス)と化し此の情感を音樂(聲調の美)と化し以て詩歌に併せ現さんとなしゝなれど能く其の目的を達し得し者を數ふれば英國古今の詩人中たゝ五指を屈すれば足りぬべし。成熟期のテニソンは此の隨一人なりしなり。加之彼れは其の先進が繁詞を以て歌ひしもの(例へばチルダオルスが『エキスカルシヨン』の如き)を醇化して短篇となし無限の情致と幾多の變化とを盡し其の言々句々をして讀者の心脾に沁せしむ。この點に於て彼れに匹敵すべきものは疑ふらくは古今唯一のシエークスピアあるのみならんか。スペンサルが『宮殿』及び『夢』の二篇はやゝ遐般の趣致あれども其の度は復かにテニソンの下にあり。キーツ、シエリー、コールリッヂ、ブレーク等時に此の技を試みざりしにあらねど到底テニソンに及ぶべくもあらず。且つや"Oenone"の律調壯大なるは彼の

山海の如きミルトンが無韻律語をも凌ぎ"The Lotos-Eaters"の荒唐にして雅趣なるは彼の夢裡の天樂に比すべきスペンサルが『神女王』にも讓らず。

さてテニソンは時代の精神を歌ふに於て二樣の方面を取りき自然界を主觀的に歌ふこと、十九世紀の精神を以て過去の事蹟を歌ふこと、是れなり。前者の可憐にして情致あるはヲルヅヲルスより得たりしものにして而もヲルヅヲルスの如く乾燥低調ならず後者の華麗にして濃厚なるはスコット、バイロンより來りしものにして而も彼の二人の如く淺露粗野の失なし。蓋し彼の三詩人は嚴密にいへば其の思想も感情も到底テニソンの如く十九世紀的にあらざりしなり。

エドワルド、フィッツゼラルド嘗てテニソンを論じ一千八百四十二年の作を以て其の全盛期とし以後を老衰期とせり。恐らくはこは其の觀察の單に外形に止まりしよりの誤謬にはあらざるか。げにも一千八百四十二年の頃はテニソンが才華の天々としてにほひ出でたりし時なるべし若しくは其の詞藻の蓁々として蔚茂せし時なるべし彼れが青陽の作と共に朱明の作は收めて當時の集にあり外形上の進歩は或はこゝに盡きたらん否な一葉飄零して山川漸く衣を脱するに至りては彼の白雲峽にたゝよひ紫電空に閃くの壯觀はまた見るを得ざるならん然れども白蘆野に滿つる黃禾の堅實、玄英天を閉づる索昏の玲瓏なるものに至りては到底秋冬期の作を措いて他に求むべからざるなり。フィッツゼラルドが老衰期の名は宜しく老成期と改むべきなり

此の老成期の最初に出でしもの二篇あり"The Princess"及び"In Memoriam"是れなり。是れ等の作に至れば其の妙は單に彼の詩躰と感情との調和若しくは繪畫的兼音樂的などいふに止まらで其の思想の根底に此等技巧以外に從容自若たる覺悟あるものゝ如し。二篇のうち前者はいさゝか滑稽の趣味を加へたる長篇の物語歌にして作者が苦心の作なり其の滑稽の如きは成功とはいふべからざれど其の兎に角に傑作の一たるを失はず。後者は温厚誠實なる著者が情誼のあらはれたると共によく當時の或思想を歌ひ得たる作なり。或思想とは彼の半懐疑的宗教想にしてテニソンは所謂「自由的保守主義」の人(否な寧ろ保守自由の間に彷徨せし人)なりしなり。『インメモリアム』に於ては彼れは iambic dimeter といふ律格を用ひたり此の躰は庸常の作家に用ひらるれば單調讀むに堪へざるを常とするもの

なれどテニソンは此の長篇によく之れを用ひて一句のたるみなく卷を終るまで厭倦を起さしむることなし以て其の韻語家としても當時第一流なりしを證す。

さてこの期の第三の作を"Maud"とす。辭句の詩的といふ點に於ては彼れが一生の作中第十に位するものにして Cold and clear-cut face,——と歌ひ起せる第三節の如き I have led her home, my old friend を以て始めたる第十三節の如き Come into the garden, Maud,——の第二十二節の如き、さては第二十六節なる O that 'twere possible——のあたりの調調は彼の絢爛目を奪ふ其の少壯の作にすらも見るを得ざるもの(否ポープにも三舍を避けざるべからざるもの)なり。さもあれかゝる辭句の上の巧妙を離れ詩として全躰に亘りて之れを見れば情理風韻兩つながら前の二篇の下にあるのみならず彼の"Spasmodic School"(際物派)と競爭して筆を際物に染め爲めに神聖なる詩人の風格を損ぜんとするに至りたり。或は傳ふ彼れ此の篇のやゝ識者間に不評なりしを介意し其の親友にして當時名望ありし某批評家に向ひ其の故を訊うて曰はく「君が"Maud"を俗受けの作といふは何の理ぞ」と。答へて曰はく「そは覺えなきことなり」。テニソン默思すること少頃にして又曰はく「否な君はまか

思はれしならん」と。此の批評家は決して『モード』を俗受けの作とはせざりしもなり而もテニソンの此の問を重ねし中心は既に察するに餘りありといふべし。

さて彼れはこれより愈〻精進して更に彼の"Idyls of the King"をものしき。此の篇に於てはよく前者の弊を脫し部分の妙味と共に全躰の興趣を存し辭句はた例によりて精鍊、識者を以て見れば識者の感ずべき所あり俗衆を以て見れば俗衆のよろこぶべき所あり。無韻律語の詩篇中ミルトン以來只稀にのみ見る所、今日に至るまでも前にはたゞトムソンが作"Seasons"のやゝ其の面影を傳へたるあるのみ。

さて遙かに晩年の作(例へば"Gareth and Lynette"の如き)に至りては流石に"The Princess"時代の英氣を失ひたる觀あり又"Pelleas and Ettrae""Balin and Ballan"等に於ては後進作家の詩風を摸したる跡あるに至りしかど尙ほ敢に跨りて顧眄する餘勇は"The Holy Grail"及び"The Last Tournament"にあらはれ來り。

テニソンの多才なるや其の作せし所一樣ならず山野の風物に關係せる物語歌あれば幽玄深邃なる哲理に關係せる瞑想の作あり古代の詩歌より飜譯せる軍歌もあれば寫景狀物を主としたる作もあり。又尋常の抒情歌あり又純然たる劇の詩

あり。就中狀寫諷詠の趣致はゆたかに當世紀を代表するに足れり。但し其の劇の時は寧ろ其の短所を示せるものなり。第一、科介の妙乏しく、第二、篇中の人物に彼のシェークスピアに見るが如き宛然入神の妙相無し。所詮テニソンは抒情狀景の巨擘、兼ねて物語歌の妙手なり。

テニソンそも何者ぞや幾多名詩人の擡出せし英國の後代に生れ幾多名批評家の群立せる十九世紀に於て詞壇の祭酒と推さるゝこと數十年未だ曾て一たびも其の名聲を損せず八十餘年の一生を神馬（ペガサス）の鞍上に送りて一たびも躓躇せず。回顧すれば英國の詞壇古來名家に富めりと雖も自ら詩人の天職を意識し其の天職の神聖なるを信じ十年一日の如く忠實に熱心に愼嚴に眞摯に勇猛精進片時も其の理想を忘れざりしものは果して幾人かありし。其の理想テニソンの如く其の精勵テニソンの如く其の妙技テニソンの如くして初めて十九世的詩人たるを得ん十九世紀の英國が之れを好遇せしは寧ろ至當の禮儀ならん。

終りに一言すべきは彼れと時勢との關係なりテニソンの如きはもとより未だ時世を先導せし作家とはいひ難けれども之れを豫言者と稱せんは溢美なれど每に當代を代表せりといふ稱は何人も否拒せざる所ならん。按ずるに彼れが作には每に宗教上、道德上、社會上すべて此等の問題に關する當時の進歩せる輿論の影映れり。勿論嚴密にいふ時は彼れが歌へる所は必ずしも當年最勝の思想にはあらず最も創新なる思索、最も進歩せる想念にはあらず而も其の作に見ゆる所は當時の眞相を反射せるもの、最も聰明なる英國人全躰の最近年に於ける修錬と經驗との結果、尚も當代の聰明者が自家の影なりとして首肯せざるを得ざりし者なり。此れ豈時勢を代表せる者にあらざらんや。或は晩年のテニソンを貶する者あり曰はく彼れはもはや英人の理想を歌ふ能はずと。然り彼れは豫言者にあらず詩歌を以て一世を導く能はざりしは明かなり而も彼れは決して當時の大問題を歌ふを忘れし者にあらずたゞ忘るべきを忘れ歌ふべからざるものを歌はざりしのみ解せざりしにあらず歌ふ能はざりしにあらず。又たとへ晩年のテニソンが時勢に後れしを實とするもそは功成り名遂げて簑を易へんとせし頃のテニソン也其の壯時のテニソンは正に新しき思想の謳歌者にして時には新理想の皷吹者なりき。例へば一千八百四十二年に出だしゝ『ロクスレー、ホール』を見よ、彼れは人物の

口を借りて自家の感慨を抒らし更らに轉じて將來の期望を歌へり是れ明かに時の改進派(リベラリズム)の希望なりき。尙後年に及び『六十年後のロクスレー、ホール』を著はして時の保守派が抱ける思想と疑惑とを歌へるが如し。或は又"Princess"を見よこれは當時の新問題たる女權論の旨に密接せるものなり。若しくは『美術殿』の旨を味へ是れはた當代の一奬たりし出世間熱の誤謬を諷刺し暗に眞善美の相關を說き世間と出世間との關係を歌へるものなり。『美術殿』の美術に於けるはSt. Simeon Stylite の宗教上の偏見に於けるが如し後者は主我的枯禪主義の奬を難じ世間的義務の重んずべきを說けり。何れもテニソンが理想の彫にしてまた當代思想の影なり。要するにテニソンが終生の理想は天法を畏敬するに在り精進を推奬するにあり秩序を亂さずして進歩するにあり義理を重んじつゝも人情を重んじ平等を愛しつゝも差別を愛し出世間に遊びつゝも現世間に處するにあり。(是れカーライルがキョオテに於て其の實例を見たるを喜びしものと相近し。)而して其の平生の行實も頗るよく此の理想に副へりしに似たり。テニソンの如きは思ふに詩人中の君子人たるに近かるべし。君子人にして大詩人たるを得んか十九世紀文學者の理想庶幾はくは此處に盡きん。

第十七章　ブラウニング及びブラウニング夫人

テニソンと世を同うして更に清新なる感情更に深遠なる思想を謳歌し遂にテニソンを凌ぐ名あるものをロバルト、ブラウニングとす。一千八百十二年五月生る、一市人の子なり。其の家資産饒かなりしに如何なる故ありてか小學にも中學にも入りしことなく幼きより專ら家庭にて教育せられき。始めて其の詩篇を公にせしは一千八百三十三年にて齡二十二歲の時なりき。"Pauline"と題したる篇是れなり即ち其の二十歲の時の作なり。ブラウニングが作に終始附隨せし一種の缺點は既に此の作に表はれたり而して其の傑特の詩才は未だ之れを認むるに由なかりき。此の作は作家自らも重きを置かざりきと見えて後年に出版せし自選の詩集には悉く此の初作を除きたり。此の篇に顯れたる特質は凡そ三あり、第一詩句の悉く劇白の躰なること、第二長き疊音(シラブル)の語の目立ちて多きこと第三彼れが作の特色と稱せらるゝ「晦澁(オブスキュリチー)」の甚しきこと是れなり。此の中第一と第二とは別にいふべきことなし但だ何が故にかゝる奇異なる劇詩躰を用ひしか審かならざるの

み。さて所謂晦澁の失は寧ろ一氣呵成(プレッスレッスチッス)を要とせし結果なるが如し即ち情の向ふ所やがて之れを筆に傳へ殆ど辭句の選擇をなさず偏に氣に任せて作せしが爲ならんか。さもあれ此の『ポーライン』は推稱すべき作にてはあらざりしなり。後ち二年を經て"Paracelsus"といふを著しぬことは前作に勝る數等なりこれも同じく劇白体の詩なりしが對問の呼吸圓熟し(到底上場の見込はなけれど)傾瀉するが如き急調(クレシェンドッス)と疾驅するが如き一氣(プレッスレッスチッス)とは其の無韻律語の特質を成し雜雜險晦の瑕疵あるに拘らず隱然一種の靈氣を具へおほろげながら作者が特得の美感を傳へたり。其の主人公パラセルサス及び其の友フェスタス及びマイケールは作者が得意の心(ソール)の解剖(ボッセクション)を適用して物せるもの、中にも伊太利詩人アプリール April の如きは彼の『アプリスト』のオイフリオン Euphorion の面影ありと稱せらる。要するに此の作は詞致に尙調はざる處ありて後の作に見るが如き莊嚴の妙はなけれど抒情詩としては獨創の一躰にして具に新詩人の初作たるに愧ぢざるものなり。而して世間の之れを遇するや冷々たりしがブラウニングは敢て其の詩躰を改めんともせず又二年を經て其の友某の爲めに"Strafford"といふ正劇を作せり。此の作妙處乏しきにあらねど如何せん其の思想例の如く時世に超越し其の表白はた含糊なりしが爲に之れを讀み物とせずして演ずるものとするときは興味索然たらざるを得ざりき。後ち又三年にして"Sordello"といふ劇を作しぬ此の作取りわけて異色を帶びたりしかば啻に俗衆に悅ばれざりしのみならず平生ブラウニングを愛讀する輩すら此の作者遂に其の作詩の方針を誤らんとするに非ずやと危みにき。かゝる疑惑は一千八百四十一年より同四十六年の間に出でし"Bells and Pomegranates"と總題せる詩集出づるに及びて跡を絕てり。此の集中の劇詩にも例の缺點は伴へりしが奇異なる"Pippa Passes"を除くの外は必ずしも讀者をして茫然自失せしむる底の異質あるに非ず而して其の抒情的短篇の或作に至りては優かに其の作者の單に語るに堪ふるのみにあらで歌ふにも秀でたる由を證したり。按ふに一千八百四十六年は彼れがはじめて大詩人の列に入りし年なり。同年エリザベス、バーレット嬢を娶りて妻とすテニソンと桂冠詩宗の選を爭ひしブラウニングは伊太利に遊び一時フロレンスに居を卜し妻の逝りしまではかしこに在りき此の間にものせし作は僅かに二篇

のみ "Christmas Eve and Easter Day" (一千八百五十年出版)及び "Men and Women" (同五十五年出版)是れなり。之れを既刊の二詩集即ち "Bells and Pomegranates" 及び "Dramatis Personae" (同六十四年ロンドンにて出版)と併べ稱してブラウニングが壯年期の傑篇を蒐めたるものとなす。こゝに至りてブラウニングの名聲漸く定り世間多數の讀者はた彼れが歌に一種深遠の意義あるを認むるに至りぬ。かく一千八百六十九年無慮二万餘句の長篇を著しぬ題して "The Ring and the Book" といへり道は四巻に分ちて出版せられ大に世に歡迎せられき。是れ或はたゝへてブラウニングが傑作となせる異躰の叙事詩なり。然れどもブラウニングは一時の虛譽に眩惑して濫作するの愚なるを覺り退いて筆を作詩に絶つこと十有四年此の間ひたすら精神を修養し或は人生の大問題を攻究し或は希臘の古詩歌を玩味しさて一千八百七十一年に至り再び詩壇にあらはれたり胸中成竹ありて詞藻また豐かなり最近英國思想の謳歌者としてブラウニングが名を不朽に傳へし作は蓋し是れより後に出でたり今其の名あるものを下に掲ぐ

'Balaustion's Adventure" (一八七一)。 Prince Hohenstiel-Schwangau" (同)。 "Fifine at the Fair" (一八七二)。 Red Cotton Night-cap Country (一八七三)。 "Aristophanes" Apology" (一八七六)。 La Saisiaz (同)。 Dramatic Idylls 二巻(一八七九—八〇)。 Jocoseria (一八八三)。 Fersbtah's Fancies" (一八八四)。

後ち又 Parleyings with certain People of Importance" (一八八七)及び "Asolando" (一八八九)の二篇を作し同八十九年伊太利にて沒しき齡七十八。

晩年の作中『アソランドー』は二十五年にものせし "Dramatis Personae" 以來の名作と稱せらる。總じてこの期の作には異樣の無韻律語を用ひ普通の話説躰と劇詩の獨白躰とを相交へたり。この獨白躰はブラウニングが終生棄てざりし筆致なり。

ブラウニングが作の是非は今尚ほ全く確定するに至らず況んや當年に於てをや。其の中年以後二三の聰明なる批評家の彼れが作の美を看取せりしが多數の讀者は摭雜、粗笨、險晦、含糊等の非難を挿みて一概に彼れを斥けたりき。或は附加して褒稱せし輩あるも只漠然と其の清新の致を認めし耳何れの個處に具體の妙あるかを明知せざりしが故に世間多數の喇叭非難(就中大學出身者の劇しき攻擊)に對

しては作者を回護するの辭を知らざりしなり。所詮當時のブラウニング黨が勢力はいと微弱にして宮に世間に向ひて十分にブラウニングを推擧する能はざりしのみならず自家はた其の妙を會得する能はざりしなり。然れども彼れが作も追〻に出で十年二十年を經過するにつれて世間の非難もまた嘗の如く頑ならず又其の景仰者も漸く其の所信を固め文壇の一隅に所謂ブラウニング社(カルタス)を起し一千八百八十一年には公然「ブラウニング研究會」といふを組織し入會者には其の趣意書を交附して贊成の意を表せしめ且つブラウニングが特殊の辭句譬喩等を解するが爲めに『ブラウニング辭典』を編するに至りぬ。崇拜者の運動是の如くなりしかばブラウニングを擯斥する輩更に起ちて反對運動を試みこゝに再び批評海の一大波瀾を捲き起しぬ。さもあれ今此等の憎惜を全脱し虛心平氣にして彼れが作を觀るにブラウニングは圓滿の詩人と稱すべからざるも偉大の詩人たること爭ふべからず其の缺點は單に其の外形にありて其の內容に存せざればなり。論者曰はく新詩人中の新詩人たりしブラウニングの如き作家には多少の破格も許さゝるべからず時尙に先だてる思想は時尙の言辭をもて表しがたければなり。

其の晦澁を以て難ぜらるゝも止むを得んや。カーライルが散文も嘗て晦澁の譏を得たり散文既に然り況んやカーライルよりも更に一歩を進めたる思想感情を新躰の詩歌に表はすに於てをやと。是れ今のブラウニング黨の所論の要たり。然れども更に一歩を進めて言はんに所謂新詩人は到底平順の語を以て其の情思を表はすこと能はざるか吾人は何故に彼れが險晦の咎を其の技(アート)の足らざるに歸するを得ざるか。新詩人にして此の技を具へたらば如何。例へばテニソンが或作の如きは雅馴穩健の詞致をもてして能く時尙に先だてる感想を歌へるならずや。否な所謂新詩人は何故に通常事を歌ふ場合にだに晦澁險怪なる語を用ひざるべからざるか云々。是れ非ブラウニング派の今尙主張する所なり。淑ぶものは缺點にだに私し難ずるものはひとへに其の短を擧げて其の長を蔽はんとす。論客が是非は常にかくの如しよく其の兩端を叩かんものはじめて能く其の物の眞價を知らん。按ずるに新思想を抱くもの世に之れを傳へんとするやひたすら言はんとするに急にして語を擇ぶに暇なく勢ひ含糊不明の章をなすこと多し。必しも「新思想を表白せん爲には新言辭を要す」と自識して後に然るにはあらじ論

者が此の故に其の技の不熟を非す當を得たりといふべし而も新詩人の作に遇ふや毎に技の不熟を咎め其の想の美を棄却せんか批評家の任務何の邊にか存する。抑〻批評家は一面社會の側(サイド)に立ち作者に對して適當なる注意と箴戒と奬勵とを與ふると共に一面作者の側(サイド)に立ちて世間の爲に新聲を通釋し懇ろに作者の足らざるを補ひ將さに來らんとする新思想、新信仰、新希望の光明を傳へざるべからず。此の約束に外れたるものは概ね批評家の本分を忘れたるものなり。畢竟ブラウニングが是非の由來はテニソンとの對照に基く所多しテニソンが典雅渾成の筆と相比して其の晦澁の一層甚しく見られたりしに因る。又其の格外に賞揚せられしは其の思想のテニソンに比して遙に高遠なりしと同時にテニソンに對する社會の歡待のあまりに甚しかりし反動なり。いづれにもせよブラウニングが運命は彼のバーンス、ギーッ、若しくはチルヅヲルス、シェリーに比すればむしろ幸ひなりきといはざるを得ず、彼れは其の在世中に十二分の景仰を得たればなり。以下少しく彼れが作について觀ん。

彼れが詩篇は其の形の上より見るに概して律呂(リヅム)と押韻(ライム)との調諧なきものにして其の詞の如きも往々にして滑稽劇の人物の白の如く或は電信用の文句の如く簡に過ぎて義をなさゞるが如きもの多し。言語を思想の符號とせば彼れが語は更に他語の符號たりしなり。其の長篇を讀者の厭ひて重に其の短篇をよろこびしは詞に所以あり。加ふるに彼れは詩中に於て或は「人心の解剖(ソウル、デッセクション)」を行ひ或は哲理上の議論を試み剩へ生硬若しくは險晦なる言辭を以て之れを行りしかば讀者はいよいよ其の解に苦みたり。彼れが作に對しては「質(マタル)」を減じ文(アート)を加へよ」と求めざるを得ざりしなり。さもあれ彼れが詩には一種いふべからざる情趣ありて知らず識らずの間に人を引き人を魅する力ある、ドライデン以後空絶と稱すべし。且や心理的研究(スタヂー)を利用して悲哀と滑稽とをほしいまゝにしたる、シェークスピア以外殆ど空前なり。セッツベリー曰はく「彼れが宗教は所謂正統宗ならずとするもまた彼れが哲學思想は漠然不整なるものなりきとするも神學哲學及び倫理學に關しては彼れ常に天使の側に立てりき、又其の政治意見の如きも其の甚だ茫漠として空理たるに過ぎざりしにも拘らず公明正大なりしと常なり」と。さてまた其の劇曲の方は舞臺的技術を欠きし爲に實際の脚本作家としては殆ど稱するに足る

ものなかりしも人物の性格を活現する技倆は頗る歎美すべきものあり。又自然の風物を歌ふに於てヲルヅヲルスの如く精妙ならざりしも其の自由宏恢の氣ある所は殆ど何人も彼れに及ぶ能はじ。要するにブラウニングは之れを抒情詩人として見れば最高の作家の一人なり。彼れは悲哀の歌をよくし又戀愛を歌ふに巧みなりき。總じて短篇に其の最長を見る。中にも"Asolando"に收めたる六篇の如きは壓調といひ色彩といひ思想といひ共に最も見るべきものなり。"Pippa Passes"に收めたる"Through the Metidga""The Lost Leader""In a Gondola""Earth's Immortalities""Mesmerism""Women and Roses""Love Among the Ruins""A Toccata of Galuppi's""Prospice""Rabbi Ben Ezra""Porphyria's Lover""After"等數十篇(殊に"Last Ride Together"の篇)の如きは抒情詩中醇乎として醇なるもの、彼のテニソンが夢幻的作物と相對して一代の珍たり。

ブラウニング夫人エリザベス、バーレットは夫よりも六歳の姉なりき又其の名聲は一般の讀詩社會には一時は夫よりも高かりき。夫人は一千八百六年ドルハムなるカルトンホールに生れき。父は西印度なる某地の領主なりしが家産豐かなりしかば或はヒアフォルドショアに或はロンドンに轉住し又デヴンショアに漫遊せり此の漫遊中エリザベスはいたく健康を害ひ加ふるに父厄に遭うて其の資産を失ひしかば決然一枝の彤管によりて一家を支へんと志し廣く古今の詩歌小説を讀み作文の初歩より自修を始め兼ねて希臘語をも學び刻苦精勵の末遂に一千八百二十五年"Essay on Mind"(『人心論』)といふ論文と數篇の詩歌とを世に出だしき。時に齢二十歳なり。これより十餘年間は別にいふべき程の作なし。同三十八年"The Seraphims"外數篇の詩を物しき(是れロバルト、ブラウニングが初めて文壇に出でし程の事なり)。同四十六年『詩集』を出版し此の年ブラウニングと結婚せり時に女史年四十一歳ブラウニングは三十五歳なりき。ブラウニングは家人の不承諾を意とせずして女史みづから擇びし夫なりきといふ。かくて夫に從ひて伊多利のフロレンスに其の病を養ひ同四十九年一子を擧げ翌年其の『詩集』を出版せり夫人が名作は大抵前年の詩集と此の集とに收めらる。其の翌年"Casa Guidi Windows"及び"Aurora Leigh"成り同六十年"Poems before Congress"成りぬ此の三篇は其の夫の詩に呼應する所少からざる爲め却りて其の特得の長所を損せし趣あり。翌年

六月フロレンスに歿しき。遺稿"Last Poem"は其の翌年世にいでき。

ロバルト、ブラウニング がもてはやされしは夫人が歿後なり其の生前にはバーレット女史あるを知りてブラウニングあるを知らざりし者多かりき。高遠なる詩人としては女史の其の夫に及ばざるや明かなれど夫人また英國の女流詩人(抒情詩人)としてクリスチアナ、ロセッチ女史を除きては前後及ぶものなき技倆を有せり。其の詩(殊に晩年の作)は夫ロバルトの詩風を學びたるが爲め詞句の意義不明なる所少からねどなほ其の夫の如く甚しからざりしのみならず間〻其の朦朧たるが爲に神秘的感情を寫し得たることあり而して其の少時の不幸と多病とより來れる悲哀の感想は屢〻可憐巧妙の詩となりて其の愛讀者を泣かしめたり。蓋し(一)其の至誠なる宗教心はよく其の作品を高からしめ("Cowper's Grave"は其の好例)(二)其の博愛慈悲の主義はフッドが作ヂッケンスが作と呼應し("The Cry of the Children")(三)其の女性の特技は其の家庭的切哀を寫すにあらはれ("Isobel's Child")(四)其の傳奇的空想("The Duchess May"及び"The Brown""Rosary")と(五)其の倫理及び政治の思想("Lady Geraldine's Courtship")はた讀詩社會の愛を博しき。さて其の辭句は律格押韻、共に嚴正なるにはあらねど諷詠の間言ふべからざる情趣あり、其の詞の選擇は間〻宜しきを得ざりしかど尚創新の譽れあり。其の悲哀を叙するや女子の癖とし、てやゝ饒舌に流れたる所もあれど眞實と純粋とを失はずして句々能く人を動かす。而して自然の風物を歌うて繪畫の如き妙ある當時テニソンを除きて敵するものなかりき。按ふに夫人が長く病みて其の病室に閉居せしや嘗て刻苦自修の際に硝窓を隔てゝ觀賞せりし遠山近水を憶ひ起し其の身の自由ならざる爲に一しほ自然の悠々たるを慕ひ之れを翫賞するの念更に深きを致せしものあらんか。さて夫人が十四行詩に至りては遠くテニソンの上にあり其の夫に送れる"Sonnets From Portuguege"の諸篇の如きはシエークスピア以後十六七世紀の名篇と伯仲の間にありと稱せらる。但し夫人が作に一大缺點ありそは女流作者の通弊ともいふべき一種の自信强く毫も他の批評を顧みざるのみならず反省の念に乏しく只管才に任せて作すること是れなり。識見素養の深からざる一女子にして之れを爲す、失なきを得べしや。其の律格と其の押韻と杜撰に流れたること屢〻破格の詞句また頗る多かりき。此の弊尤も其の早年の作に多しブラウニングと結婚せ

し後其の夫に敎へられて漸く之れを改めきといふ。而して其の主題を擇ぶや亦た甚だ杜撰なりき或は他が小說を其のまゝに歌ひ或は一知半解にして哲理を詠ずるなど識者の爪はぢきを買ふものの一二のみならず。要するに夫人は其の長所と共に缺點の彰しきことバイロンにも勝らんとせり。一言すればブラウニング夫人は實に一世の才女にして鬼才ブラウニングの夫人たるに愧ぢざりし者なり。』

第十八章　其の他の詩人

テニソンとブラウニングとが第十九世紀後半の詩壇に日月と輝きし時尙別に幾多の明星ありおの〳〵燦として天の各方に燿けりき。中につきて最も著きをマシウ、アーノルド。ロセッチ。ロセッチ孃。トムソン。クロー。ロッカー。リットン等とす。今順次に之れを略說せん。

(一)アーノルド

マッシウ、アーノルドは詩人としてテニソン、ブラウニングに次ぎしのみならず批評家としても一世に推重せられたり。一千八百廿二年に生る父は有名なる博士アーノルドにしてラグビー大學の敎頭なりき。幼時にはニッゲートとラグビーとの小學にて敎育を受け後ちベルリオルに轉じて一千八百四十年同校を卒業し同四十五年オーリエルの校友に推選せられき。これより學務監となりて終生此の務めに服しき。同五十七年より十年間はオックスフォールドの詩學敎授を兼ね令名いと高かりき。是れより先き同四十九年始めて"The Strayed Reveller and other Poems"と題する一詩篇を公にし又同五十三年には"Poems"(『詩集』)を世にいだしゝが後者は其の序文の巧妙なると名篇の多く收められたるとを以て名あり。同五十八年希臘劇と英國劇とを折衷せる戲曲"Merope"といふを物せしが此の篇はスヰンバーンが"Atalanta in Calydon"及び"Frechthens"と共に其の種の作中の傑篇と稱せらる。かくて後ち暫くは公務の多忙なりしと散文の著述の繁かりしとによりて詩歌を作する暇なかりしが同六十七年に至りて又"New Poems"といふ集を著し爾後陸續作を絕たず一生中の作集めて五百餘ページの大冊をなすに至りき。一千八百八十八年歿しき齡六十三。

現今に及ぶまでアーノルドを批評する者に二派あり一は彼れが散文を推重して詩歌を貴ばず一は彼れが詩歌を愛でゝ散文を珍とせず。兎も角も彼れは兩方面

に秀でたり就中詩人として世に知られしは散文家としてよりも二十年の前にありき。

アーノルドはチルヅチルスが最慕者にして其の晩年にはチルヅチルスが缺點若干を擧げて批評論難せしこともありしが其の私淑せしこと深かりしは其の詩躰に掲焉たり又ミルトンの風調をも學びたる跡あり。又半無意識にしてテニソンの影響を受けしことも少からず而もテニソン、キーツ等がローマンス派の流麗華縟なる作に對しては反動し力を竭して別に新古詩派(ニオ、クラッシック)を建設せんと欲しき。一面よりいへばアーノルドは所謂「正格(コレクトネス)」派に屬する者なりポープが十八世紀の正格派なりしが如くアーノルドは十九世紀の正格派なりき換言すれば結搆詩句の格法を重んじ辭を彫琢すると共に情理趣致の洗錬をも勗めたりき。されば其の作の最も秀でたるものに至りては其の妙十九世紀詩人中第一に位すべきものもありしなり。批評と創作とが別才に屬することは嘗て論ぜられたる所なれども最近代の論者は一歩を進めて「批評の能なき詩人は未だ圓滿といふべからず而して詩才あり批評家は眞に無上なり」といはんとす。第十九世紀の詩人について之れを見るに獨りコールリッヂはアーノルドより五十年代の前に出でゝアーノルドにひとしき學者にして兼ねて詩人としては寧ろ一等を進めたるものなりき而も其の自作自評はアーノルドほどには嚴ならざりき。スコット、バイロン、キーツに至りてはもとより正當の學者批判家にあらず、シェリー、テニソンは亦批判家たる譽れなかりき。此れによりて之れを觀れば或一派の徒がアーノルドを稱揚して九天の高きに世かんとするも其の所以なきにあらず。

自作自評して自ら勵むことはアーノルドの夙に實行せりし所なるが故にや其の初期の作既に見るべきもの多し。中にも最も名あるもの二三を擧げんにシェークスピアを歌へる十四行詩(ソンネット)は莊麗にして嫻雅坐ろにドライデンが名句を聯想せしめ"Mycerinus"とふ六行一解の詩はよく光をテニソンと爭ひ"The Church of Brou"は結尾に無限の餘韻あるを以て名あり(こはアーノルドが一生に通じたる特色なり)。其の他"Requiescat"は精妙なる挽歌と稱せられ"Switzerland"には斬新奇警の一躰あり、其の獨白劇(モノドラマ)"Strayed Reveller"及び"Empedocles on Etna"はやゝ後に成れる"Merope"と共に一種の抒情詩として大に見るべきものなり。物語歌には優婉なる

"Sohrab and Rustum" あり。"The Sick King in Bokhara" "Balder Dead" "Tristram and Iseult" "The Scholar-Gipsy" の如き皆佳作なり。總じて短篇を佳とす是は十九世紀後半期の詩歌の特質なるが如し。中にも"The Forsaken Merman"は觀念の深邃よりは思想の創新と興趣の湛々とを以て著はれ "Dover Beach" は彼れが散文中の殊なる宗教思想を聲調めでたき韻語をもて表はしたるが故に名あり而して "Becchanalia" 及び "Summer Night" これに次ぐ。アーノルド又追懷(メモリアル)の詩を好みきヲルツヲルス及びハイネを歌へるものの如きは其の好例なり。就中『エストミンスタル、アッベー』は其の語意の莊重端嚴ミルトンが "Nativity Ode" に匹敵すべしと稱せらる。蓋し此の作のミルトンを聯想せしむるものあるは決して偶然にあらずアーノルドは常に詩題の選擇に重きを置きて經營頗る力めたりしなり。現に前にいへる『詩集』の序文中に「詩題」に關して論じたることあり謂へらく「詩歌の貴きと然らざるとは全く主題の大小によるともいふべし些末の事を捉へ刹那の想感を寄せて之れを歌ひ以て一時の歡を買はんとするは是れ豈に最近詩人の通弊にあらずや。かゝるに詩篇を取りて之れを推奬し兎に角に其の多からんを望む是れ豈に最近批評家の通弊にあらずや。百千の螢火は一月の明に如かず片々たる斗筲の小品朝に作せられて夕に讀まる爲す所果して幾何かある」と。按ずるに古今の大詩篇主題の大なるものもとより多からん而も其の盡く然るか否か輕々しくは斷ずべからざるなり。所謂大詩篇とは何ぞ。絶妙の詩篇といふ意か。主題の大ならざるもの何故に絶妙なるを得ざるか。大主題のみを歌ふべしとせんか詩人の主題は遂に盡くるの虞なきか。惡くアーノルドがいふ所に從はば吾人は遂にミケランゼロ又はレオナルド、ダ、ヴンチエ等をすてゝ彼のピラミッド若しくはエスキュリアルなどいふ粗大なるものゝ計畫者を尊ばざるを得ざるに至らん。豈にかゝる理あらんや。蓋しアーノルドが作はた常に彼れが言に副はざりしものゝ如し。そは兎も角も彼れが作の最も巧妙なる者に至りては(其の數割合に少きだけに)英詩の衆妙を盡したりと稱して溢美ならざるもの間々あり。是れ彼れを好む者の彼れをテニソン、ブラウニングの上に置かんと欲し彼れを好まざるものだに其の人道(所謂大題目)發揮の功をたゝへて彼れに同情を表する所以なり。

(二)ロセッチ及びロセッチ孃

前にもいへる如くマッシュ、アーノルドはもとヂルヅヂルスの流れを汲みて其の詩田に潔せし人なり而して彼のキーツ、テニソン一派がロマン、チックの潮流に對しては力を極めて其の防遏に勗めしか故に此の流れは爲めに方向を轉じて所謂プリ、ラファエル的運動 Præ-Raphaelite Movement の一潮流となり延いて今日の詩界に及べり。ロマンチックの派とプリ、ラファエル派とは共に彼の宗教上の一派、オックスフォールド派の運動と密接の關係を有し始終これに助けられて其の勢を加へしものなり。さてプリ、ラファエル派の起りしは第十九世紀の中葉にて當時はアーノルドを首めとして有力なる詩人批評家のうちにこれに反抗せし者も少からざりしが此れ等二三子の死後は其の志を繼ぐ英才なく而して新派の方にはロセッチ、モルリス、スヰンバーン等の名家出で中にもスヰンバーンの如きは今も尚存生せる程なれば此の派は遂に全勝を得現に英國詩壇の大半を占領す。

ガブリエル、チャールス、ダンテ、ロセッチ(通稱ダンテ、ガブリエル、ロセッチ)は一千八百二十八年ロンドン府に生れき。父は詩人と批評家とを兼ねたりし伊太利人にして本世紀の初め本國に於て Carbonare movement といふ運動に與みして脱國し先づメンタに走り次いで英國に住みこみし者なり。かくて英國にて妻を娶り(伊太利人と英國婦人との間に生まれし女)四子を擧げき皆文才ありガブリエルは其の第三子なり。兄 W. M. Rossetti は有名なる批評家にて姉マリア、フランセスカはダンテの略評をものして名あり(妹クリスチャナ、ヂョルヂナにつきては後にいふべし)。さて父はロンドンなるキングス、コレッヂといふ大學にて以太利文學の教師となりて熱心にダンテを講説しガブリエルも夙に此の學校にて教育せらるゝことゝなりしが彼れ生來いたく繪畫を好みしかば十五歲の時同校を退學しロイヤル、アカデミーに入りて畫を專攻することゝなりぬ。かくて二十年間は此の業に從事して名聲ありき。されども幼時より作詩にも從事し一千八百五年にはプリ、ラファエル派の雜誌に "Germ" と題せる詩篇を掲げ同五十六年には『オックスフォールド、アンド、カムブリッヂ、マガジン』といふ雜誌の寄書家となり同六十一年には古代以太利誌の譯譯と自作の『詩集』とを公けにしき。同七十年又『詩集』を著し後八年にして "Ballads and Sonnets" を出版せり。一千八百八十二年病を得て歿しき。齢五十五。

以上の詩篇は大抵彼のモルリス、スヰンバーン等の作に先導せられて世に出でし

が實際を言へばロセッチの二人に彫琢せし所も尠からざりしなり。此の三詩人は全く同一の詩風を奉じて立ち以て一派の根底を固めしものなれど流石に各々特色あり。モルリスは佛蘭西英吉利の中古の詩風を慕ひスヰンバーンは廣く自國古代の作に其の模範を求め而してロセッチは傳來の以太利文學の上に脚を立てんと試みき而も共に中古派に屬せしは明かなり。ロセッチが壯時の作"The Blessed Damsel"を取りて之れを見るに其の想を全くダンテが或節より取り來りてこれに中古佛蘭西風の快活と中古英國風の創新とを加へたるが如き跡歴々たり。否なる彼れが一生の作は大抵然るのみならず中古の荒唐なる思想感情に加ふるに十九世紀風の半ば神秘的なる幽玄の趣致を以てせしものいと多し。初期の作中見るべきは"Love's Nocturn""Troy Town""Sister Helen""Penumbra""The Woodspurge"等なり。第二の『詩集』は前の『詩集』に追加せしものにして前のに比して異風なるは"Rose-Mary""The White Ship""The King's Tragedy"等の物語歌の加はりたるにあり。以下少しく彼れが特質を評せんか。ユミー、シャープ曰はく

彼れに取りては戀愛は一種の神秘的情熱(ミスチカル、パッシヨン)にして、美もまた幽遠不可思議なる精靈の意義を一種の符合を以て表現せるものに外ならず

と。げに彼れはかゝる點に開してはダンテとやゝ趣きを同うせり。ロセッチの戀愛は闇黑面なき戀愛なり。人間に於ける天道を鞏固にするもの是れ即ち彼れが戀愛にして斯かる戀愛は男女が形躰以上の美若しくは恒に「精靈に宿れる形躰の美」を相思するより生ずるものなり。而して其の精靈といひ天道といふは皆中世以太利詩人のいへりしものに同じく最近英國の思想には既に跡を絶ちしものなりしなり。實に「彼れは最近の思想に對しては殆ど感ずる所なかりし」ものゝ如し十九世紀歐洲思想のほのかにも見らるゝ作は一生中二三篇に過ぎず。

要するにロセッチが特質は其の作の繪畫的なるにあり其の中古の思想感情をスコットより一層深く詩中に蘇生せしめんと勗めながら尙十九世紀的幽玄の趣致を帶ばしめたるにあり其のコールリッヂ、キーツによりて一たひ試みられ更にテニソンに至りて漸く成熟するに至りしロマンチック詩句及び語調を一層圓熟せしめたるにあり。シャープ又曰はく

早年に於けるナルダナルスとコールリッヂとの間には作詩の標的に於て著き差あり日常

の生活を詩界に取り入れんとするはナルダナルスにして實在の眞意義を現はさんが爲めに實際以上の事柄を默ひ以て人間の感情の度を知らんとせしはコールリッヂなり『エンシェント、マリナル』『クリスタベル』『クブレー、カン』の如きはこれなり。而してキーツまた彼の「永く忘られたる仙境」の秘を探りて其の"La Belle Dame Sans Merci" "The Eve of St. Mark"の篇を得たりき。而してこの二人が數回遊歴を試みし此の異境は實にロセッチが生國にして妖嬌仙童の出沒往來する此の夢幻の靈域はロセッチが得意の彩筆に最も適したるものなりしなり云々」。

ロセッチの小妹は名をクリスチナ、ヂオルヂナと云ふロセッチ嬢とて才貌双絶の名ありき。嘗て兄ロセッチがテニソンの作"Morte d'Arthur"に基づきて皇后の愁然として思ひくづをれたる姿を畫きし時其の畫の標本となりしは此の女なり。一千八百三十年に生れき。熱心敬虔なる教會員にして母に仕へて孝順身を持すること貞淑女詩人の模範たるに堪へたりき。同九十四年に歿しぬ。

其の作は多からず初めてものせし詩篇は題して"Goblin Market and other Poems"といひ一千八百六十一年出版せられき。次ぎを"The Princes' Progress"といひ同六十六年兄ロセッチの挿繪を添へて公にしき。數年の後"Sing-Song"を著しぬこれより同八十一年までは取りたてゝいふべき作なし。此の年"A Pageant and other Poems"を著はしき。

今日に於けるロセッチ嬢が評價は甚だ高く批評家は之れをブラウニング夫人に比較して其の變化の多きと作の夥しきとに於ては彼れに劣る所なれど其の瑕疵いと少なく未練長舌の類なく溫柔優雅なる點は彼の夫人に優るとなせり。兎に角大躰よりいへは英國女詩人(抒情詩につきていふ)中嬢に匹敵するもの殆どなしともいふべからん。其の最初の集に於ては彼のプリ、ラファエル派の特質のあまり著く現はれやゝ厭はしく思はしむる情を惹起するものあれと次ぎにものせる"Dreamland" "Winter Rain" "An End" "Echo" "The Three Enemies" "Sleep at Sea"樂曲"When I am dead, my dearest" 及び夥多の十四行詩は何れも精妙の頂に達しよく此の派の粹を表はせり。而して"A Pageant and other Poems"は前の二集に比して嚴肅の趣致滑稽の旨味双つなから勝りたり蓋しロセッチ兄妹は共に諧調に長じたりしなり。

要するに其の名作を收めたる"Collected Poems"一卷は英國古今の抒情詩集中稀に見る所なり最も可憐にして情趣深き花籠にも喩ふべく嬢が贈遺の餘香は今尚馥

郁たる感あるなり。

(三)オショウヂシー及びトムソン

プリ、ラファエル派は今も尚ほ盛んなれども當時(今より三十年前)に於てはロセッチ及びロセッチ嬢とモルリス、スヰンバーンとの外は其の派の作家中世に聞えたるものもなかりしが、尚仔細に該派中英才を探れば John Addington Symonds (兼ねて散文の名家たり) Philip Bourke Marston (逸才の盲詩人なり其の名はたゝ朋友間に高かりしのみ) Gerard Manley Hopkins) 二十年間教會の僧官となりしかば詩名中道にして減しき) オショウネシー、トムソン等十數名あり。此處には末の二家のみを略叙して止まん。

オショウヂシー O'Shaughnessy (一八四四——八一) は大英博物館の館員なりき。詩集三卷あり "The Epic of Women" (一八七〇出版) "Lays of France" (一八七二) 及び "Music and Moon-light" (一八七四) 是れなり。別に遺稿一卷 "Songs of a Worker" と題して歿後に出版せられしが其の中 "Lays of France" は Marie の意譯にして "Songs of a Worker" の大部分もまた佛蘭西の最近の詩歌を飜譯せしものに過ぎざれば彼れが眞技倆は殘

れる二卷に於てのみ見るべし。彼れは例のプリ、ラファエル派の夢幻詩想の極端を悅べりしがゆゑに其の作世俗に厭はれ「人間的興趣(インテレスト)を缺けり」といふ批難を得て空しく其の生を畢へたり。思ふに彼れは自家のみを宗とせりし詩人にあらず例へば米の詩人エドガー、ポーに負ふ所などいと多し又彼れの音樂の好尚に富めりしは "Music and Moon-light" の詩編によく見へたり。要するに其の詩のあまりにロマンチック風に馳せて荒唐怪僻となりたるは厭ふべしと雖も尚ほ流石に棄てがたき趣味あり。

トムソン　十八世紀の末に出で、『四季の歌』作者として詩名を一世に揚げしジェームス、トムソンと同姓同名の詩人にしてプリ、ラファエル派中最も異色ありし詩人なり。一千八百三十四年に生れき。其の父は舟夫にして家甚だ貧なりしかは幼にして救貧院 Royal Caledonian Asylum に送られて教育を受け業を卒へて後或る兵學校に奉職せしが其の職適せざるのみかチャールス、ブラドロウ Bradlaugh 等一派の感化を受けて懐疑説をよろこび共和主義などを奉ぜしかば遂に一千八百六十二年に其の職を辭しにき。或は謂ふ其の厭世の最も著き動機

は其の愛着せし少女が死去せし事なりと。かくて後或は狀師の書記となり或は鑛山の吏となり或は軍事擔當の新聞記者となりて數年を送り竟に印刷業に從事しこゝに漸く生計の安途を開き、同八十二年に歿しき。要するに不平の間に人となり不平の間に業を執り終始不平の歲月を送りて生を了へし詩人なり而して其の不平の精神はよく其の詩にあらはれたり。又夙に散文家として名をあらはし時の文學を評せしがもとより殊なる素養あるにもあらず識見はた卓拔とは稱し難しされど着眼流石に奇警にして筆鋒また銳利なりき。彼のブラッドロウが"National Reformer"といふ雜誌にBVといふ假號にて屢々時文評を掲げしものは即ち此のトムソンなりき。當時はシェリーに私淑せりしものゝ如し。さて其の批評中間々見るべきものありフルード、キングスレー等は贊稱せりきといふ。一千八百七十四年初めて"The City of Dreadful Night"といふ詩をものして例の雜誌に掲げしが顧るものなかりき後八年にして又"Van's Story"等の篇出でしか讀者の冷遇は以前の如くなりき。かくて轗軻の間に逝りしや世人は遽かに其の作に注意し其の詩集は忽にして二三版を重ねしが作物いと少なかりしかは今尙其の眞價を定むること難し。"The City of Dreadful Night"は厭世的精神を以て一貫せる作也宛然たる虛無黨主義の深刻なる作にして冷酷なる狂憤の語辭時に人をして悚然たらしむ而もところ〳〵華麗莊嚴掬すべき情致あり。最後の作"Insomnia"亦た鬼氣あり。而して其の未だ幸福なりしころの作"Sunday at Humpstead""Sunday up the River""The Naked Goddess"其の他二三篇はやゝ光明界に近き作なれど尙ほ「狹隘一律にして不自然背理の悲愁」あるを免れず。其の消極的絕望的なる神秘界の消息を傳へて鬼哭啾々の聲あるところ彼のロセッチ孃が瑞氣靄々たる積極的有望的の神仙界を歌ひたる聲と相對してプリ、ラファエル派の兩面を表せるものと評すべし。

(四)第二級の詩人

(一)ダッパル Martin Fargulhar Tupper は一千八百十年に生れき。父はチャンネル島にて有名なる外科醫なりき。タッパルはチャータルハウスと基督教會とにて敎育せられ業を卒へて後ち評議員の職に就きしが性文學を好みしかば程なく職をすてゝ鉛槧に從事し重に韻語の作をものしき。一生の作中最も有名なるを"Proverbial

Philosophy" といふ一千八百三十九年に出版せられき。當時の批評家は其の庸劣を難じたりしが讀者の多きことは古今比なく版を重ぬること四十、純益二万磅に及びきといふ。同八十九年歿しき。いと温厚の人なりき。未だ出版に及ばざりし詩篇數十ありいづれも短詩の模範とするに足るものなり。前にいへる "Proverbial Philosophy" は其の傑作にして其の平易にして花やかなるところ尤も俗衆によろこばれし所以なり。

(二)テニソンが親交の詩人　アルフレッド、テニソンが作 "Poems by two Brothers" は其の二兄と共に作せしものなることは已に前にいひしが其の中長兄フレデリッキは今年九十一歳の高齢に達して今も尚ほ存生し筆硯頗る健なりといふ。次兄チャールス(一八〇八——一八七九)亦詩名あり殊に十四行詩に秀でたり。テニソンをして『インメモリアム』をものせしめし親友アーサル、ハラムは散文にも韻語にも名ありき取り出でゝいふべき長所とてはなけれど雅馴にして瑕疵の少きを見るべし彼の「ストルリング」社を開きし散文家ヂヨン、ストルリング亦たテニソンが親友にして時々作詩あり常にテニソンの詩風を模せりき。カーライルは彼れを評して詩文共にテニソンとハラムとの間にありとなせりき。

(三)トレンチ(一八〇七——一八八四)カムブリッヂの神教大學を卒業して監督牧師(アーチビシヨップ)となりし人なり。其の傑作 "Study of Words" は「學者的の詩歌中最も通俗而して通俗的なる詩歌中最も學者的なるもの」と稱せらる。彼れは重に中世紀のラテン文學中神秘端嚴なるものを英國に紹介することを力めたり。創作にてはアルマの戰を歌へるものゝ外別にいふべき作なし但し十四行詩及び讃美歌には見るべきもの多し。

(四)トマス、ゴルドン、ヘーク　其の作世に多く稱せられざれど詩としては珍とすべきものあり。"Old Souls" "The Snake Charmer" 及び "The Palmist" を其の三傑作とす。其の平生の主義に曰はく

> 苟くも完全なる詩歌と稱すべき詩歌は其の意義を理解するが爲めに讀者をして多量の知識を要せしむる底のものなるべからず。さりとて一讀して其の内包の一切が明々白々に讀者の眼に入るがよしとにはあらずたゞ智を以て謎語を解するに心を奪はれ詩を樂むの餘裕なきに至らざらんを要す。

と。彼れが作は此の主義を實現せるものといふべし。前に擧げたる三篇は更ら

なり "Madeline" "Parables and Tales" "New Symbols" "Legends of the Morrow" 及び "Maiden Ecstasy" 等皆同じ趣きあり。「多少の作詩の經驗あるものにして之れを讀まばげにもとうなづかるゝふし多かるべし」とセンツベリーがいへるさることなり。

(五) エーツーン William Edmonstoune Aytoun (一八三一——一八五六) は『ブラックウッド雜誌』の重要なりし記者にして法律と文學との記事に名ありき。地方長官にして大學教授を兼ねたり共に令名ありき。齢十七歳にして初めて其の詩を公けにしき。其の傑作は大抵 "Bon Gaulitier Ballads" 及び "Lays of the Scottish Cavaliers" の中に收められたり。後者は一千八百五十四年の出版なり。翌年 "Bothwell" といふ長篇をあらはし又同六十一年には "Norman Sinclair" といふ小説をものしき共に好著なり。彼れが一生の作を代表すべき "Lay of the Scottish Cavaliers" の詩体は悉くスコットのに倣ひたれば彼の平板の失に陷りたるは惜むべし但し瑰麗なる詞句に其の平板を破りたる所間々あり "The Island of Scots" "The Heart of Bruce" 等は其の例なり。要するに小スコットともいふべき作家にして熱心なるトーリー黨兼ぬて中古武士の愛慕者たりき其の抒情的想像は概ねこの性癖に制せられたる觀あり。

(六) スパスモディック派(暫且の感動を本とする派即ち際物派) 所謂際物派の起原は何年なりきとも定めがたけれど兎に角十九世紀の初めに起りしものなることは明かなり。按ふに彼の定期出版物の隆盛に際して雜誌新聞紙等に珍事異聞を掲ぐること盛んになり而して之れを散文の雜誌に見るのみにあき足らで更に之れを詩に詠ずることを試るに至りしや其の始めなるべきか隨ひて何人が其の最初の作者なりしか詳ならず。雜誌新聞紙類にたづさはりし者の中より誰れとなく何時となく行はれ始め漸く一派を以て目せらるゝに至りしならんか。もとより詩としては取るべき價値あるにあらず其の長所を擧げんにたゞ事の實際に近くして放膽の氣ありといふほどの事にて概ね巧遲よりは拙速を貴び一時の喝采を博すれば足れりとせしなり。今尚存生し "Festus" の記者として名あるベイリー Baily の如きも始めは此派に屬せりきといふ。

一時此の派の牛耳を執りしはシドニー、ドーベル Dobell とアレキサンダル、スミスとなり。共に十分の教育もなく秀でたる詩學上の意見もなく衣食に追はれて筆を一時に執りしものゝ如し。

シドニー、ドーベルは一千八百二十四年に生れしが家貧にして小學にも入る能はず家庭にていさゝかの教育を受けしのみなりき。さて長ずるに及びて父の業を嗣ぎて酒舗となり處々の市府に旅行し此の間に見聞を廣め後の著作に益する所ありき。一千八百七十四に歿して處女作を"The Roman"とゝ所謂書齋劇 closet drama なり一千八百五十年に出版せられき。後三年にして又"Balder"をものせり。此の作を彼のイブセンが"Brand"と比較するものもあれど如何あらん。クリミア戰爭はドーベルが得意とせし題目なり"England in Time of War"といふ作あり尙其の外にスミスとの合作"Sonnets on the War"といふあり。

スミス(一八二九——一八六七)が生涯詩風共にドーベルと大差なし。廿歳の頃"Life Drama"をものして喝采を博し後ち"City Poem"(一八五七)"Edwin" of Deira"(一八六一)等をものせしが晩年散文に從事して小話の類を綴りき"Dreamthorpe"(一八六三)"A Summer in Skye"(一八六五)は其の著きものなり。

ドーベルの作の取るべきは著想の異風なるにあり"Tommys dead"は其の傑作なるべし。たゞ其の篇餘りに長く且つ詞調平板なれば讀過に堪へ難し。スミスは著想ドーベルに劣れども辭句は巧なり其の處女作"Life Drama"最もよし。此の派に屬せしものゝうちにて他にやゝ名あるは

W. C. Bennet. William Cory (?—1892). W. C. Roscoe(1823—59). William Allingham (1824-89). Thomas Woolner. 等なり

(五) クロー、ロッカル及びリットン

アーサル、ヒウ、クロー　は如何なる故ありてか當時上流の人々より「悪詩人(バッドポエット)」といふ稱號を得たりしがこは別に故ありて、の悪名らしく彼れが作は決して悪詩と稱すべきものにあらず其"Qua Cursum Ventus"の篇の如きは諷誦三嘆措く能はざる名句に富めり。一千八百十九年オックスフォールドに生れき。幼時を亞米利加にて送り年少にしてラッグビーに赴きかしこにて夙に其の名をあらはせりき。後ちオーリエルの校友に推選せられしが一千八百四十八年之れを辭してロンドンなるユニヴルシチー、ホールといふ教育會院の長となり轉じて教育省 Educational Office に入り一千八百六十一年伊のフロレンスにて歿しき。初めてものせし詩を"The Bothie of Tober-na-Vuolich"とゝふ次きて"Amours de Voyage"及び"Dipsychus"成りぬ。

此の三篇はやゝ彼の際物派の風あり。後また"Ambarvalia" "Bothie" 等を陸續出版せり。而して全躰に亘りて之れを見るにクローは十九世紀の懷疑思想に感染したりしあと歴然たり。蓋しクローの出でし時は恰もフルードのいへる如く「オックスフォールドは信仰と不信仰との二氣が有爲なる青年の腦裡に旋風の秋葉を捲くが如く相追驅せし」中心にしてクローは此の間に於て兩者の一に就くの輕忽にして危險なるを知り斷然中立してたゞ最も穩健なる道念に依賴して一身を修め以て靜かに大聖の降誕を待ちしが故に其の外貌一見甚だ卑屈なるが如く遂にセンツベリー等をして彼れは「信ずるの力を缺き反抗するの勇氣を缺きし」ものなる如く思はしむるに至りぬ。されどこは畢竟するに彼れが中心の頗る強健なりしが爲なるべし。ドウデンもいへる如く彼れが健全なる道念底より出でたる詩歌は他の徒らに懊惱する青年輩に取りては一貼の安慰劑とも稱しつべし。たゞ惜むらくは彼れが心中には信仰不信仰の兩々相軋轢して火を發するに至らざりしが故に其の詩篇に於て雲湧き龍躍る壯絶快絶の觀を見る能はざりしなり。

其の"Latest Decalogue"の諷刺は頗る見るべく田園詩の素朴また愛すべし。

フレデリック、ロッカル Locker は一千八百二十一年に生れき。初め海軍省に奉職せしが後ち官を辭して文學に從事し一千八百五十七年初めて"London Lyrics"といふ作を公けにせり。爾後多く作らず只だ時々彼の篇に追加せし外に同六十七年"Lyra Elegantiarum"といふ詞華集を出だし同七十八年詩歌と散文との雜著集"Patchwork"を公にせり其の伎倆はこの篇に於て見るべし。或はこの作を評して其の外形ソウシーが"Omniana"に似たりとせり實にさるふしなきにあらず。"My Guardian Angel"は短篇の逸話にして文致の簡潔雅馴なる同種中稀れに見る所なり。さればにやセンツベリーは「若しチャールスラムをして此の時代に生れしめて此の境遇に立たしめば必ずロッカルと同一樣の作をなせしならん」といへり。

リットン　小說家として名高かりしリットン伯の子なり名をエドワード、ロバルトといへり。但し其の世に出だしゝ詩篇には久しくOwen Meredithといふ假號を用ひたり。一千八百三十一年に生れき。十八歳にして外交官となりこれより三十年間歐洲の各國に轉任し遂に父の爵を紹ぎ同七十六年には印度總督に任ぜられき同八十年辭して國に歸り七年の後全權公使となりて佛京パリに赴き同九十二

年かしこにて歿しき。其の政治上の生涯かくの如く煩劇なりしにも拘らず詩歌の作頗る多し"Clytemnestra" (1855) "The Wanderer" (1859) "Lucile" (1860) "Songs of Servia" (1861) "Fables in Song" (1874) "Glenaveril" (1885) "After Paradise (1887) 等は其の重なるものなり。此の他傳記小説及び他人との合作詩集あり又遺稿は "Marah" 及び "King Poppy" の二卷となりて歿後に出版せられき。

リットンが全作についての眞價は今なほ定まらず。其の作いと多きのみか諸種の詩人の影響を受けて其の躰も種々なり。さりとて摸倣者とはいふべからず獨創の才も見ゆればなり。又批評家に撲斥せらるゝは俗受けを主となせるが故かと見れば世俗には寧ろ高尚に過ぎて悅ばれざる趣あり。隨うて批評は紛々たれど要するに彼れが聲價は其の眞價よりも下にあるが如し。彼れが詩風は晩年に至りて粗〻一定せしがごとくなれどはじめはテニソン、ハイネ、ブラウニング等其の他あらゆる名家の作に摸倣し時には換骨奪胎にもあらず斷章取義にもあらず他の趣向をも詞藻をも其のまゝに借り來て殆ど增減せざりしことあり爲めに剽竊家といふ非難を被るに至りき。然れども第一彼れが詩は抒情詩として得難き實際的眞誠的不易的の質あり以て其の詩躰の過麗なる缺を補へり"The Wanderer"の"Fata Morgana" "Buried Heart"の如き "March" の "Experientia" "Selenites" の如き是れなり。第二は其の獨得の反語風の話説なり、とは他の企て及ばざる所にして後には一變して寓言風となりしが若し初めより終りまで此の詩躰に從事して此處に其の脚を立てしめば其の名聲或は今日の如きに止まらざりしならん。

(六) モルリス及びスヰンバーン

モルリスとスヰンバーンとは詩統の上より見れば前にもいへる如く彼のロセッチと同派に屬す。其の中後者は尙現に生存しモルリス將た昨年逝り、其の評未だ定まらざる有樣なればこゝにはたゞ一わたり其の名作につきて略説しおくべし。

ヰリアム、モルリスは一千八百三十四年ロンドンに生れオックスフォールドなるExeter Collegeといふ大學にて敎育せられし人也。其の全躰の詩風はチョウサルが物語歌を師とし且つ"Renaissance of Wonder"『(荒唐復古)』を主義とせる一種新躰の物語歌を以て本領となせりしが如し。處女作を"The Defence of Guevevere"といふ傳奇風の短篇を集めたるものなり。例のロセッチ風にブラウニング風の獨白躰を雜へたる

ものなり。篇中ブラウニングにひとしく晦澁の個處も少からねど又一種の妙味あり。其のアーサルに關する物語歌はテニソンが"Idylls of the King"に比すれば遙かに劣れる作なれどテニソンの出でざりし前に出版せられしかば評は頗ぶる高かりき。モルリスが世界及び人間に對する當時の感想の最もよくあらはれたる長篇の物語歌をものしこゝに全く其の詩躰を定め遂に程なく彼の最大作 "The Earthly Paradise"(『地上樂園』)を作するに至りき。『地上樂園』は四長篇より成り一千八百六十八年より同七十年に亘りて出版せられき。

ノルエーの貴族二三名及び水夫若干この程或る海洋の中に彼の地上樂園ありと聞き其處へ赴かんとて船を艤してそこともなく浸々たる大洋に乘り出したるが途中にて暴風に遭ひこれより數年間海上に漂ひ種々の艱難を經遂に蠻民の住める一小島に漂着しそこにて件の蠻民どもより種々に歡待せられければ其の報いとしてこれより一年の間毎月二回其の知れる奇觀を物語りす

といふ筋なり。第一卷には三月より八月に至るまでの分十二篇を收め第二、第三、第四に於て九月より翌年の二月に至る十二篇を收め都合二十四篇より成れり。

チョウサルが『カンターベリー物語』の筋と相似たるを見るべし。こは作者も自白せし所なり。詩律もチョウサルのに同じく三種を用ひたり。さてチョウサルと異なる所は件の物語の間に劇詩的妙味を加ふる能はざりしことゝ、其の當代の事件を詩中に取り入れざりしことゝにあり。さて初めの三卷は全く英國古代の文致によりてものせしが其のアイスランド文學を愛するに及びしころの筆に成れる末卷にてはノルエー文士の敘事的筆致をも模したり。卷中の物語は孰れも作者の創案にあらず或は古詩歌或は古傳説の中より得たるものにて通常人の見聞きて無趣味殺風景の嘆語となせるものゝ中に一種の生命を發見しこれを醇化して生氣を與へ是れに衣するに典麗華穠の章を以てしたる也。而して此の長篇は話説の程合ひ其の宜しきにかなひ押韻句法亦た頗る變化に富めるが故に讀者脈倦の情を催さゝるのみならずよく篇中の人物と共に夢幻の境に遊ぶを得。且つ作者は大に自然界を愛し戸内よりは寧ろ戸外に於て生活せし人なるが故に篇中こゝかしこ自然を歌へる所清新快活の氣に富み時に人をして快哉を呼ばしむるものあり。

モルリスの作は尙"The Story of Sigurd the Volsung"及び"Hope and Fear for Art"の二著あり前者は一千八百七十六年に出版せられき。『アセニアム』(雜誌)は此の篇を以てモルリスが最成功の作となし其の文章の强健なるところ其の結構の劇詩的なるところ共に『地上樂園』の上にありとなせり。後者は同八十二年の出版にかゝる美術講話集(五回分)なり南歐の美術を推稱しラファエル以前の典雅高淑なる繪畫趣味を論じたるものなり。

アルゼルノン、チャールス、スヰンバーンはモルリスよりは三歲の弟にて同じくロンドンの人なり。少時佛蘭西にて敎育を受け一千八百五十七年國に歸りてオックスフォールドなるBalliol Collegeといふ大學に入りしが卒業に及ばずして校を退き二十三歲の時初めて脚本二篇を綴りて公けにす"The Queen Mother"及び"Rosamund"是れなり。共に一種の氣力なきにあらねど筆路結構なほ未だたど〳〵し。同六十五年又劇詩"Atalanta in Calydon"といふを作す想形共に全く希臘風のものなり想像豐富シェリーに次ぐとの好評ありき。同年又"Chastelard"をものしき。蘇國の女王メリーを主人公となせる悲劇なり女王が酷薄放淫の性格よく寫されたり之れが爲めに蘇格土黨の人々に頗る憎惡せらるゝに至りきといふ。翌年"Poems and Ballads"といふ詩集を出だしき。作者が彼の世間の批難に抗して美術は道德宗敎政治以外に獨立すべきものなりと極端に論じて愈〻物議を釀すに至りしはこの時の事なり但し當時の極端なる主義及び缺點は次第に後年に至りて緩和せられ若しくは除かれたり。同六十七年"A Song of Italy"をものし翌年"Seina"をものし同七十年"Ode on the Proclamation of the French Republic"をものし同七十一年"Songs before Sunrise"をものしき。一生中の最長篇を"Bothwell"とす同七十四年の作なり"Chastelard"の續篇として女王メリーの後日譚を識曲躰にものせる敘事詩なり全篇一万五千行を以て成り登場人物重大なるもの數十人の多きに及べりあまりに長篇なれば舞臺に上らしむる望みはなけれど人物の性格はよく現はれ殊に彼のフルードの史筆に基きて物せる女王メリーの如きは執拗多情酷薄にして又詭策に富めるところマクベス夫人の面影ありと稱せらる蓋し彼れが劇詩中の白眉なり。これより現今に至るまでの著作にて重なるものを擧ぐれば"Poems and Ballads"の第二集(一八七八)"Songs of the Spring-tides"(一八八〇)"Studies in Song"(同)"Mary Stewart"(一

八八一) Tristrum of Lyonesse (一八八二) "A Century of Roundels" (一八八三) "Marino Faliera" (一八八五) 及び "Miscellanies" "Victor Hugo" (一八八六) 等なり。

さて全体に亘りてスヰンバーンが詩を見るにシャープのいへる如く、思想及び意義の深遠幽遠よりも感情の華麗にして光炎あるところに其の長處は存するが如し。彼れが思想は到底ブラウニング、テニソン、アーノルドの深く且つ高きに及ばず否なブリ、ラファエル派中にてもロセッチ、モルリスの飄逸なるに及ばず。而して後年の作を取りて精査すれば第一、甚しくボクトル、ユーゴーの感化を受けたること第二、極端に小兒を愛すること(スヰンバーンは始終動もすれば極端に陷れり)第三、大に自然界を愛し殊に海洋を嘆美せしこと等の特質歴々たり。彼れは其の海洋癖を利用し以て其の詩調の變化を扶けたり平潮漫々欲帆の斜陽を帶びて走るが如き激浪渤湃虬蛟の雨を呼んで叫ぶが如き皆彼れが取りて以て其の壁調の素材となしゝもの也宜なる哉さばかりの長篇に於て讀者の毫も單調に厭くことなきや。實に彼れが詩は「意義の詩」といはんよりはむしろ「音調の詩」と名くべし。意義の上に於ては到底シェリーと併ぶを得ずと雖も音調の上に於てはよくテニソンをも凌がんものありとすればスヰンバーンが詩歌の名聲は兎に角に不朽なるべし。

尙ほ詩をものらせる第二流の詩人若干と其の作の一二を掲ぐること下の如し。

Lord Houghton ..... "Brookside" "Strangers yet"等

Alfred Domett(1811—87) ..... "Ranulf and Amohia"等

Charsles Mankay(1814—90) ..... "Cholera Chant" "O, ye Tears"等

Mrs Archer Clive ..... "IX Poems by V."等

Roden Noel(1834—93) ..... "A Little Childs Monument"等

Thomas Ashe(1836—89) ..... "Sorrows of Hypsipyle"等

Charles Stuart Calverley(1831—84) .. "Veres and Translations" "Fly Leaves."等

Lady Dufferm(1807—67) ..... "The Irish Emigrant"等

Emily Bronte ..... "Last Lines"等

Mrs. Norton(1808—76) ..... "Annuals" "The Lady of La Garaye"等

第十九章　最近小說家

第十九世紀前半の小說家は疊きに「新代小說家」の章に略說したる如し。彼等はもとより新代小說家の先驅たりしには相違なけれど之れを同後半期に出でし小說家と較ぶるときは其の間顯著なる差等なきを得ず。何ぞや。前半期の小說家も何れも一世の英才にして其の作に玩賞すべきもの頗る多かれどよく觀れば、時世との關係流石に未だ親密ならず隨うて「第十九世紀前半期の英才」と特稱すべき點乏しく寧ろ「いつの時代に置くも差支なき」底のものたり其の然らざる者だに新代小說家の特徵を備へたるは殆どなし。一千八百五十年以後に出でたる小說家は是れと異なりいづれも時勢の推動と大關係を有しオックスフォールド派の運動、科學の勃興、敎育の普及、美術の重視せらるゝに至りしこと、クリミア戰爭後英國の再び大陸政略に關涉するに至りしこと、盛んに滊車滊船を用ひて大に貿易を興せしこと、濠太利及附近諸島の開拓、印度騷擾 Indian Mutiny の後ち東印度會社の權力の移動及び一般社會に於ける改進主義（ベラリズム）の發達等の如きは皆此等小說家を影響する最大なるものなりき。さて一々につきて其の影響を精査せば大に我が讀者を益することあるべけれど今之れを試みん餘地なければたゝ就中最も著明なるブロンテ、エリオット、キングスレー等數名の上のみを略敍して止まん。

(一) シャロット、ブロンテ女史

清新獨創の思想と華麗遒勁の筆致とを以て新代小說の先驅をなしゝものをシャロット、ブロンテ Charlotte Brontë 女史とす。一千八百十六年に生れき。愛蘭土の人、ヨオクシヤアの牧師の女なり。姉妹五人あり幼にして母と二姉とを喪ひ處々を流遇し窮迫の間に敎育せられ竟に殘る二妹と共に敎師となりてブラッセルに赴きぬ。此の三人皆文才あり一千八百四十六年始めて合作の『詩集』("Poems")を公けにす。此の編皆匿名を用ひブロンテは Currer Bell と號し二妹エミリー及びアーンは Ellis Bell 及 Acton Bell と號しき。次ぎに小說の作ありブロンテは "The Professor" をエミリーは "Wuthering Hights" 及び "The Tenants of Wildfell Hall" をアーンは "Agnes Grey" をものしき。而してブロンテが "The Professor" は惡作なりとて出版を拒まれしかば女史はこれより大に奮勵し其の一世の名作 "Jane Eyre" の著に心を凝らし遂に一千八百四十七年を以て脫稿しき。されどもこれを購ふ書肆なく纔かにスミス及びエルダー二氏の好意によりて出版せられしが攻擊の聲頗る高かりしと共に讀

者また頗る多かりき。翌年エミリー沒し其の翌年アーン亦た歿しき。此の年女史"Shirley"をものし同五十二年"Villette"の作あり二年の後結婚し翌年みまかりき齢僅に四十。

ブロンテが作のかく一方に於て攻擊せられながら一方に於て非常の喝采を得たりしは女史が新小說の先驅たりしに因る。抑〻女史の出でゝ其の彩筆を揮ひしは恰もスコット既に死してサッカレー尙未だ出でずスコットが模倣者も概ね樣に依りて葫蘆を畫くに止まり讀者漸く其の千篇一律に飽かんとしヂッケンス一流が近代の家庭小說はた幾かに呱々の聲を揚げしに止まり其の四肢は未だ發達せずして宗敎的と懷疑的との間に蹌踉せし時にあり。女史が小說は此の過渡時代と新時代との間に架せる一橋梁にして實に女史が名をして不朽ならしむるものは一つにはかく新代小說の先驅たりしに因り一つには其の個有の特質の大に見るべきものあるによれり。所謂個有の特質とは何ぞや。女史が半世の閱歷より得たるものこれなり。其の傑作"Jane Eyre"に就きて見るに女主人公ヂェーンの性格の其の獨白躰の文章に於ていみじく現はれたるは更にもいはず「アンヒロー」「醜雄」ローセストルの如き人物を描きてよく其の神に入りし者は皆其の閱歷より來れること眞に衆批評家の喧々して止まざるが如し。按ふに閱歷の用を爲すは作者に詩人の資ありて後の事にして閱歷は詩人にとりては到底第二位以上にあるものにあらざれど三才直觀の大詩人だに尙且つ其の作礎として若干の閱歷を要すべく然らざるものだに尙ほ閱歷によりて大に其の文想を開發する機會を得べし、そは彼のバイロン以下の詩人に徵しても明かなりブロンテ女史が閱歷の其の小說を對けしことの少小ならざりしやまた爭ふべからず。然れども第二流以下の詩人を利するものも害するものも双つながら閱歷なり某批評家もいひし如く女史をして若し尙十年二十年の壽を保たしめこれをして例の如く小說に筆を執らしめば其の名聲恐らくは今日の如きを得ざりしならん。何が爲ぞや。女史が閱歷は女史の爲めにほゝ其の用を盡し果てたればなり。女史が多少の創意を加へきといふ「醜雄」の性格の如きも沙翁の大才あるにあらずんばよく之れを再びすること能はじ況んや女史が筆は少妹エミリーが如き妖嬌を欠きたれば永く諸者の愛玩を持續する能はざるべきをや。畢竟するに"Jane Eyre"の如きはたゝ一篇にてこそ珍品なれ

二篇三篇と續出するに及びては讀者漸くに之れを厭棄せんや必せり。論じてこゝに至れば實にブロンテ女史が蚤死は寧ろ其の幸なりしが如しと雖も又一方よりこれを觀るときは吾人はセンツベリーと共に

女史が文思は如何に薄弱にして其の飼藻は如何に粗厲なるも其の小說は兎に角に全く創新なるものにして決して過去のものにあらず現在及び未來へかけて生命を有すべきものにして其の文學史上の價値に至りては斷じてこれを摸倣小說の圓滑なるものゝ上に置かざるべからず。

といふべきなり。

少妹エミリーが作また名あり(一時はブロンテ女史を凌ぎたりしこと上にいへるが如し)。概ね短篇にして其の描く所の性格はた廣からずと雖も創新の點に於ては其の姉に讓らず、また晩近小說壇の珍什なり。

(二) ジョルヂ、エリオット女史

ブロンテがみまかりし一千八百五十五年の翌秋及び五十七年に於て "Scenes of Clerical Life" 中の一篇 "Auws Barton" といふ小說『ブラックウッド雜誌』に掲載せられき。著者はジョルヂ、エリオットと稱せり。ジョルヂ、エリオットとはマリアン、エヴンスの假號なり。女史が此の匿名を用ひて作せしや其の作巧妙なりしが爲めに大に讀時社會の好奇心を呼び起し作者の實名に就いて推側揣摩頗る紛々たり。或は之れを英國の敎會に屬する法敎師の著ならんといひ或は之れをケムブリッヂ出身の牧師ならんといひ其の他思ひ〳〵の想像を以て著者の素性をいひ中てんとし評壇騷然たること二年餘、迷誤は迷誤を重ねて著者をマリアン、エヴンス女と知るものなく獨りヂッケンスが烱眼のみ著者の到底女性なるべきこと及び万一男子ならば古來未曾有の女性的頭腦を有するものならんと看破したりき。マリアン、エヴンスとは何者ぞ。[illegible]マリアン、エヴンスは一千八百十九年英國ミッドランドの山間ワーヰックシアの一色に生れき。幼時は全く此の片田舍にて敎育せられ宗敎上の信仰頗る篤かりしが二十歲にして父に從ひコヴェントリーに渉りユニテリアン派の人々と相交りこれより漸く信仰上に疑惑を生じ遂に自ら敎會を脫するに至りぬ。女史がスピノザの "Leben Jesu" 『基督傳』を飜譯して始めて文界にあらはれしは此の時なりき。[illegible]

千八百四十九年父を喪ふすなはち去りて瑞西に赴きゼネヴの湖畔に素朴なる生活を營み、靜かに崇高なる道念と微妙なる詩思とを養ひ又大に古文學を研究することと一年餘、歸り來れば生活の急焦眉の間にあり即ちロンドンに止まり『エスドミンスタル』の社員となり又フォイエルブラークの"Wesen des Christentums"を飜譯しき。此の時女史はカーライル、ミル、スペンサル等の名士と交り大に啓發せらるゝ所あり又スペンサルの紹介によりてジョルヂ、ヘンリー、リユヰスと相知り遂にこれと婚して獨逸に遊びぬ時に一千八百五十四年なり。是に於て夫は『キヨオテ傳』を稿し妻はスピノザの倫理書を反譯して纔かに其の生を支へ此の間若干の知人を得て飯國せり。リユヰスはもと哲學者にして科學的頭腦を有し亦た詩人的狂才に富み小說作者ともなり得べき資質ありき其の批評の眼識は最も犀利にして夙に其の妻の戲曲的才能あるを認めしかば屢〻勸めて脚本を作らしめんとせり。エヴンス夫に勸められて遂に年來の神與を驅りて一篇の小說を作しぬ前にいへる"Amows Barton"はこれなり。夫妻はこの小說喝采の聲をあとにして再び獨逸に遊び第二の"Scenes of Clerical Life"を起稿しぬ此の著歸國の後脫稿し"Adam Bede"と題して出版せらる。讀者の喝采前者に過ぎチッケンス、スペンサルの如きも賞讃措く能はざりきといふ。一千八百六十年同じく第三篇"The Mill on the Floss"出づ而してエリオットの名聲全く定まり英國空前の散文的女詩人として騷壇一人も之れを稱揚せざるものなきに至りぬ。翌年"Silas Marner"の作あり價値前作に讓らず、同六十三年"Romola"成る文藝復興時代の伊太利の一話を材とせるものなり。これより"Felix Holt, the Radical"(一八六六)雜詩("Spanish Gypsy,""Tubal"等一八六八—七四)"Middlemarch"(一八七一)"Daniel Deronda"(一八七六)及び論文集"Impression of Theophrastus Such"等の作あり。同七十八年其の夫リユヰス歿す。二年を經て女史ヂ、ヨン、クロッスに嫁し同年十二月歿しき。一生の言行と書簡とは歿後其の夫の手にて輯錄せられ題して"Life and Letters"といふ。

女史は一方に於て大に自由を尊びしと共に敬虔の念に富み、剛毅なる丈夫魂と慈悲深き女性の情とを兼ね具へき。女史が朋友の慫きを顧みずして鰥夫リユヰスと婚せしが如き俠氣將たとの間より起りしものといふ。少しく女史が著作につきて見んに。

女史が著作は頗る多し詩歌論文飜譯等其の冊數殆と小説に匹敵す。然れども精しく其の質につきて見れば女史が詩歌はたゞ思辨ある同代人士の思想を歌へるに止まり其の歌ひざま淺薄露骨にして殆ど詩歌的美趣なく特に辭句の妙なるものなきにあらねど所謂粗布に施せる色彩にして絹布の光澤なし。其の論文亦要するに時の風潮の一波たるに過ぎず其の賞讃者を悅ばしむるに止まりて學者を益するに足らず。畢竟女史が眞價はその小説にあり一千八百六十年より同七十年に至るまで即ちサッカレー既に筆を絶ちてチャッケンス未だ傑作を出ださゞりし間に於て英國小説壇中人意を強うするに足りしものは獨り女史ありしのみ。況んやチャッケンスの歿後に於てをや。「英國空前の女作家といふも敢て盜美にあらざるなり。女史はそも如何なる著作を以て此の大名に副はんとせしか。

エリオットが小説を讀みて何人にも明かに了解せらるゝは此作者に二方面あるとなり而して件の二方面を代表せる作を"Silas Marner"と"Romolo"とす。第一女史はよくユーモアの眼を以て些末の人事を洞視し其の奇(オッディティース)を描きて巧みに人情世相の微を穿てり。"Silas Marner"はいふに及ばず"Scenes of Clerical Life"の各篇は皆よく此の種の伎倆をあらはせり。此の伎倆たる蓋し女史が小説に不易の價値あらしむるものにして亦女史が他の一面と比するも一層健全にして精妙なるものなり。按ずるにこれ女史が不幸なる半世の長日月間靜かに人世の辛酸を味ひたる結果にして其の成功は女史が結構的創才のいみじかりしに因るといはんよりは寧ろ其の諧調的觀察の精微なりしに因るといはんかた穩妥の評なるべし。蓋し女史は創才に豐かなりしにあらず寧ろ科學(若しくは準科學)を好めりしなり、此の科學癖は遂に女史をして第二の方面を作らしめき。女史が科學に偏する傾向は女史が"Silas Marner"をものせし後更に著くなり遂に特別の蘊蓄によりて"Romolo"をものして材を伊太利の文藝復興に取るや經營實に慘憺女史自らも我れ此の書の稿に著手せしときは妙齡の處女なりしも其の脫稿の際にはや白髮の嫗となりにきといへり。女史が勞苦の大なしりを見るべし。センッベリー曰はく

こゝに至りて女史の小説は活物にあらず。天才の創造にあらずして研究の製作なればなり。快通の逸作にあらずして苦心の修練なればなり。否なもはや觀察の成果にすらあらざればなり。

と。而して女史が此の研究の作は女史が近代英國を主題とするに及びて一層著くなりぬ。女史が後期の作は明かに或る「目的」を標幟としてものすることゝなりたり。然らば女史が目的とは何ぞや。女史が科學準科學とは何ぞ。

夫れ近世の科學は其の進歩の結果恰も人間の情(ペート)を破棄し其の愉々快々たる希望を絶滅せんとするものゝ如し。此の時に際し情を以て立たんとする人間は當さに如何してかこれに處すべき。所謂眞理の迫害に堪へてよく其の生存を保たんとせば情は如何なる決心を以て如何なる地歩をか占むべき。これ女史が其の想像の才を驅りて自ら解釋を試みし問題にして此に於て女史は成るべく科學的知識を吸引し其の心中に科學を經とし感情と緯とせるものを織り成さんと欲しき寧ろ其の最高目的の爲めに科學を使用せんと欲しき。この最高目的とは何ぞや。佛人シェーレル曰はく「思想の自由を主張する心と共に信仰の敬虔を尊ぶ念は女史が心の二方面なりき」と。而してこれを一貫せるものは唯一の眞心にして實に倫理思想は女史にとりて第一義のものたり感情と學理とは寧ろ其の左右に過ぎず。されば女史の科學を研究せしや主と倫理の方面に於てし一に倫理を目的として倫理のよく科學と調和し人情と調和したるものを得んとせんとせなり。而して此の研究の結果として女史は「世界に和樂なくしてたゞ安心あり」といふ結論に達したり。曰はく

> 世には(少くも現今の如き世には)眞の和樂なるものなし若しこれありとせばこれ其の人の心の淺薄狹隘にして世界の大悲痛を感ずる能はざるが故の迷妄のみ。心の大なるものは接觸するもの多し彼等は概れ悲痛に接觸す。彼れの處すべき唯一の方法はたゞ自恣(セルフ・リラクゼイション)の安心のみ云々

こゝに於て女史は此の上の研究を無要とし(或は寧ろ研究に堪へず)其の所信に就きてこれを表白することを力めき。女史が後期の作は多くかくの如くして成りしものなり。

女史はかくの如く世を哀觀せりき然れども厭世觀に陷りしにはあらず。人間は殆ど必然に罪惡に傾くものなり故に毅然として罪惡に堪ふる即ち最高の德(ヴァルチュー)最高の勇(ヒロイズム)なりといふ是れ女史が確信なりき。女史は常に此の思想を以て小說をものせしなり。故に其の人物は多く缺點ある人物にして美德の標範たるは殆ど絶無也隨うてふと見れば女史が倫理上の主義と矛盾背馳せるが如く思はるゝこれ

やがて女史の小説をして不朽ならしむる所以なり。女史は人間罪惡の必然なるを熟察し深くこれに同感し以て其の筆を執りしなり是に於て讀者は其の人物の缺點を知りて尙ほ其の愛すべきを感じ時には以て人間世相の實躰を見得たるが如き感をなす。是れを倫理小説の泰斗たるリチャードソンに比せんに兩者共に小説に倫理的目的を置く兩者共に英國的なり而も前者は自己の感想を作中の人物に注ぎて之を理想的ならしめ後者は作中の人物に自己を同化し自ら其の人となりて悲喜哀歡す。前者は主觀的といはゝ後者は客觀的前者を敎訓的といはゝ後者は心理的なるべし而も其の倫理的なるに於ては一なり。リチャードソンとエリオットとをしてかくの如く異同せしめしものはもとより品性の相異にもよるべけれど一つは明かに時勢の異同すなはち變遷に歸せざるべからず。讀者の人世觀の未だ哲學的ならざる時代に於ける倫理小説はリチャードソンの敎訓小説にして事足るべけれど讀者の人世觀の全く哲學的なる十九世紀に於ける倫理小説はエリオットの如き心理的のものならざるべからず。エリオット謂へらく今代の人士にはもはや敎訓の必要なし自ら思辯すればなり、且つや小説を以て敎訓の奴となすは美術を賊するものと。是に於て女史は其の所觀の世相に從うて心理的に之れを活寫し讀者をして自ら人間の何物たるを覺らしめ以て自ら處世安心の最良法を知らしめんと欲しき。是れエリオットが倫理小説の特質にして亦た最近倫理小説の特質なり。

女史の沒後其の名聲は生前の勢ひに反動して頓に墜落し遂に諸批評家をして女史が晩年の哲理癖を酷評せしむるに至りしがよく好惡を離れてこれを觀れば女史が倫理小説はもとより意義なきものにあらずまた其の小説的伎倆の尋常ならざるは更に拒言を容れざるべきものなり。

(三) キングスレー

シャルヂ、エリオット女史と同年に生れとれど同時代の小説壇に於て名聲相讓らざりしものをチャールズ、キングスレーとなす。風光畫の如きデヴンシャアの州中にて最も明媚の一邑なる法敎師の家に生れ和煦春の如き家庭に生ひ立ちし彼れは嚴格にして變化なきミッドランドの山中に生れて夙に蕭殺たる秋霜に惱まされたりしエリオット女史と共に各〻其の境遇の特色を表せり。前者は和平流溢、後者は森

嚴精刻而も共に十九世紀後半の思想を代表す。

キングスレー長じてロンドン及びケムブリッヂの大學に入り優等の譽を得て卒業し直ちにハムブシヤアなるエバースレーといふ處に宣教師となり一千八百四十四年牧師長に進み在職三十二年にして同七十五年に歿しき。是れより先きケムブリッヂ大學に聘せられ近世史の教授を擔當し九年間この職を兼ねたりしが小說家の眼孔を以て過去を觀察するが故に彼の些末の事實を把へて因果纒綿の模樣を述ぶることと義兄フルードにも讓らざりしが彼の「概括的史眼」に至りては到底フルードの才が一にも及ばず在職九年にして辭任し一千八百六十九年チェスタルの法教師となり同七十三年又エストミンスタルに轉じ竟に女皇陛下の師範に命ぜられき。彼れ嘗て西印度に航せしことと一回得る所少なからざりきといふ。

キングスレーは頗る多作其の種類亦た甚だ多く概ね劣作なし。始めて著作を公けにせしは一千八百四十四年にして題して"Village Sermods"といふ平明流暢なる論文集なり。次ぎに韻語の作若干あり一千八百四十八年"Saint's Tragedy"といふ悲劇をものしきハンガリーのセント、エリザベスの事蹟を材とせるものなり科介變化に富み豊詞華麗を極む。翌年小說"Alt aon Locka""Tailora nd Poet"の作なりこれより數年間に若干の詩篇をものしき(いづれも匿名)曾見るべし。

同五十八年"Andromeda and other Poems"をものしき此の篇六歩格を用ひたる最妙の詩篇と稱せらる。其の他の作にて名高きものを擧ぐれば"The Last Buccaneer""The Red King""The Three Fishers""The Sterlings"等あり。さて彼れが本領たる小說を見るに其の處女篇は一千八百四十九年に成りぬ題して"Alton Locke"及び"Yeast"とこゝり。文脉結構共に圓熟せすして時に尙生硬露骨の個處もあれど一種靈活の氣あり當時英國を聳動せし勞働問題民權擴張問題等を捉へて具象的にこれが解釋を與へたる點に於て裕かに一家の風ありといふべし。是れよりき先キングスレーは基督教社會派に入りてモーリス(Maurice)と相結び短篇を草して新聞雜誌上盛んに其の主義を發表し又Fraser's Magazine"の誌上に華麗の文章を以て文學上遊戲上其の他種々の方面より同じ主義を唱道せしが遂に彼の社會主義を描ける第二の小說"Hypatia"をものし引き續き一千八百五十五年に其の傑作West ward Ho!"を出だしぬ。二年を經て"Two Years Ago"成る、材をクリミア戰爭に取れ

るもの也。最後の作を "Hereward the Wake" とす一千八百六十六年に成れり。キングスレーに對する評論は今尚紛々たり。

キングスレーが社會上宗教上に關する意見は以上の著作の外公開の演說及び讃美歌、論文集等によりて發表せられ何れも多少の聲譽ありき。キングスレー等の社會改善に熱心なるや其の小說に累をなし粗雜なる議論癖は每に其の筆に伴ふに至りぬ。其の議論たるや論理錯然、趣旨散漫、情あまりありて語隨はず而して他の攻擊に遇ふや憤激怒罵毫も假借する所無かりき。彼れが詩歌小說の如きも概ねこの目的を以て成れりともいふべし(ニウマンとの論爭の如きはこの失敗の最も顯著なるものとす)。ドウゲン曰はく

キングスレーの一方に於て論客說教家たりしことは其の詩人小說家たりし方面に一方ならぬ不利を與へたり。彼れはあらぬ爭鬪の爲めに靜穩なる創作者たるを得ざりしなり。さはれ爭鬪はもと人間の本性に屬す何ぞ獨りキングスレーを咎めん況んやキングスレーが名作は件の爭鬪の主題たる社會問題に對するキングスレーが意見の所產たるに於てをや。吾人はただ其の平明なる說明的に流れて美術の神秘を忘れ人世の際微を歌ふ能はざりしを惜む。

と。而してこれを當時の風潮に徵すればキングスレーの此くの如きに至れる亦た止むを得ざりしものあるを知らん。實にカーライルもいへる如く所謂勞働問題は直ちに吾人が未來の大問題に屬す。苟くも熱誠ある士にして一たび眞面目にこれを研究せんか一歩は一歩と其の放棄しがたきを感じ來らん。蓋し勞働問題は實際的に人世未來の大問題なり熱誠燃ゆるが如き詩人にしてこれを研究するは敢て異とすべきにあらず況んやあくまでも實際的なる十九世紀の英國詩人に於てをや。此の問題たるや單に下級勞働者に同情するより成れる彼の社會主義とは大に趣を異にせり。其の主導は彼のモーリスにしてキングスレー、ラドロー(Ludlow)等これを扶補し一千八百四十九年を以て一盟社を建てにき。「基督教社會派」これなり。謂へらく人間は凡て上帝の兒孫なりよろしく基督を媒として相結合すべし基督教の正敎として奉ぜられん限りは彼の勞働者も相結合一致すべし勞働者も兄弟なり競爭を停めて共働せよと。該派の所說は實に此の如き單純なるものにしてカーライルは是れ粗暴なる凡神教的大言と罵りたりしも其の所說の生命に至りては容易に奪ふべからざるものあり。基督教の經典はこゝに至

りて愈〻人間に密接し又人間の肉躰と密接し陳腐の凡説と譏られしものも竟に一世の大問題となりぬ。實に當時英人中にても精神界の人間にして普通社會の人間たるキングスレーの如きは無く普通社會の人間にして精神界の人間たるキングスレーの如きはなかりしなり。

今委さにキングスレーが所説を評する餘地なけれどかくの如くにして成れる彼れが小説は明かに其の特質を現はし爲に多少の瑕疵を釀しゝにも拘らず彼れが天才は小説中の風景、性格、結構等にあらはれ當代殆と竝ぶものなき地に達しぬ。其の "Alton Locke" 及び "Hereward" 中の妙句は絶妙好辭と稱せられ就中前者のロンドン市中勞働社會を描き又ケムブリッヂの瀟洒なる風景を寫せるなどは爾後五十年間幾多の模倣者をして茫然筆を投ぜしむるに足りき。"Yeast" は其の劣作に屬すと雖もなほセンツベリーをして感情溢るゝが如く靈活の氣全篇に充實したる作にしてこの十分一の作だに尙ほ現今の小説界を動かすに足らんと激賞せしむるに至る。其の "Hypatia" の慘にして結構複雜なる "Two years Ago" の妙句に富める "Hypatia" のパノラマ的なる皆人の稱して措かざる所也。而して "Westward Ho!" の如きは愛國の士氣を以て充實せる歴史小説にして著者が社會問題を離れたる小説的創才はよくこの篇にあらはれたり。

〔四〕 Anthony Trollope は第十九世紀後半に出でたる一派の小説家の泰斗なり母はトロロープ女史(一七八〇—一八六三)とて "The Widow Barnaby" (一八三九) "Domestic Manners of the Americans" (一八三二)等の作を著して頗る文名あり。兄トマス、アドルファス(一八一〇—)亦た歴史小説家にして盛んに諸種の雜誌に寄稿せり。アンソニーは此の間に生れて(一八一五)インチェスタル及びハーロウの學校にて教育せられ長じて郵便局の吏となり此の間小説の作甚だ多く讀者の喝采殆んど當代に冠たり。一千八百八十二年に歿しき。翌年其の『自傳』出版せられきゝ委さに其の作の由來結構等を發表せるを以て名あり。一生の作甚だ多く中には散逸せるも少からぬど其の傑作と稱せらるゝものは多く『ペーセットショア叢書』のうちにあり即ち一千八百五十五年にものせし端物(スケッチ) "The Warden" 其の一生の名作 "Barchester Towers" 等あり "Doctor Thorne" "Framley Personage" "The Small House at Allington" "The Lost Chronicle of Barset" 等に至るまで皆この中に收めらる。其の他

にては"The Three Clerks""Orley Farm""Can You Forgive Her"及び"Phineas Finn"等皆一讀の價あり。

トロロープが小說は嚴にいへば彼れが宇宙人間につきて感得することの深かりしが爲めに成りしものにあらで寧ろ彼れが殊なる境遇によりて諸種の人物に接して其の外部の動作につきてとれを直寫したるものなり。是れ所謂寫實小說の一派にして毫も理想の分子を含まざる純粹の寫眞小說なり。此の種の小說や如何に上乘の位置に達するもなほ宇宙人間の眞相と對すれば間接若しくは三重間接のものなるに過ぎず、直接に宇宙人間の眞意を曉りて之れを描くものに比すれば文學的價値の遙かに劣等なりといはざるべからず。宜なり其の世に行はるゝも僅々一時の喝采を博するに止まり五年十年の後に至れば讀者また之れを顧みるなきに至るや。

〔五〕 チャールス、リード 千八百十四年オックスフォルドにシヨアに生れき。幼時家庭にて教育を受け其の後は全く獨學にて遂にオックスフォルド、マグダレン大學の校友に選ばれ同四十二年には法官となりしが其の始めて筆を執りしは同五十年の頃にして戲曲一篇をものしき。これより始終脚本の作ありしが成功の作無し。かくて同五十二年始めて"Peg Woffington""Christie Johnston""Hard Cash""Griffith Gaunt""Put Yourself in his Place"等の作皆該博百出人頭を解くもの少からず然れども彼れ好惡一方に偏し褒貶度なかりしを以て時に讀者をして眉を顰めしむるものあり。"Never too Late to Mend"(一八五六)The Cloister and the Hearth"(一八六一)の如きは舊教徒者流の激賞して措かざるもの也。「雜報小說家」の名あり些少の事實を捉へて能く咄嗟の間に其詩趣を傳へたればなり。又抒情詩に拙からず稍〻ローマンチック風の極に馳せたる感あれど亦た頗る味ふに足る。但近世詩人の常具たる批評的眼光の微々たりしが爲に主題の高下を選擇するに拙く隨うて可惜狂才も往々にして其の用途を誤りたり。

〔六〕 ヘンリー、キングスレー チャールス、キングスレーの弟にして名聲一時は阿兄をも凌がんとせりき。感想はやゝ微弱なる所あるも諷諧の力は彼れに過ぎ作

者としての性質は一層健全なりき。天禀長からず加ふるに多くは生活の爲めに筆を執りしかば十分に嗅足を伸ばす能はざりしは惜むべし。一千八百三十年に生れロンドンなるキングスコレッヂ及びオックスフォルドなるウースタルコレッヂといふ大學にて教育せられしが中ごろ退學して濠洲に移りかしこに住すること五年、一千八百五十九年故郷に皈り彼の地の物語を小説に綴りて "Geoffrey Hamlyn" といふ名篇をものしき二年後の作 "Ravenshoe" と共に一生の二傑作と稱せらる。其の後濠洲小説 The Hillyars and the Burtons" 及び其の他二三の作あり。一千八百七十六年に歿しき。其の作概ね腹案粗漏首尾相應せず時には支離滅裂に了れるものなきにあらねど兄チャールスに同じく光景、動作及び性格を寫すことに長じ且つ十九世紀作者たる特質あり少くも阿兄のに次ぐ作として何れも再讀の價あり。

〔七〕スチヴンソン Robert Louis Balfour Stevenson (通稱 Robert Louis) は第十九世期の後期に出でゝ小説に於けるローマンチック風の新派を創建せし人なり。一千八百五十年に生れき。父は燈臺の吏にしてスチヴンソンは其の技師なりき。エヂムバラ大學を卒業せし後は代言人をも兼ねたりしが二職共に其の性質に適せずして齢三十歳に近き頃より文筆に從事し『コルンヒル雜誌』に數篇の論文を掲げ又『ロンドン』の爲めに小話をも綴りき。これより引續き "An Inland Voyage" (一八七八) "Travels with a Donkey in the Cevennes" (一八七九)『コルンヒル論文集』"Virginibus Puerisque (一八八一) "Familiar Studies of Men and Books" 等の作あり。而して彼れが名聲の漸く著はれしは彼の有名なる "Treasure Island" を著しゝ後にあり。此の作は一千八百八十二年に成りにき青年の讀み物としてはマリアットの作以來第一に位し而して文學的價値は優かにマリアットを凌ぎたり。かくて後更に一轉して神仙譚を趣向し奇想天外より落つるの妙作 "New Arabian Nights" をものしつゝ同種の "Prince Otto" (一八八五) "The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde" (一八八六) "Kidnapped" (一八八六) "The Black Arrow" (一八八八) "The Master of Ballantrace" (一八八九) "Catriona" (一八九三)等を作しき。中にも "The Black Arrow" はヨオク、ランカスタル二家の奇話を本としてものせる作最もよく其の殊才を示せり。"Catriona" これに次ぐ。一千八百九十四年病を得て歿しき。其の作小説の他に "Child's Garden of Verse" (一八八五) "Underwoods" (一八八七) "Ballads" (一八九一)等

の韻語あり。

スチヴンソンの論文は流石に一種獨得の着眼の頗る見るべきものなきにあらねど論旨多くは散漫に失して堅實を欠けり。されば己れもまた其の短所たるを曉り遂に專ら物語を作する方に轉ぜしが其の神仙譚は多少の缺點あるにも拘らず尙ほ十九世紀の奇什として長く後昆に傳ふるに足る。彼れは其の話說躰の文章を得る前に方り大に內外の物語を玩味し甲に倣ひ乙に摸し頗る經營する所ありしが竟に一家の躰を定め一たび卷を開けばまた應接に暇なきを感ぜしむ。其のあまりに誇大に失し形容のわざとらしきは稍〻厭ふべしと雖もこはスコット以下物語作者の通弊ともいふべきものなれば必しも咎むるに足らざらんか。たゝ惜むべきは女性を描くに拙なることなり宮媛や處女や妖婆や大抵は活動せずされば篇中に女性の多きもの程兎角に興味の索然たるを感ぜしむ。例によりてこの時代の小作家を擧ぐる下の如しゝ

Wilkie Collins (1824–1889) チヤツクンス派の作家なり著はす所 "The Dead Secret" "The Woman in White" "No Name" "Armadle" (1857–66) "The Moonstone" Cruise upon Wheels" 等あり。

George Henry Lawrence (1827–1876)……"Guy Livingston" "Sword and Gown" "Barren Honour" "Sons Merci" 等

Mrs. Gaskell (1810–18)……"Mary Barton" (188) "Cranford" 等

Dinah Maria Mulock (1826–1888)……"John Halifax" "Gentleman" 等

Robert Surtess (?–1864) ……"Pickwick" 等

Major White-Melville (1821–1878)……"Holmly House" "Sarchedon Gladiators 等

Francis Edward Smedley (1818–1864)……"Frank Fairleigh" (1850) "Lewis Arundel" (1852) "Harry Coverdale's Courtship (1854) 等

第二十章　最近評論壇

定期出版物の興起と其の記者の特質に就いては既に前章に其の要を示しつ。今本章に述べんとするは此の定期出版物を牙營として最近の評論壇に勢權を握りし二三論客の特質に關してなり。然れども第十九世紀後半の文學界は他の點に於ても前半のと其の趣きを異にせるが如く定期出版物もまた從來のと異なれる所あれば批評界の變遷を叙するにさきだちて定期出版物の若干種につきて其の變遷の跡を檢するの要あり。

の韻語あり。

スチエンソンの論文は流石に一種獨得の着眼の頗る見るべきものなきにあらねど論旨多くは散漫に失して堅實を欠けり。されば已れもまた其の短所たるを曉り遂に專ら物語を作する方に轉ぜしが其の神仙譚は多少の缺點あるにも拘らず尙ほ十九世紀の奇什として長く後昆に傳ふるに足る。彼れは其の話說躰の文章を得る前に方り大に內外の物語を玩味し甲に倣ひ乙に摸し頗る經營する所ありしが竟に一家の躰を定め一たび卷を開けばまた應接に暇なきを感ぜしむ。其のあまりに誇大に失し形容のわざとらしきは稍〻厭ふべしと雖もこはスコット以下物語作者の通弊ともいふべきものなれば必しも咎むるに足らざらんか。たゝ惜むべきは女性を描くに拙なることなり宮媛や處女や妖婆や大抵は活動せずされば篇中に女性の多きもの程兎角に興味の索然たるを感ぜしむ。例によりてこの時代の小作家を擧ぐる下の如し。

Wilkie Collins (1824–1889) ヂッケンス派の作家なり著はす所 "The Dead Secret" "The Woman in White" "No Name" "Armadle" (1857–66) "The Moonstone" Cruise upon Wheels" 等あり。

George Henry Lawrence (1827–1876)……"Guy Livingston" "Sword and Gown" "Barren Honour" "Sons Merci" 等

Mrs. Gaskell (1810–18)……"Mary Barton" (188) "Cranford" 等

Dinah Maria Mulock (1826–1888)……"John Halifax" "Gentleman" 等

Robert Surtess (?–1864) ……"Pickwick" 等

Major White-Melville (1821–1878)……"Holmly House" Sarchedon Gladiators 等

Francis Edward Smedley (1818–1864)……"Frank Fairleigh" (1850) "Lewis Arundel" (1852) "Harry Coverdale's Courtship (1854) 等

第二十章　最近評論壇

定期出版物の興起と其の記者の特質に就いては既に前章に其の要を示しつ。今本章に述べんとするは此の定期出版物を牙營として最近の評論壇に覇權を握りし二三論客の特質に關してなり。然れども第十九世紀後半の文學界は他の點に於ても前半のと其の趣きを異にせるが如く定期出版物もまた從來のと異なれる所あれば批評界の變遷を敍するにさきだちて定期出版物の若干種につきて其の變遷の跡を檢するの要あり。

當時とても舊地方雜誌又は月刊雜誌類が悉く廢刊したるにはあらず『エヂムバラ評論』及び『ブラックフォールド雜誌』の如きは十九世紀の中ごろまでは盛んにヲオルヂ、エリオットの小說、キングスレー及びフルードの論文などを掲げ紙面の光彩頗る陸離たる者ありきされど新をめで舊を厭ふは讀書社會のならひなり彼等は其の記事の質の如何は置き只管題號の新を喜び躰裁の奇を求めしかばこゝに自ら機運一轉して新刊諸雜誌の續出を見るに至りき。もとよりこれ等多數の片々たるものゝ過半は所謂朝起暮廢の「三號雜誌」たりきと雖も此の間また自ら多少の改善創意の加はれるものあり、されば全躰よりいへば兎に角に前者よりは一段の進歩をなしゝと共に一方に於ては印刷輸送等の便利も加はり隨うて紙面も擴張せられ價額も低減せられ讀者の數も增しやがて遂に今日の狀況に至りたり。此間に於ける變遷の跡を尋ぬれば畧〻下の三段をなすべし。第一、週刊六ペンニー新聞の流行。第二、月刊雜誌の紙面擴張。第三、新月刊評論の發行。週刊新聞の中最も著名なるを"Household Words"(『家庭新語』)及び"Saturday Review"(『土曜日評論』)とす。

『ハウスホールドワルヅ』は一千八百五十年の發刊にしてヂッケンス主筆なり。大躰に於て『ブラックウッド』又は『ロンドン』と躰裁を等うしたり言はゞ其の發行の回數を增し價額を減じ論說の程度を低うして通俗のものとなし且つ政治上の評論を除きたるに過ぎざるものとも見るべし。主筆ヂッケンスは絶えず筆を執り別にベルワー、リーヴルなどいふ作家の寄稿を掲げ其の餘は自家門下の青年文士をして之れに當らしめき。其のうちヰルキー、コリンス最も名ありき。件の週報の長所は議論の通俗にして雜報文の輕快洒落なるにありき。但し中には『ロンドン』及び『ブラックウッド』掛持ちにて勤むる記者も交りたることなれば多少件の二雜誌の特質も加はり隨ひて其の躰裁も全く獨創といふべからず且つ美術文學の論の如きはもと二三の學者を益せんよりは寧ろ多數讀者の好尙を高うせんことを所志とせしかば一世の評論壇を支配するには足らざりしもこれによりて多少文學的思想を社會に布及するの功ありしは事實なり。これよりこの週報に摸して成りしもの夥多出づるに至りしが特に取りいでゝいふに足らず。

『サタルデー、レヰウ』は主義特質共に前者と異なり小說の如きは掲載することいと稀なり。との種の週報にして著はれしもの既に二種ありき一は『エキザミナル』

と題しハンツ、フォンフランク、フォルスター及びミントー等相續きて其の主筆となり當世紀の三分の二に亘りて紙面の光彩曾て衰へず。一は『ズペクテートル』と稱しRentoul(レントゥル)の主筆となりし以來聲價はじめて定まり持續して今日に至りぬ。兩者共に改進主義を以て立ちしが『サタルデー、レヰウ』に至りては其の初めは貴族主義を以てあらはれいつしかIndependent Tory(獨立トーリー)即ちLiberal-Conservative(自由的保守主義)を主張するに至りぬ。されば其の紙面に於ても彼の改進黨及Radical Party(急進黨)の名士が寄稿を歡迎せしと共にオックスフォルド及びケムブリッヂ二大學の俊才に論説の寄稿を請ひて古文學の復興を鼓吹せり。而してこれと共に彼の當世紀前半に於ける新聞紙の通弊ともいふべき個人の性行を褒貶することを避け其の主義持説に付いてのみ堂々論難する方針を取りしかば其の論説は少なくも公平眞面目の文字として一世の注目する所となり特に文學論上の評の如きは頗る勢力あるものとなりぬ。

『ハウスホールド、ヲルヅ』と『サタルデー、レヰウ』とにつぎて出でたるものを"The Cornhill Magazine"及び"Macmillan's Magazine"とす。概して『ブラックウッド』『フレーザル』などと異なる所も見えねど價額の半減せると寄稿に知名の士の多くなれることとを以て見れば當時新聞雜誌業の如何に日進の勢ありしかを察するを得ん。『コルンヒル雜誌』はサッカレーの發行にかゝりマッシウ、アーノルドこれを扶け『マクミラン』はキングスレー兄弟の寄書を得て其の紙面の飾とせりき。

マガヲーン流行の餘勢は一轉して『評論』の興隆となりぬ。但し評論雜誌の興隆は政治思想及び文學思想の廣く社會に布及せりし結果なりと見るべきか或は單に當時佛國に流行せし"Revue des Deux Mondes"の模倣と見るべきかは尚學者間の疑問に屬すされど兎に角に其の最初にあらはれし評論雜誌"Fortnightly"(『二週評論』)が徹頭徹尾佛國の評論雜誌に倣ひたりし者なるは事實也。『二週評論』に次ぎて出でし者を"Contemporary"(『當代評論』)及び"Nineteenth Century"(『第十九世紀』)とす。何れも謹嚴周密を以て知られて今尚持續せる評論批判の雜誌なり小説の如きは絶えて掲載することなし。

これ等新聞雜誌の一々につきては其の特質を敘述するの遑なしまして や日刊の新聞紙に至りては晨に午に夕に其の數幾千萬、秋の木の葉の紛々として飛ぶが如

く滿庭の碎錦到底筆簪のよく掃ひ盡す所にあらず。されば こゝには週刊以上のものに就きて只最も著名なるもの一二のみを擧げ置かんに週刊の雜誌にて最も名高きは"Athenium"にて刊行七十年の長きに及べり。"Academy"これに次ぎて出で別樣の趣味を以て名聲を前者と爭へり。此等の雜誌にて文學上の評論として一時盛んに流行せしは古人の作を取りて評閲することにしてこれと共に古人の詩選を取りて其の特質を論ずることも盛なりき。

さてこれ等の雜誌新聞紙にたゞさはりし批評家中其の著名なるものを擧ぐれば ヂョン、井ルソン、クロッカル及びアブラハム、ヘーワルドは初期の地方雜誌の名家にして ヲォルヂ、ブリムリー。ヘンリー、ランカスタル。ヲルタル、バッオット等は第二期の論客なり中にもブリムリーはテニソンが初期の作によりて其の異材を觀破しこれを世人に紹介せし烱眼の解釋者(インタルプリーメル)にしてランカスタルのサッカレーに於ける亦たこれに同じ。バッオットは多能多才其の評論は政治經濟文學宗教に亘りて、餘す所なし中にも復古主義とロ一マンス主義との中間に脚を立てゝ仔細にヲルヂヲルスが詩能を論じたる一篇の如きは最も名あり。其の他の文士にては博士ヂ■ン、ブラウン("Horesubseciva"の著者)ヂェームス、ハンヲー("A Course of English Literature"『英文學捷徑』の著者)及びアーサル、ヘルプス等皆名あり。ヘルプス(一八一三—七五)は政事界と文學界とに跨り『西領亞米利加論』を以て一方に知られ"Friends in Council"を以て他方に名あり後者は論理學上及び審美學上の評論文を集めたるものなり餘は道德と哲學とに亘りて文章輕快傍證頗る廣し。

マッシュ、アーノルド　其の一生の經歷と詩人としての特質とは前章既に畧說せり。彼の章にても少しく言ひおきつる如く彼れが世に現はれしは先づ韻語の作者としてなり散文家評論家として出世せしはこれより二十年の後即ち一千八百六十年の前後なり。然れども其の批評の論文の初めて世に出でしやオックスフォルド大學の哲學教授が所論として直ちに世人の注目推重する所となりき。此の時諸雜誌の爲めにものしゝ評論の文は同六十五年一冊子となりて出版せられき。有名なる"Essays in Criticism"(『批評論文集』)是れなり收むる所九篇何れも文學に關するものなれども所論博大科學宗教美術音樂等に亘り前人未言の卓說頗る多し。アーノルドは詩人としては極めて小心翼々の人にして改削又改削左顧右眄一語

苟くもせず寧ろ用意のあまり周到なるに失せしが如き觀ありしが論客としてのアーノルドは殆ど刑人の如く直往獨斷一氣湖山を呑吐するの概あり。されば著眼は甚だ奇警にして人をして發明する所多からしむと雖も其のあまりに獨斷的なるや所謂獨り合點に流れて時に論理の順道を逸したるが如き觀あり。

アーノルドが評論の有名なるものは以上の外に"Culture and Anarchy""God and the Bible""St. Paul and Protestantism""Literature and Dogma"等あり。行文峭健奇氣横溢一讀快を覺ゆること殆ど無雙の篇なれども此等の殊なる題目に對してさせる索義なき論者が咄嗟の感想を錄したるものに過ぎざるが故に一時の賞翫を買ふを得べきも未だ以て學者を益するに足らず。アーノルドは晩年に至りて頗りに人物の評傳を試み遠くはヂョンソンが『詩人傳』中の數人近くはバイロン、シェリー、チルソチルス等を論評せり(中にもチルソチルス論最も名あり)。推想精刻詩人文客の胸臆に出入すること意の如く眼光犀明仔細に作の眞髓と風格とを照破して餘す所なし。殊に行文の勁拔にして諧謔の滑脫なるは共に一世に冠たり。

ラスキン

アーノルドと同時代の散文壇に馳騁して相讓らざりし文豪をヂョン、ラスキンとす。一千八百十九年に生れき。父は酒類の賣買を業とし商務の爲め屢〻大陸に旅行せりヂョンも亦た常に隨伴せしが爲めに幼時より見聞を廣うし殊に各國の山河自然の風光及び建築彫刻繪畫音樂等に通ずるに至りき。こは何れも後年彼れが批評の事業に少からぬ幾助を與へしものなり。ラスキンはかく幼時を處々の異鄕にて送りしが爲め規律ある教育を全うする能はず小學校をも履まずしてオックスフォルドなる基督教會の大學校にて教育せられ一千八百四十二年に業を卒へき。ラスキン少にして文才あり在校中嘗て募に應じて"Salsette and Elephanta"といふ一篇の詩を作して賞を得たりき。後ち美術を以て其の身を立てんと欲しルーベンズ及びレムブラントに私淑して畫を學びき而も天稟の才枝はむしろ文學に在りしかば常に論評の試文を絕つことなく遂に卒業論文として彼の有名なる"Modern Painters"『近代畫家』の第一卷を著しき時に齡僅かに二十四。此の篇は翌四十二年に至りて出版せられ後ち三年にして第二卷成り同六十年に至りて完結せり總べて五卷なり。終りの三卷は故ありて匆卒に筆を執りしが爲め前の二卷に比す

れば經營足らざるが如く行文また少しく瑰麗を缺けり。其のはじめ此の書の第一卷の公にせられしや文學界一時大に振蕩せり蓋し其の論の斬新なると其の行文の銳利巧妙なるとが一方に於ては激しき反對論を喚び起し一方に於ては夥多の歎美者を生ぜしなり。一千八百六十年より同六十七年までの間に彼れは該著を修正して再版を發兌せり前説を改刪したる所いと多しといふ。此の間ラスキンは別に建築論を草して陸續出版せり"Seven Lamps of Architecture"(一八四九及び"Stones of Venice"(一八五一—五三)是れ也。ラスキンは彼のラファエル以前の後素を主唱するプリ、ラファエル派の柱石にして一千八百五十年より同六十年に至るの間件の美術の典雅入神の致あるを説き熱心に南歐美術の趣味を英國に輸入せんと力めき。"Architecture and Painting"(一八五四)及び"Political Economy of Art"(一八五八)は當時の講説の草稿なり。其の後引き續き"Unto the Last (1861) "Munera Pulveris" (1862) "Sesame and Lilies" (1865) "The Cestus of Aglain" (1865) "The Ethics of the Dust" (1866) "The Crown of Wild Olive (1866) "Time and Tide by Wear and Tyne" (1867) "The Queen of the Air" (1869) "St, Mark's Rest" "Pre terita'. (1885) 等の著あり。一千八百七十年オックスフォルド大學の美術教授に選ばれ同七十六年に再選せられ同八十年に三選せられ同八十四年病の爲に辭任しき。其の始めて美術教授となりしや聽講者堂に溢れて如何ともすること能はざりしかば止むを得ず同じ講説を二回づゝ物して繼かにこれを支へきといふ。『近代畫家』は主として近代の英國派の風景畫を辯護したるものにして風景畫に於ては今人は却りて古人に優れりといふ説を主張したるものなり。

ラスキンの著を讀む者の著く感ずるは此の著者に二つの方面あること是れなり。其の一つは詩人たる方面にして他の一つは批評家美學家たるの方面なり。(彼れ又社會改革者としても多少思索する所ありしかどこゝに是れを略す)。ラスキンが著作は常に件の二方面より生れいでゝ美術の趣味と美の由來を世俗に傳ふるの効果を有したり即ち自然を觀察するの新眼光を廣く世人に授けたるなり。而して其の影響は決して繪畫社會にのみ止まらずして文學上にも社交上にも殆ど繪の何たるを知らざる社會にだに及びたり。蘇人ピータル、ベーンは嘗てラスキンを評して曰はく

夫れ自然の美を感受する卓越せる力を賦與せられ自然の眞を認識する卓越せる力をもてる者は山岳にも聲を與へ河流にも音樂を附す。彼れ海をながむれば其の海立ちどころに一しほ長閑に美しきものとなり彼れ雲をながむれば其の雲忽ち一しほきら〳〵しく輝きわたる。彼れは神秘に奉仕する神官、自然の慈惠を配分するものなり而して人はかゝる人を詩人と呼ぶ。ラスキンの如きは斯くして造化の眞趣味を解釋して洽く其の豐かなる恩惠を人間に傳へたる二三の名譽ある俊傑の班に列す。彼れは美妙の筆力ある聲を以て決して交易せざれども常に毎に斬新なる又已に若いだれども尚亦もすがれす且つそこなはれざる自然の繪畫に關して語りたり。蓋し自然の美たるや諸の美術の承認する所又諸の美術の原因する所なれど其の吾人の眉間に在るや幼少の時より不斷なれば吾人往々にして輕々しく其の美しさを看過せんとす。彼れ吾人に憶ひ起さしむらく、ホーマルの時代に等しく薔薇花なす暗の色は今も尚曉毎に新しく珍しき笑を有すと。又曰はく朝ぼらけが大海原に添うて進みゆくや海原の水の色は今も尚常に黄金色と薔薇色との新しき刺繍を以て盛飾せらると。彼れは又何人も得爭ふまじき聲を擧げて示すらく「眞に自然美を愛すらん者は清水の噴き出づるあたり若葉の繁れるほとりにて陽春の來れるに遭遇せば常に未嘗見の美を認めざるを得じ」と。ラスキンの聲に呼び起さるゝや吾人はた忽然と宇宙の美と大さに聞する新意識を感ず。宇宙の何たるかを更に明かに思念し如何に宇宙をながむべきかを知る云々

フィリップ、ギルバルト、ハマルトン亦た曰はく

我が英國最近の畫家(チルドペインタル)にて其のいみじき者を祖師の詩人中に求めんかテニソンは蓋し第一に位しシエリーこれに次ぎバイロン、スコット、チルヅチルス及びキーツまたこれに次ぐ。而してこれを散文の作家に求むるに至りては吾人はラスキンを以て唯一人となさざるべからず(中略)ラスキンが散文を以て記叙論述をなすの技はあらゆる方面に於て驚歎するに堪へたり。

と。ペーンとハマルトンとは共にラスキンが詩人的方面を賛せるものなりと此れ等の賛評を以て多少溢美の傾きありとするも英國の散文壇の殊に寥々たる時に方りて能く此の評を領せんもの他に一批評家美學としての彼れをうかゝはん。ラスキンが美術に關する批評の特質となり兼ねて其の重なる價値となるものは其の美術以外に出でゝ人生に及ぶ所にあり。換言すれば一個の無上なる範疇の

裡に倫理的と社會的と美術的とを結合する所實に彼れが審美論の長處にしてまた其の短處なりラスキンが美術の職分なりとして且つ其の効用なりとして瞿說せる所は極めて高尚なり。彼れは美術の批評家たると同時に道德論者たり彼れの美術品を品隲するや多少倫理的問題に干渉し人間の義務に說き及ばざることなし所詮彼れは美術を以て單に道義に關するものたるにとゞめずして神聖なるものとし又道義を以て寧り善且つ眞なるものとのみせずして更に美なるものとせり。エルノンリーといふ匿名にて嘗てラスキンの美論を批評せしものあり曰はく「ラスキン」は德義と美術とを相關係せしめて双方を神聖ならしめんと欲し却りて双方を毀ひ了んぬ。德義はこれが爲めに荒寥たるものとなり美術はこれが爲めに墮劣なるものとなりぬ」と。恐らくは酷評ならん。

今こゝにラスキンが美論を詳說する能はずたゞ其の所說の要旨を紹介せん。彼れは主張すらく圓滿に美なるものゝ中には圓滿に善なるもの存す。かるが故に人若し眞に美なるものを知りて脫我の感情を以て深くそを愛することを得ば以て私慾の侵入を防ぎ其の生活を潔うするに庶幾からん。夫れ善と美とは一ならずして相背けりされば其の根底を探れば相親和すべき性質を具し相契合する所あり。然らば何故に人はこの缺陷多き人間界にありて美の研究に我が一生を委ねんとするぞ。曰はく他なし道義を重んずればこそ美を研究せざるを得ざるなれ。蓋し道義をして愛重すべく若しくは鞏固ならしめんとせば寧り美を知るを以て足れりとせずしてそを研究し且つ愛好せざるべからず。云々

固よりラスキンが美術上の判斷は悉く正確なるものにあらず然れども眼を轉じて在來英國美論の經歷を一瞥せんか古くはバルク。アダム、スミス。アリソン等ありて多少の論なきにあらぬど概して雜雜淺薄當時の詩歌小說戲曲等の作品に對しては大に遜色あり近くはハズリット。ハートリー、コールリッヂ、チャールズラム等に至りて其の考究やゝ深く或は凄婉或は優婉或は滑稽等の上に於て詩歌の妙趣を論じ其の神韻を說くところありしが論の根本的に天地人の本躰に亘り絕對的に美術の本領を定め其の眞價を論ずるに至れば何れも朦然模糊の中にあるを免れず。吾人がラスキンの說を讀みて首肯し得ざる點は屢〻これあるべきも兎に角に其の天然の精神を解釋し人間と天然との間の契合を論じあらゆる高尚なる美術的作

物より來たる靈妙なる聲を解釋し私欲を破し我慢を難ずる條に至りては其の深さと廣さとの點に於て英國過去の學者中に其の右に出づるもの稀なるのみならず廣くこれを海外に見るも前人の未だいはざりし卓見少からざるを覺ゆ。

されどもラスキンが美論はもとより統系の整然たるものにあらず否其の所見は往々にして前後矛盾せり。彼れみづからも常にこれを自覺しながら尙且安然たりしもいの如し。彼れ曰はく

凡そ重要なる事柄は概して三面四面又は多々面を有す而して件の多面體の周邊を一歩づゝ取調ぶることは頑なる人々にとりてはいとつらき業なるべし。予にとりては何事にもあれそれに關する既を尠くも三度ばかり案ずかへたる後にあらざれば安當なりと安ずる能はず

と。彼れは彼の靈妙不可思議にして無數の方面を有せる美といふ怪物に對して果して幾回の考察をか遂げたりし知るべからず。彼れが定義は到底曖昧にして捕捉し難きものなり。加之其の用語例頗る濫りなりき。

要するにラスキンが所說は嚴正なる最近の科學的眼光に照せば條理紛雜見るに堪へざるものなりと雖も其の美術と宗教とを以て相離るべからざる姉妹なりとし兩者に關する眞正の領會の孤立しては得難かるべき由を述べたる一段の精神に至りては一二學者の論難を以て容易に覆すべからざるものあり。英國に於ける空前の美論家世界に於ける餘々たる善美一致論者として其の地位は今尙確固たるものありといふべきなり。

ヂョン、リチャード、ヂェフェリース　アーノルド、ラスキン等に比すれば品位も所說も共に劣かの下級にあるも尙を批評壇に於て若干月日の間一種の異彩を放てりしを者をヂョン、リチャード、ヂェフェリースとす。一千八百四十八年に生れ十八歲にして新聞事業に從事し "North wilts Herald" といふ雜誌に寄書家たりしこと十年餘りさて後ロンドンに上り同七十八年に "The Game-Keeper at Home" と題する小品文集を著しぬ。此の書は多數の讀者を得る能はざりしかど一たび讀みし者の間には贊評頗る高かりき。さて同種の作若干をものせし後轉じて半ば哲學の性質を帶びたる論文を著しゝが其の著は常に冷遇を受け數奇不平の間に病を得てロンドンを去り一千八百八十七年齡僅かに三十九にして歿しき。彼が名聲は忽ち其の訃と

共に各所に喧傳し久しく塵裡に埋没せられし著書は今や定價四五倍の額を以て數日間に賣り切れとなり諸種の新聞雜誌は爭ひて其の文躰を摸倣するに及びたり。かくの如き一時のヂェフェリー熱は忽ちにして冷却し今や其の著書は覆醬の用に供せらるゝに至れり。蓋しヂェフェリーの詩人的性質はチルヅチルスよりは一層精微にして其の宇宙觀の哲學的なる亦たチルヅチルスに過ぎ其の華麗なる散文を以て且つ論じ且つ歌ふや其の成功せるものに至れば頗る見るべきものありと雖もこれを以て彼のラスキンの妙辭に比すれば彼れは瓊葩綉葉の名花是れは名なく實なき枯木のかへり咲きに過ぎず。宜べなり其のラスキンと相并びて多く風騷の客を得る能はざりしや。然れどもヂェフェリーも亦た一介の詞才なり其の派の論説と文躰とは饒かに一派をなしギルバルト、ホワイト及びグレーの如き亦たこれに屬したりしなり。

アーノルドとラスキンとは兎に角に近世英文壇の泰斗にして文藝批評の方法に於て其の影を仰げるもの現に頗る多しと雖も今こゝに細説せずたゝ就中最も著明なる一二人を畧説して止まん。

ヲルタル、ホレシォ、ペーダル一千八百三十九年に生れき。オックスフォルドの校友に選ばれ終生大學に在りて力を盡しき。處女篇を"Studies in History fo Renaissance"とす。一千八百七十三年出版せらる。主題の面白きと躰裁の新しきとによりて大に讀書界に注目せられき。其の文章の詩的なる所はラスキンにも過ぎたり。後"Marius the Epicurean""Imaginray Portraits""Appreciations"等の著あり何れも見るべし。

"Marius the Epicurean"は就中價値あるものにして亦た其の一生の傑作なり。ペータル初めは希臘の美術文學を好み殆どこれに溺れんとせしが後最近の思想好尚に感染し隨うて其の所説もまた一變しき。"Imaginary Portraits"は美術の批判よりは寧ろ美術家が製作の瞬間に於ける心機の妙用を描破せんとせしものなり。此等の諸篇其の最妙の個所に至ればラスキンの暢達に加ふるにトマス、ブラウン及びヂ、クヰンシーの巧緻を以てせるが如きものあり但し説の幽微に入り高玄に向ふ所に至りては到底ラスキンの精且つ大なるに及ばず。

ヂョン、アッヂントン、シモンズ(John Addington Symonds)ペータルと同一の派に屬して考説の精緻なる所は彼れに及ばざれども亦た彼の美論派の文士中錚々の名を博し

たる詞客なり。一千八百四十年に生れ同九十三年羅馬にて歿しき。生來遺傳病に冒されて十分力を文學に用ふること能ざりしかど其一生の心血は"History of the Renaissance in Italy"(『伊國文藝復興史』)に濺がれて今猶を多數の讀者あり。蓋しシモンヅは南歐の文藝に精通せる人にして希臘の學藝美術及び伊太利なる文藝復興の事に付ては平生精査せる所ありこれに關する論說は屢時の新聞雜誌に掲載せられき。而して彼れの屬せりし美論の一派はもと多少彼のラスキンの流れを汲みしものなれども追々に其の倫理的宗教的なる方面を離れて獨立に研究せしものなりき。其の所論中見るべきものなきにあらねど一家の學としていふべき程のものならねばこゝにはこれを擧げず。

井リアム、ミントー　一千八百四十六年に生れ同九十三年に歿しき。アベルヂーンの大學にて論理學及び英文學の教授たり文學美術の評隲に美學的觀察を用ふること少く且つ文章を詩歌的に修飾する事少かりしは前の二人に比して異色ある所なり。嘗て"Examiner"(雜誌)の主筆となりしが同誌の批評文はこれより騷壇に重きを置かるゝに至りき。後ち去りて"Daily News"に赴き暫くにして辭して去りぬ。この間又小說若干をものしき"The Crack of Doom"は就中の傑作なり。是れより先きミントー英國の散文と韻語とに關する史論をものし又彼の『エンサイクロピヂア、ブリタニカ』の爲めに若干の寄稿をなせり。其の特質は博く過去の文藝に通じて又深く最近の思想に感染せるにあり。其の史論及び文學論は全く兩者の融合より成れるものといふべし。其の失は批評眼のあまりに近代的に偏して作を廣く宇宙的に觀る能はざりしにあり但しとはあながちミントー一人にあらず殆んと近代美學派評論家の通弊なり。其の文章は平明順正よく其の意をつくせり。

第二十一章　哲學壇及神學壇

文學を純文學のみに限らば廣義に解して洽く思想感情の文章となりて表はれたる者とする時は哲學上の著述の如きは其思想の方面より、神學上の書籍の如きは思、想、感、情の方面より文學上頗る重要なる位置を保つべく隨うて其の變遷發達せるあとを討ぬるは文學史家の忽にすべからざることなるべし。さりながら此の如き文學史は純文學史はいふに及ばず哲學史宗教史などをも含むことゝなり到

底容易く企つべからざるものなれば本講義の如きも哲學史宗教史等とは引き離して彼の純文學を中心とし其の他は純文學と密に關係ある思想幷びに純文學たる價値ある著作につきて論述せんとはするなり。

第十九世紀なる哲學家及神學家の著作は純文學の方面より觀るに此の世紀の前期より起りたる彼のオックスフォールド派の學者の如きは美文の才ある者頗る多く其の作には散文の詩歌として賞玩すべき者も少からず。降りて最近二十年に至りて英國の科學者は殆んど全く美文を離れて乾燥枯冷の文章をものすることゝなりぬ。是れ彼れ等科學者の獨逸風に化したるか爲か或は天資文才のあるものゝ生れ出でざりしが爲めかこは本章に於て論定すべきにあらず讀者宜しく西歐十八九世紀間の思想變遷の摸樣を精察せば思ひ半ばに過ぐることあるべし。

本章略述するは英國十九世紀間哲學及び神學の著作家中純文學方面より見て文學家と稱せらるべき著述ある人々のみにしてミル、ハミルトン、ニウマン等を首とせる數人に過ぎず。若し夫れ此れ等の碩學が科學的事業を精察せんとならば須く哲學史及び神學史を繙くべきなり。

(一)ヂエレミー、ベンタム　一千七百四十八年ロンドンに生れき。十三歲にしてオックスフォールドなるクヰーンス、コレッヂといふ大學校に入り十八歲にして卒業し六年の後父の業を繼て狀師となりしが性哲學を好み夙に佛國の哲學を研究して名聲ありき。同七十六年法律家ブラックストンの所說を批評せる一篇"Fragment of Government"といふを著はし一躍して「ホッグ」派の預言者といふ稱を受け其の說一派の間に喧傳せられき。其の後 Theory of Punishments and Rewards" "Letters on Usury" (1787) "Introduction to the Principles of Morals and Legitimation" (1789) "Treaties on Evidence" (1813) "Fallacies" (1824)等の著あり一千八百三十二年齡は十五歲を以て歿しき。

ベンタムが道德政治及法律上の持論の中心となりたる者は其の利用(ユーティリティー)の說也。彼れはプリストレーが陳套の語を用ひ「最多數に最大幸福を與ふること」を以て其の目的となしき。而も其の多數といふ意義如何(例へば小人八十を占め君子僅かに二十なる國に於ては如何)所謂幸福とは何ぞや厚生利用の意義如何等の如き重大なる問題に就きては一たびも精說せず上の如き漠然たる言辭を基とし一時の所感に過ぎざる孟浪の說を建てしのみなりと雖も當時英國の社會は隣國革命の擧

によりて人心頗る騒然たりしを以てベンタムが所說は此の機に應じて多少貢獻する所ありたるは疑ひなし。殿にいへば彼れは政治哲學者にあらずして政論家たり。其の文章は頗る華麗强健シドニー、スミスが名篇と伯仲するものあり。兎に角に一時多數の讀者を感激せしめたるは事實なり。

(二)ヂョン、スチュアルト、ミル　一千八百六年ロンドンに生れき。父をヂェームス、ミルといふ有名なる哲學者經濟學者にして著書頗る多し。ヂョン幼時は父の許にて教育を受け後ち佛蘭西に移りて數年を送り十七歳に及びて印度局の錄事となり三十四年間此の業を執りき是れより先きヂョン父の紹介によりてグロート及び其の他の學者と交り又た時の有名なる文士と接し殊にカーライルと相善かりき。彼のカーライルが『佛國革命史』の稿をラーロル夫人より借りてこれを燒失したるは此の時なりしなり。ミル後ち此のテーロル夫人と婚し(後年一奇書を著はして當時の事を敘しきかくて哲學者、政治、經濟學者、批評家としてミルの名聲日に揚り一世の宗と推さるゝと十餘年此の間國會に入り佛蘭西に遊び一千八百七十三年齡六十八歳を以て歿しき。ミル資性温厚交友頗る多し。彼れが著作(殊に後年の著作は此れ等交友の助けによりて成りたるもの甚だ多しといふ。ミルが早年の作は多く新聞雜誌の爲めにものせしものにして彼れ自らも"London and Westminster Review"、といふを發行して盛んに其の達筆を揮ひき然れども一度も美文を試ることなく常に哲學、政治及び文學の評論をものしき。一千八百四十三年"A System of Logic, Ratiocinative and Inductive"を著はす是れを彼れが一生の名篇となす五年の後 Political Economy" 成る。前者に次ぐものとして學者の推重する所なり。同五十九年"Liberty"を著す文辭簡明にして善く其の意を悉せり。翌年論文集"Dissertations and Discussions"出版せられ次で『功利主義論』及び『コムト』論出づ。是れより先きミル佛のコムトと所說を一にせしが晚年に至りてコムト大に偏固となりしよりミル遂に之れが辯析を試むるに至りしなり。而して彼れが辯析の筆は更らに一層の銳を加へてハミルトンの哲學に及び同六十五年有名なる"Examination of Sir William Hamilton's Philosophy"をものしき。ミルが神學及び形而學上に於て哲學系を立てしは全く此の時にありと稱せらる。さて其の後の著書にて名高きは"Representative Government"及び"Subjection of Women"等にして其の自傳は歿し

で後ちに世に出でき。

以上の著述中に含まれたるミルが所說は學說として頗る注意すべきものにして殊に經濟學上の所說の如きは殆んどいひ盡したりとまで稱せらる。尙を仔細に觀察せば何れの論說にも缺陷の細處はあるべけれど今之れを論ふ能はず但し彼れはかいなでの文學的哲學者の如く一時の感にまかせて論理の邪路を走過するが如きは全くなく隨うて其の論を覆さんとせば第一前提より破壞するの他なきが如し。彼れは論理學の史上に於ても明かに一席を占むべきものなるだけありて其の文の明快適切なる恐らく古今に比なく一たび其の根本思想にだに同意すれば何れの書を讀むも徹頭徹尾これに首肯せざるを得ざるの感あり。而して彼れの議論を進むるや件の論理を右にし左には修辭の方則を控へ天禀の文學的才能を以て之れを動かす故に整々堂々險を馳せず邪を行かず滔々として大河の百川を集めて東流するが如く觀る者また神氣の爽然たるを覺ゆ。之れをマコウレーが文に比せんか其の明快流暢なる點に於ては兩者異なる所なしと雖も彼れが文章には全躰に於て多少輕烟の之れを罩むるが如き所ありて事理の脉絡頗る模糊時には其の思想の朦朧たるを示すが如き所ありと雖も是れは飽くまでも豁然洞然事理の深底に徹透して纖塵も陰す所なし。即ちミルが文にはマコウレーの華麗なくデ、クヰンシーの陰深なく又ラムの輕妙なしと雖も「讀みて誤解すべからざる」明晰と「讀過の際不可言の快味を覺ゆる」暢達とは他の文人に其の例を見難きものなりとす。宜なり今に至りて猶を議論子の範たるや

(三) ヰリアム、ハミルトン　一千七百八十八年に生れき。祖父と父とは相闘でグラスゴー大學の教授たり着實寧ろ平凡の學者なりき。ヰリアムも件の學校にて教育を受け卒業の後ち蘇格土評定官となり久しく其の職に從ひしが一千八百二十年ヰルソンと件の大學にて倫理哲學科の教授となるとを競爭して敗れそれより暫く『エヂンバラ』評論の寄書家となりて哲學上の評論を擔當せしが同三十六年に至り遂にヰルソンに代りて大學に入り論理學及ひ形而上學を教授して名聲頗る高く其の教授筆記の如きは處々に傳はりて持てはやされき。されども如何なる故ありてにや彼れは之れを印行せず且つ他にたづさはることもありて生涯中著述といふは僅に "Dissertations" と稱する一篇の論集あるに過ぎず。一千八百五十

九年に歿しければ彼の講義草案は友人の手によりて初めて出版せられき。ミルがハミルトンを論評せしは重に此の書の記事によりてなりき。

ハミルトンの哲學は"Philosophy of the Conditioned"と稱せらる是れヒウムに反對してトマス、リードが「蘇格土哲學」を援助せんが爲めにカントを祖述して物せるものなり。されど今は其の梗概をだに敘する能はずたゞ其の所說のトマス、スペンサル、ベーンス、及びヂエームス、フレデリッキ、フェリエル等數家に影響したりといふ事を記しおかんのみ。

文躰につきては特にいふべきことなし。たゞ彼れはヂ、クヰンシー、コールリッヂ等よりは一層よく日耳曼風の研究を用ひたるだけに語辭文脈等頗る彼の國の科學者ぶりなる所あるのみ。

(四)ヘンリー、ロング、ヰル、マンセル Henry Longueville Mansel は或る人々の間には英國十九世紀中の最大哲學者なりと稱せられ又たマーク、パッチソンよりは「仲買の親玉」(arch-jobber)と毀られたれど現今に於ては兎に角に「精緻なる思索家哲學者の一人」といふ公評に其の位置略々定まりたるが如し。惜哉彼れ齡甚だ長からず加ふるに大學校の事務多端なりしと性來著作に營々するを好まざりしとによりて著書あまり多からず隨うて彼れが知識の那邊にまで及びたるかを知るに由なし。

一千八百二十年に生まれき小學校より歷進してオックスフォルドなるセント、ヂョン大學に入り卒業して校友となりぬ。されど彼の"University Commission"なるものには絕對の反對者たりしを以て忽ち"Phrontisterion"と題する一書を著はして之れを攻擊しぬ華麗優雅なる文章中より骨に徹する諷刺嘲謔の隨處に隱見出歿するの妙また當世紀の一奇書たるに耻ぢず。然れども彼れは件の社(コムミッション)の爲めに選ばれて倫理及び純理哲學の講座を得たり。さて彼れの敎授は議論の內容と言辭の巧妙とによりて大に名聲を博しきと。後年親友ミルマンの死するに及びてセント、ポウルの監牧師となりしが幾程もなくして歿しぬ。時に一千八百七十年なりき。

著書は彼の"Prontisterisn"の他に敎授筆記"Bampton Lectures"論理書"Prolegomena Logica"等あり。『每季評論』及び其の他に揭げられし小論文は彼の"Prontisterion"と合綴して其の歿後に出版せられき。

マンセルは甚だ多方面なる學者にして頗る滑稽の才に富み亦た世間智に疎から

す。於是彼れが講義は大に學生に喜ばれ其の著書は學者をも益し俗人にも解せられたり。彼れの或る人々より毀らるゝも此の點にあれど學者としての彼れの本領は自家の哲學系を立てゝ一派の開山たらんとするよりは寧ろ忠實に先人の哲學を傳へ精細に其の變遷を敘説するにありしなり。されば彼れは多く獨乙の書を讀みしかどこれによりて自家の意見を固めんとするにもあらず又た彼の"Bampton Lectures"の如きはミルが批評文("Examination of Hamilton"の中)にてはハミルトンの敷衍として取り扱はれし程にハミルトン哲學を取りたれど時にはハミルトンとは全く異なる解釋を試みしこともありき。要するに彼れは雜誌の評論家當時にては隨分不正直にして隨分偏狹ならざれば出來難き職業)としては餘りに周匝明晰の頭腦を有し又哲學組織家としては(ソフィスト風の所皆無にては大哲學の組織は覺束なきものなるに)あまりに精細なる論理癖を有しき。餘す所のものは夫れ唯々忠實なる哲學史家か。然り彼れは忠實精細なる哲學史家なりき加ふるに彼れは「この種の記事評論に最も適したる文章」を有しき。惜むべし其の短生涯中多く雜務の爲めに時を奪はれ爲めに首尾完美せる哲學史をものする能はざりしこと。

なを當時に出でし哲學書の文學的價値あるものゝ名を擧ぐる下の如し。

Frederick Denison Mourice.—"Moral and Metaphysical Philosophy"

William Archer Butler "Lectures on the History of Ancient Philosophy"

George Henry Lewes (ヒリオット女史の夫)— "Biographical History of Ancient Philosophy" 等

(五) ホエートリー及びホ井ウェル　歴史、科學、神學上の評論及著述の上に於て當時オックスフォールド及びケムブリッヂの兩大學より各〻一俊才を出だしき。ホエートリー及びホ井ウェル之れ也。兩者各〻其の學校の特色を備へて顯はれたりし故に一見して明かなる相異の點あり加ふるに其の家庭に於ける上下の差より前者は秩序的教育を受けて議論文章共に練熟後者は不規則に進みたりしだけに文字頗る粗硬なれども間〻獨創の見に乏しからず。されども二人共に殆んど同時に出でゝ同じくヂョンソン風の獨斷家たり同樣の論法を以て歴史を論じ哲學を論じ宗教を論じ又た教育を論じき。

リチャルド、ホエートリーはロンドンの人、一千七百八十七年に生れき。父は教師にして頗る教會の事務に鞅掌しき。リチャルド廿五歳を以てオリエル大學を卒業しオックスフォールドに住すること十餘年にしてセント、アルバンス院の長となり(ニウマン副長に擧げらる)一千八百二十九年經濟學科の教授となる。一千八百三十一年ホイッグ黨に推されてダブリンの僧正となり難局に處ること三十餘年、一千八百六十三年に歿しき。

著作は多からぬ方なれどいづれも名あるものなり "Historic Doubts relative to Napoleon Bonaparte" は眼光の明透と論鋒の犀利を以て稱せられ教授筆記 "Party Feeling in Religion" はこれに次ぎ『論理學』及び『美辭學』亦た頗る名あり。概するに多くシドニー、スミスと同じくオックスフォールド教育の結果として觀察の細緻と所見の嚴なる統一とを缺き代ふるに文學的着想と表白とを以てせしものゝ如し。

ホリアム、ホヰウェルは工匠の子なり。幼にして數學の才に長じケムブリッヂなるトリニチー大學を卒業し校友となり教授となり後ち校長となりぬ。彼れは科學にも哲學にも件の數學を應用して頗る發明する所あり。 "The History" (1837) "The Philosophy of the Inductive Sciences" (1840) "Astronomy and Physic in Reference to Natural Philosophy" (1833) 及び "Plurality of Worlds" (1853) 等皆名あり。其の文章は蕪雜生硬讀むに堪へずと雖も當時英國に於て獨り獨立の研究法を取りて之れを試み兎に角多少の成果を得たりしことは忘るべからざるなり。

哲學を應用文學と見做して其の名家を擧げ來たれは應用哲學と見做すべき法理學經濟學の大家をも併序すべきなれどそはこゝにては企つべからざることなれば其の最も著はれたるもの二三の姓名と著述とを掲げて止まん。

ヂョン、アウスチン(一七九〇—一八五九) 軍隊生活より教官となり "Province of Jurisprudence Determined" を著はす。其の夫人また文才あり "Story without an End" を首とし數編の好著作あり。夫の歿後其の教授草案を集め匿名にて刊行しき "Lectures on Jurisprudence" (『法學講義』)是れなり。

ヘンリー、ヂェームス、サムマル、メーン(一八二二—八八) ケムブリッヂ大學を卒業してトリニチー、ホールの校友となり後ち校長に進み在職中歿す。著述法學政治學史學等に渉りて頗る多し。最も名あるものを "Ancient Law" (1861) "Village Commu-

nities" (1871) "Early Law and Custom" (1883) 及び共和政治を病論せる "Popular Government" (一八八五)等とす。文脉亦た波瀾に富みよく其の意を悉せり。

ジェームス、フィッツ ヂェームス、スチーブン(一八二九—九四) ケムブリッチのトリニチ大學を卒業して狀師となり晩年法官となりき。著作は "Story of Nuncomar" (一八八五)の他に別にいふべきものなし。政治、神學などに關する評論の文は頗る多く最も論辯に長じき。"Liberty, Equality, and Fraternity" (一八七三)は其の集なり。父ヂェームス、スチーブンも亦た有名なる評論家にして少ムブリッチにて近世史の教授をなしゝ傍ら "Essays in Ecclesiastical History" 及び "Lectures on the History of France" 等の著あり。

さて神學の方面を觀るに當時に於て最も注目を惹きたるものは「オックスフォールド派」(ハーヴァード)と稱する一派なり。こは半ば聖典派(エヴァンゼリカル、ムーヴメント)に反動し半ば改進派と自由派とに反對して起りたるものにして最も名あるものをピウジー、キーブル及びニウマンの三氏とす。

(一)エドワード、ブトエリー、ピウジー Edward Bouverie Pusey は一千八百年に生れき。幼時オリエルに送られ基督教院にて教育せられ業を卒へて後ち獨乙に赴き神學と東洋の國語とを研究し二十七歳の時、國に皈りてヒブル語の教授となりやゝ名あり。一千八百三十三年はじめてニウマン、キーブル等と相ひ結托して宗教につきて盡瘁すること數年遂に主義の爲めに大學の諸老より説教を禁ぜらるゝに至りぬ。同八十二年に歿しき。著述少なからず。中にも "Sermons" 及び "Eirenicon" は最も文學的興趣の深きものと稱せらる。其の文章ニウマン、キーブル等に比して頗る差異あり或る人々よりは露骨に過ぎたりとて厭はれ又反對にも或る人々よりはあまり晦澁なりとて攻擊せらるれど宗教上の所論にさへあまりに科學的ならんとする當時の風に抗して態と自家の見を樹て信仰と情熱とを飾りなく筆に傳へたる一種の文脉は(時に露骨にして時に晦澁ならんも)また見るべきものなるべし。

(二)ヂョン、キーブル(一七九二—一八六六) は牧師の子なり。家庭にありて嚴峻なる教育を受け十四歳の時、募に應じてオックスフォールド大學に入り夙に神童の名あり。十九歳の時同校の助教授を托せられしが後ち職を辭して著作に從事し "The

Christian Year"の好著あり。一千八百三十八年同校の詩學教授となり終生此の職を奉じき。

キーブルの著作は"The Christian Year"の他に"Lyra Innocentium"及び詩集"Miscellaneous Poems"あり。キーブルの詩才はロセッチ嬢に似て其の神怪幽陰に代ふるに廣大豐富を以てしき。彼れは又ヲルヅヲルスに影響を受けしこと少からずされど單に其の摸倣にあらずして別に一家の風あり。惜哉宗教家の通弊ともいふべき「歌て風趣なき」の難はこれを免るゝ能はず、情火内に燃ゆれども嚴峻なる教理之れを包みて趣味索然たるものとなれり。

さはれ彼れの作詩に從事せしことは大に彼れが詩歌の批評に資する所ありき。彼れは詩歌の批評家中當時第一の人なりき。其の名著"Prælectiones Academicæ"は例によりて羅甸語にてものせしが故に讀者の數少く隨うて世の注意を惹くこと少くして了りしも其の他英文にてものせし批評文の如きは皆人々の注視する所となりき。又彼れが教授せし美學は大に倫理の色彩を帶びたりと雖もさりとて彼れは一切の詩歌を道義の眼を以て上下せんとするものにあらず。さて彼れは飽くまでも宗教の講論を其の本領とせしが故に勢ひ全力を批評に用ふる能はざりき。

(三)ニウマン

ヂョン、ヘンリー、ニウマンはロンドンの人、一千八百一年に生れき。幼時の教育の影響は大に聖典派(エピスコパル)の思想を抱かしめたり少うしてオックスフォールドなるトリニチ大學に入り家業の後ち同校の助教となり又たセント、アルバンズ院の副長となり次でオリエルの教授となりぬ。さて千八百二十七年にはハウキンズに關ぎてセント、メリーの教師となりしがこは彼れが主義を實行するに最も適當なる地位にして其の説教は大に當時の問題となりこれに關する著書も隨て多かりき。實に彼れがこの職に在りし十六年間の事業はオックスフォールド派の歴史の骨子となりたる者にして彼れは當時の宗教に於て其の智的方面と共に儀禮的方面をも變ふる所あらんとし物議紛然辯難雨の如くこの問題に關して出でたる冊子を蒐むれば一個の圖書館を作るを得べしといふに至りき。而も是れに對する終局の断案は今に及んで猶を立たずとぞ。かくて同四十三年彼れはフルードと共に南歐に航

し、こゝに其の進路を一轉し二年の後ちローマ教會の聘する所となりてオックスフォールドを去り是れより三十二年間はこゝに住ることとなかりき。

さて彼れは屢〻反對派の人々の爲めに妨げられ、或は誣ひられ頗る逆境に陷り居を易ふることも數回に及びしが晩年に至りて機運一變し一千八百七十七年には故鄉なる三一致大學よりは名譽員（オンラリー・フェロー）に擧げられ程なく法王レオ十三世の値遇を得て同七十九年には首坐教師の榮職を授けらる。仍て一たびローマを訪ひ彼のビルミンガムに歸りて靜かに餘生を養ひ同九十年八月に歿しき。此の時恰も彼れが眞意の初めて世に知られたる時なりしを以て是を追悼するもの無慮數万學者僧侶の別なくあらゆる贊辭を列ねて其の墓碑を飾りぬ。程なく其の全集上梓せられしが書翰及び隨筆の類を除きて猶を大冊四十卷を滿したり。今少しく之を觀て彼れが思想と文章とを略評せん。

ニゥマンが著作の大部分はいふまでもなく散文の論說なれど彼れは韻文の作者としても文學史上裕かに一の地位を占むるものなり。中にも "The Pillar of Cloud" の如きは優美巧妙なる讃美歌にして宗教の理想を詩化したる技巧ロセッチの上にありとして最も人口に膾炙せり。此の作は彼れが南歐漫遊の歸途シ、リーよりマルセールに航せし船中の詠にして當時の他の諸篇と共に神興横溢の餘に成りたるものなり。是れより前後にも名作に乏しからざるが中に "The Dream of Gerontius" は最も長篇にしてまた彼れが一生の傑作と稱せらる。蓋し彼の複雜多樣なりし行路の最高峰を過ぎ來りて今や靜かに登頓下上の昔の坂をふりかゝりたる時の作なればなるべし。

韻文以前の美文にては傳奇物語 "Callista" 及び "Loss and Gain" の二篇あり言辭に巧妙なる個處は少からねど作に目的を置きたるの跡あまりにあらはにして餘情といふものなく又多數人に讀ましめんことを詮とせしが爲めに趣致俗に流れたるは惜むべし。

さて其の著作の大部分を占めたる神學上の文章につきて觀るに各所にてものせし講說集十二卷セントメリー領にてものせし『通俗說教集』八卷雜說四卷論文四卷、歷史的端物三卷、耶蘇教非議を反駁せるもの及びセント、アタナシアスの飜譯合せて四卷及び雜種の辯難文六卷あり。彼れの最も不得意なりしは歷史にして

彼れはこれを重視せず他の史に據りて論を立つるものを見ては「好古論」なりとて一嘲に附することさへありき。隨て自らの所論中には史上の事實を引證すること少く稀れにこれある中にも年代などの明かに誤りたるもありき。以下彼れが宗教上の意見を覗はん。

ニウマン及びニウマンの徒は彼の十七世紀の清淨教徒に對して些の同情を有せず。クローの記する所に據れば人若しオックスフォールドに於て「ミルトンは大詩人なり」と立言して同意を求めんとするも恐らくは一人の之れに應ずる者なかるべしと。彼れ等が清淨教徒に對する反感情はかくの如し。然れども此のオックスフォールド派の首領たるニウマンは或る意味に於て(或は眞正の意味に於て)一種の清淨教徒たりしなり。ニウマンの起ちて教導に從事するや其の事業の標的は當時の世俗のあまりに俗なるを匡正し並びに宗教の一方面の全然廢却せられたるを恢復し振興せんとするにありき。所謂一方面とは宗教の森嚴なるべき方面是れなり。曰はく「方今誰れか上帝に對して眞に畏敬の念を持するものぞ、誰れか熱情を以て其の神聖を認むる者ぞ、誰れか眞に罪惡の嫌ふべきを知る者ぞ誰れか罪人を見て眞に恐怖震慄する者ぞ、誰れか上帝を褻瀆する異端の卑むべく又憫むべきを知る者ぞ、教義教律の眞に對して其の身を愛せざるものありや否や、最終最好の目的に達するが爲めに方便を用ふる事の眞意義を知るものありや否や、誰れか誠心を神聖使徒教會に捧ぐる者ぞ、誰れか宗教の神聖は心の神聖に伴ふを知る者ぞ。一言すれば誰れか今日宗教の嚴肅を知る者ぞ」と。是れ實に一種の清淨教徒の言にあらずして何ぞや。然りニウマンの率ゐたるオックスフォールド派の黨教徒は實に新教的舊教といふべきか或は十九世紀的新教といふべきものなりき。ニウマン曰はく「予は飽くまでもリベラリズム(自由宗派)と戰はんと欲す聖儀を非し聖典を議する我意放埒の一派及び其の發達せるものと戰はんと欲す」夫れ心の靜平なると行ひの悠々たるとは彼の聖典を熱信せるより得たる賜なり云々。されば彼れが焦慮して研究したる問題は「如何にせば教會に自由派を生ずることなくして止むべきか」といふにあり。而して意に謂へらく有漏の人間は茫々たる宇宙の迷津に立つ丐兒のみ、吾れは何處より如何にして來りしかを知らず、日暮れて彼岸は遠し、此の時に方り忽然として我が前に現はれ我れを撫で我を導くものは

彼の大慈悲の御手なり、誰れか之れを疑惑して殊更に行く手を轉ぜんとするものぞ、盡く聖典を疑はば聖典なきに如かず吾人の依從する所は此の唯一の聖典にあり黒朦々裡の大悲の御手にあり云々。予は今こゝに此の說の當否を評せずと雖も主我の觀念世界に氾濫し安心依從の靈地たる宗敎界までも覆滅せんとしたる十九世紀の精神界の如何に混亂紛擾の有樣を呈せしかはニウマンが反對の立地によりてよく之れを觀るを得べく上帝畏敬の念の十七世紀に比して如何に進み來りたるかは兩者相對して之れを知るを得べしとせばニウマン氏の所說は英國十九世紀の精神界の一側面として永く史上の地を占むるに足らんか。

ニウマンは文章家としても一世に冠たりき。彼れは一派の翰者の如く格を破りて文を修飾するの弊なく意の趣くに隨て筆を進め行文皆典據あり一語苟くもせず讀者の易解を欲して平順明正を旨としき。されば文章中形容詞の數いと少く直喩隱喩、諺例の如き動もすれば險に陷り易しとて多く之れを避けき。されば一種の批評家よりはあまりに平明なりとて貶せられざりしにあらねど彼れが天賦の詩才は始終其の文に現はれ溫潤含光の趣酌めども盡きざるの觀あり。加之主題によりてはよく此の平板を脫し曲折波瀾の妙を盡したるも少からず。

オックスフォールド派中の有名なる文士を擧ぐること下の如し。

カーディナル、マンニング(一八〇八—九三)ローマ敎會に屬し派中にウマンと名聲を爭ひし人なり。文才は固かに其の下にあれども敎會中の說敎は大に喧傳せられ著述また多し。

リチャード、ハルレル、フルード(一八〇三—三六) 史家ヂェームス、フルードの兄なり其の說大にニウマンを感化し更に派中の人々を感化しき。されば正當にオックスフォールド派の先達といふべき人なり。不幸短命にして著作いと少く事業見るべきものなし。

アイザック、ポリアムス(一八〇二—六五) 派人ニウマンに次ぐ詩人なり。又「小キーブル」と稱せらる。

ポリアム、ジョルヂ、ワード(一八一二—八二) は「理想クード」の綽名あり。其の著"Ideal of a Christian Church"の文章の恐しく粗惡にして而も記事の頗る注意すべきものなりければなり。

ヂーン、チャルチ(一八一五—九一)　派中の錚々たる文士なり。ダンテ、Anselm、スペンサル等の評論をものして名あり。晩年オックスフォールド派の史を起稿し中途にして歿じき。

ヘンリー、パーリー、リッドン(一八二九—九〇)　Pusey の傳をものして名あり。講說に有名なるもの少からねどいずれも主旨よりは修辭の巧妙なるを以て稱せられしものなり。

オックスフォールド派と其の反對派との中間に立ちたる神學者中にて忘るべからざる者はオックスフォールド及びケンチェスタルの僧正たりし Samnel Wilberforce (一八〇五—七三)なり。最初オックスフォールド派に屬し後ち殆ど反對の地位に立ち再びオックスフォールド派にかへりたる人なり。僧官としての事業いと〳〵多かりしが中に其の說教の時俗を化導せしは最も著きものなりき。彼れはまた文才に富み宗教に關する著作少からず就中其の傳記中に集錄せられたる書簡及び目錄は修辭上注意すべきものなるのみならず當時の宗教界對政治界の狀況を知るに最も大切なる記錄なりと稱せらる。

さてオックスフォールド派も正反對の位置に立ちし人々の中にて稍顯はれたる人三人あり。スタンレー、パチソン及びヂョエットこれなり。

(一)アーサル、スタンレー Arther Penryn Stanley (一八一五——八三) はアーノルドの感化を受けて其の傳記をものしし人なり。大學に助教師たること十年許り後ちカンタルベリの法教師となりクライスト、チョルチに轉じ又オックスフォールド大學にて宗教史の講師となり終にユストミンスタルの監牧師となりぬ此の間著述少からず殊に多年の研鑽を重ねてパレスタインの地理及び(Easter Churth)の變遷史をものしき。文章は流麗平易。

(二)マーク、パッチソン(一八一三——八四)　リンコン大學の校長たり。始めニウマンの人物に貪ふ所あり。學識該博、理眼火の如く、大にニウマンを助けて爲す所ありしがニウマンの南歐に航するに及びて漸く其の說を變じ遂に自由信仰を稱ふるに至りき。さて名籍は教會におきたるのみにて私に懷疑の思想を持し獨り討究する所あり。有名なる "Essays and Reviews" に於て他の六人と共に當時の宗教及び教會を論じて頗る物議を惹起せしかど著き影響もなくて止み自らも其の思想の

全躰は社會に發表せざりしが故に其の懷疑の思想は果して何れの點にまで及びたるものなるか今知るに由なし。平常「書籍を著はさば最良の書籍たるべし」との主義を持してあまり多く執筆せず『英國文人列傳』の爲めにいみじき『ミルトン論』をものし『クオータリー評論』及び『土曜日評論』などに斷片を寄せたるのみなりしも其の學才は夙に知人間に推服せられたりきとぞ。行文また一家をなして雅馴雄健の名あり。

(三) ベンヂャミン、ヂ・エット(一八一七——九四) 其の經歷畧ぼパチソンと同じく "Essays and Reviews" 記者の一人なりしがニウマン等の主唱せる「宗教復古」(レリヂアス、リヴァイヴァル)に對しては毫も同情を表する所なく非オックスフォールド派の最も著き反對者なりき。著作の大部分はプラトーの反譯にして文章はパチソンよりは一段の下にあり。

オックスフォルド派の運動の其の頂點に達したりし時は蘇格土教會の分裂の衰運に傾きし時なりき。此の派に於て最後の運動の最も勢ひありしはトマス、チャルマースなり。一千七百八十餘年に生れ一千八百四十七年に歿しき。一千八百二十三年セント、アンドリウスにて倫理哲學の教授となり後ちエヂンバラに轉じて神學講師となる。著書は The Adaptation of Eeternal Nature to the Moral and Intellectual Constitution of Man" を首として頗る浩瀚なり。彼れは說教者としては頗る名ありしも學者教師としてはさまで推重するに足らず「論理よりは修辭に長じき」といふ評はあれど其の修辭だに文學史上特筆するの價値なし。

エドワルド、アーヰング(一七九二——一八三四) カーライルが親友にして一時はチャルマースを援けて蘇土教會の爲めに盡瘁しチャルマースがグラスゴーにて名聲を馳せし頃アーヰングは單身ロンドンに赴きハットン、ガードンにて說教を試みき。說教者としての伎倆はチャルマースに及ばざりしかと文人としては復かに其上にあり殊にコールリッヂに就きて文學を學びし以後の如きは其の筆大に見るべきものありき。即ちチャルマースは天資宗教家にして布教の方便に文學の力を借りたる者、アーヰングは本來文學者にして途を失して神學界に入りたるものなりといふべし。

當時の神學者にして多少文學的著述あるものは以上の數家に止まらざれど一々

之れを擧げんは頗はしく擧げざらんもいかゞにて其の取捨の加減は最も困難なることなれば今はたゞ其の名をだにとて下に之れを掲ぐ。

Frederick Denison Maurice. Frederick Robertson. Christopher Wordsworth. Alford. Lightfoot. Ramsay. 等。

第二十二章　科學壇の文才

前章、神學及び哲學壇の名家を略説せし折に文學史上に掲ぐべきものとして人を選擇するの容易ならざる由をとゝわり置きしが今科學壇の文才を紹介するに當りても同じく選擇の一層容易ならざるを感ぜざるを得ず。哲學や神學や素と純文學の範圍に入るものにあらず而も其の應用せられて諸種の評論或は教説の文となるに及びては其の文章や其の詩趣や多少文學的價値無きにあらず隨うて之れを擇りいだし來りて略説するは必しも難き業にあらざれども他の科學に至りては本と是れ純文學とは正反對をなせるもの隨うて其の中につきて文學的評隲を試みんはいと〳〵爲し易からざる業なり。されども實際につきて見るときは科學壇にも亦た文才の士なきにあらず且や其の著述中に所謂通の文(殊の文)と別つとして見るも價値低からざるもの多きが故にこゝに其の最も著はれたる數人を擇び、せめても其の大略を叙説せんと欲す。さるは無言にして此の壇を通過するに忍びざるものあればなり。

さて第一に擧ぐべきは彼の語原學者、古典學者なり。今ま一わたり此の學の今日に至りしまでの狀勢を視るに中世期の頃に當りては所謂古典學は全く無かりきといふ程にはあらぬも猶ほ何人もこれを專攻するに至らざりしものなるが降りて文藝復興(リネーサンス)の期に至りては苟も操觚の業に從ふものは何れも多少これを研究せざるなく就中彼のエラスマスの如きは此の古典學の初期に於て最も著名なりし學者なりき。さてこれより一方には國文學發達し一方には希臘、拉典の古文學盛んに研究せられ遂に十七、十八世紀の頃に至りては古典學なるものは文學と獨立して別に專攻せらるゝものとなりぬ。さはあれ文學者は猶ほ一般に必ず此の知識なかるべからずといふ有樣にて勢ひ其の分離も全きを得ざりしが十九世紀の初めに至りて古典學は遂に全く文學より立離れて科學の部分に入ることゝなりぬ。されば予の下に述べんとするはこれより以後の學者につきてなり。

さて前世紀の終りより件の學者につきて見るに最も尤なるはチヤコッブ、ブライアント。ギルバルト、エークフィールド。及びリチャード、ポルソンの三人なり但し此の中二人は學者としての功績著大ならず。

(一)チヤコッブ、ブライアント(一七一五——一八〇四)は古典學に於て當時全く遺却せられたりし神話を研究せし人にて其のころ比ひなき碩學なりき。

(二)ギルバルト、エークフィールド(一七五六——一八〇一)はケムブリッヂの出身なりしが教會を去りてチャコビン派に入り激烈なる筆を振ひて盛んに宗教上の事を論議せしが遂に讒謗の罪によりて入獄し赦されて後ち多く古學に關する書を著し斯道を益したること尠からず中にも "Silva Critica" は最も多く世評に上りき。

(三)リチャード、ポルソン(一七五九——一八〇八)はベントリーと共に國學の大家と稱せられ殊に其の文章の麗澤を以て著はれし人なりき。一千七百七十九年ケムブリッヂのトリニチ大學に入りしが在校中夙に俊才の名あり殊に擬古風の詩文に長じき。卒業に及ばずして校を退き同校にて希臘語の教授となり後ちロンドン教育會の圖書館係りとなり在職中に歿しき。ポルソンは斯學者として最も貴重すべき明晰の思想と博大の記憶力とを有し其の文躰また得易からず何れの方面に向て筆を馳するも決して人後に落つることなかりき。然れども惜い哉生來の酒癖は筆と共に長じ到底正則の業務に堪ふる能はず爲めに著作の見るべきものなくして終りぬ。

以上三人の歿後オックスフォールド、ケムブリッヂ及びエヂンバラより各一名の古學者を出しゝが何れも當世紀間の古學者中最も勝れたるものなりと稱せらる。

(一)オックスフォールドより出でしはヂョン、コニングトン(一八二五——六九)にして卒業の後ち拉典語の教授となり終生其の職に從事したりき。ホレース、ホーマル及びヴルジル等の作の飜譯を首とし南歐の古文學を紹介して文壇を益せしこと尠からず。其の古學に於ける學風は日耳曼の學者の如く精緻なるを得ずまた英倫の學者の如く堅實なるを得ざりきと雖も多く子弟を誘發して遺憾なく古學の堂奥を窺はしめし伎倆と彼の死記死誦の寶弊を脱してよく古文學を現文壇に復活せしめたりし功蹟とは共に長く忘るべからざるものなりとす。

(二)ケムブリッヂより出でしはヒウ、アンドリウ、ヂョンストーン、マンロー(一八一九

——八二)なり。トリニチ校を卒業して同校の拉典語教授となりし人なり。學者としての資質力量は夏かにコニングトンの上にありベントリー、ポルソンなどの業を大成せしは此の人の力なりと稱せらる或はLucretiusを飜譯し或はホレース、カタルラス(Catullus)等を評論し其の他古學研鑽に屬する斷篇少からず中にも希臘拉典の詩歌を國詩に飜しゝ伎倆は當時獨歩なりしなり。たゞ其の音調の眞を傳ふる能はざりしは皆人の遺憾とする所也。

(三)さてエヂンバラより出でしはヰリアム、ヤング、セラー(一八二五——九〇)なり。其の著述は以上三人の物に比して更に文學的趣味に富めり。グラスゴー及びベリオルにて教育せられ數年の後ちダルハムのセント、アンドリウにて教授となり一千八百六十三年エヂンバラに轉じ終生そこに奉職したりき。在職中"Roman Poets of the Republic"の著あり同種の作中空前の名什なりといふ。後ちヴルツル、ホレース、チバルラス Tibullus 及び Propertius 等の評論あり。其の他前の著と躰を同うせる一二の篇あれど何れも取りいでゝいふに足らず。

さるほどに古學の研究これより一歩を進めて或はエヂプトの古文學を研究し或はセミチックの古語を討ね更に印度を中心として東洋諸國の語學を修め其の文學宗教等を傳ふるもの出づるに至りしが其の中にてやゝ顯れたりし學者を擧ぐればバルチー。エルムスレー。ゲイヌフォード。ジオルヂ、ロング。ケンネデー。ミレット。リンウード。ペルゲス。モンク。ブロムフィールド等あまたあれど今はたゞ最も功績の著しと見ゆるヰリアム、ロバルトソン、スミスの上のみを略説して直ちに他の科學者に移らんとす。

ヰリアム、ロバルトソン、スミスは一千八百四十六年に生れ同九十四年に歿しき。アベルヂーンシャアのフリー、チャルチ、コレッヂといふ學校にて希臘語の教授となり文壇に立ちては獨逸風の評論をものせしが彼の『エンサイクロピヂア、ブリタニカ』の事に關して其の職を失ひ轉じてケムブリッヂにて亞剌比亞語の教授となり又圖書館の館友(フェロー)となり遂に『エンサイクロピヂア』の寄書家となり編輯助手となり更に編輯發行の主任となりにき。彼れの最も長じたりしは東洋の古典にして新約書に關する貴重の考證少からず。其の他"Kinship and Marriage in Early Arabia"及び"The Religion of Semites"の二著あり文躰措辭少くも當時の二三流に列するを得べ

し。

さて理化學壇の文士に移らんにハムフレー、ダヰイ(Humphry Davy)一七七八——一八二九)は先づ第一に紹介すべき人ならん。彼れは有名なる化學者にして炭坑用の安全燈を首め諸種の發明ありもと詩人ベッドーズの父なる(クロフトンにて有名なる)醫師の弟子となり其の助手となりし間に諸種の有益なる研究をなしゝと共に上流の人々と交り殊にコールリッヂ、ソウシー等の一派の詩人と相往來して大に文學上の知識を得たりき。

さて二十三歳の時選ばれてロンドンなる「ロイヤル、インスチチウション」の講師となりしが其の講義の趣味に富める前後比ぐひ尠なきものなりきといふ。著書は"Salmonia"及び"Consolations in Travel"の二冊あるのみなれど何れも當時に歡迎せられ其の他の小片また文才の見るべきものなり。

タヰーと同時に出で數學、天文、地文等の學者にして文名嘖々たりしはメリー、フェーアファックス(Mrs. Somerville)なり。一千七百八十年に生れ同八百七十二年に歿しき其の自傳は筆致婉約にして流麗、有趣味の記事に富むを以て稱せらる。其の他にはDavid Brewster (1781—1868 數學理學の專門家) John Herschel (1792—1871 天文學者) Charles Lyell (1797—1875 地質學者) Robert Murchison (1792—1871 同上) John Tindall (1820—93 物理學者)等皆多少の文名ありし人なり。

されども科學界の泰斗にして文名また一世に冠絕せしはダーヰンとハックスレーの他になかりきといふも可なり。

チャールス、ダーヰンは彼のエラスマス、ダーヰンとて十八世紀中韻文を以て著はれ兼ねて科學の造詣淺からず且つ一流の進化論を立てし人の孫にして一千八百九年二月シュリウズベリーに生れき。初めエヂンバラにて教育せられ後ちケムブリッヂなる基督大學に入り最も心を理科學に傾けしが卒業の後南海に航して實地觀察を試み滯在五年間大に得る所あり同三十六年本國に帰り其觀察を基として數年間一説の組織に勉め傍ら巡見記の出版に從事せりき。かくて程なく同五十九年に至りて有名なる"Origin of Species"の一書を公にして世界の學界を聳動し引きつゞき夥多の注意すべき著作あり。一千八百七十一年又"The Descent of Man"を出しき。蓋し掉尾の大作なり。同八十二年に歿しき。齡七十三。

ダーヰンが晩年に至りて人に語りたる所に據れば彼れはいたく文學を好みことにシエークスピアを愛誦せしが其の詩文を讀みしは老後よりは寧ろ少壯の間にありきといふ。奇なる哉彼れが文學の素養は最も文學とかけ離れたる學術を研究せし時代になりきとは。而して彼れが文才は少壯英氣の旺然たる間には全く其の勢を潛め老成一家の見を樹つるに及んで始めて其の煥發を見しなり"Voyage of the Beagle" "The Origin of the Species" "The Descent of Man"等一として文脉の整齊を見ざるはなし。實にダーヰンの文脉は明晰と强健とを旨として贅澤の麗句を添へず然れども其の事を叙し理を論ずるや主客整然緊張宜しきを得宛らに彼れが學説の姿を現じて遺憾なきものなり。

ダーヰンより前に出でし人にして早くダーヰン風の進化説を以て"Vestiges of Creation"といふ一書を著はして出版の當年より世俗の喧傳する所となり學者間よりは手痛き攻擊を受けし人あり。著者はロバルト、チャムバルスとてエヂンバラにて其の兄と共に多年通俗にして有益なる多種の書籍を印刷して名ありし人なり。件の書は科學説といはんよりは寧ろ隨感錄の整ひたるものといふべきものなるだけに讀過の趣味は少からず。説の新しきといひ文の感情的なるといひいづれも當時多數の讀書社會を動かして力ありき。此の人其の後數多の著作ありしかどいづれも彼の著に及ばざると遠きものなれば今は擧げず。チャムバルス及びダーヰン等が奇説の攻擊はさま〳〵なりしが中に最も力を盡して其の剿滅に力めしはいふまでもなく時の宗教家なりき。而して"Vestiges"の攻擊者中にて最も力ありしはヒウ、ミルレル(一八〇二—五六)なりき。彼れは半は宗教的半は科學的なる見地を立てゝ根本的に件の邪説を覆さんとしき。ミルレルは當時の英才にして觀察の周細を以て著はれ地質學を專攻しながら侮るべからざる文才を有し多年新聞雜誌の編輯寄書に從事して論難に老練なりし人なればチャムバルスの薄弱なる議論の如きは忽ちに挫敗して殆んど全く其の跡を絶ちし程なりき。然れども彼れは早年にして事によりて發狂し遂に自殺して失せたりしかば其の著書の如きは"Old Red Sandstone"(一八四一)の外多く見るべきものなくして了りぬ。されども彼れが通俗にして而も俗に媚びず明晰にして根底ある論風とこれに協ふ文脉とはいづれの篇にも見るを得べし。

十九世紀科學壇の彬々たる文才の殿として餘業今に顯著たるものをトマス、ヘンリー、バックスレーとなす。ミルレルよりは二十年、ダーヰンよりは十五年の後に生れ殆んど一世の師表と仰がるゝこと四十年、一千八百九十五年齢七十一歲を以て歿しき。少にして英學を學び、て海軍々醫となりダーヰンにひとしく南海に航して研究する所ありき。されど此等早年の研究は未だ世に知らるゝに至らざりき。後ち齡二十六歲を以て學士會員となりこれより齡六十歲に至るまで件の學會にて講演に從事し大に諸種の科學を研鑽せり。彼れが科學界の功業は彼の進化說を特殊の立地より確立不動のものとせし外一々枚擧するに暇あらず。其の博覽强記にして根底の廣く固きは更にもいはず其の斷案の力ありて確かなるなどは皆人の稱ふる所なり。彼れが批評家としての技倆は一千八百七十八年『英文叢』"British Men of Letters"の爲めにものせし「ヒウム論」に於て知らる、其の引證の該博と議論の宏大とは以て恰もヒウムを包みたるが如き觀あり。文躰また莊重正明、警拔を好まず曲折を事とせず而も事理透徹一物遺す所なき眞に一世の大家たるに恥ぢず。

第二十三章　脚本

第十六世紀よりこのかたの英國脚本を通覽したる人は必ず其の第十九世紀に至りて著き變化をなしたるを見ん。蓋し十八世紀より以前に於て脚本と演劇とは大低一致せり作られたるものは演ぜられ、演ぜられたるものも讀みても興ありしが第十八世紀の末より第十九世紀へかけては兩者殆んど全く相分離し扒上に於て巧妙の文學としてもて嘶さるゝ脚本は舞臺にかけて成功なきが多く、芝居にて面白く演ぜらるゝ脚本は讀みて興趣の索然たるを常とするに至りぬ。一言すれば脚本の中に演ずべき脚本と讀むべき脚本との二種を生ずるに至りたり。奇なる現象といひつべし。今其の原因を尋ねんよりは先づ演劇脚本の實況に就て語らんか。一千七百九十年より一千八百十年の間に於ける舞臺に上りし演劇の臺帳は一千八百十一年インチボールド夫人の手にて "Modern British Theatre" と名づくる十卷の冊子となりて出でたるが其の文學的趣味の索然たることは言語同斷、センツベリーの如きは

「之れを通覽せんには他に一冊の書もなき絕海の孤島に於てか又は長雨に降り

こめられたる旅亭の徒然に堪へざる時かさなくば餘程狂氣じみたる好奇心に驅られたる時ならではかなはず」

といへり。さて件の十卷中につきて見れはフレデリッキ、レーノルド(多作の劇作者にして『エルテル』を脚本に譯したる功は記すべし)の作二卷餘、インチボールド夫人の作一卷、ホールクロフトの作一卷、カムバルランドの作一卷、數多の小作家が劣作五卷にしていづれも文學の眼を以て見れば謂むに堪へずと雖も脚本の側に立ちて公平に觀るときはホールクロフト及びコルマンなどの如きは臺帳の作者としてやゝ堪能のものにして其の他の作者の伎倆また學ぶべきものあり O' Keefe の如きは蓋し其の尤なるものなり。

John O' Keefe(一七四八—一八三三)はダブリンの人少壯の時は自ら俳優となりて盛んに脚本をものせしが晩年に至り明を失ひて筆を絶ちしが爲め其の老熟の作を見るを得ず一千七百八十一年より同九十八年に至るまでに大小五十種の作ありと雖も自ら選んで出版せしものは三十種に過きず。多くは滑稽劇にして其の喜劇の趣に近きものと單に一場の戯謔に過きざるものとあり。其の直接の文學的價値は例に依りて少けれど何れも舞臺上に當りを博せしものなれば脚本として多少學ぶに足るものならん "The Merry Mourners" は粗大なる笑謔劇にして "The Castle of Andalusia" は珍しき野賊の事を演ぜるもの "The Poor Soldier" は愛蘭土滑稽樂劇なり。其の他 "Wild Oats" "A Beggar on Horseback" "The Doldrum" など見るべし。いづれも愛蘭土の風を帶びたる所其の特質なり。

さて前にもいへる文學と劇との分離に及べる端緒は Jouna Baillie 女史(一七六二—一八五一)の作の頃にありといふべし。女史は當時閨秀の才藻として一世に讃美せられし人にして其の作に見るべきものも少からず。久しくハムプステッドに住してスコット以下の名士と交り得る所少なからざりき。一千七百九十八年 "Plays on Passions" と題する戯曲(シーズ)の第一卷を出版せしがこれには十八世紀の主なる人情を表はさんと期して喜劇悲劇さまゝの形とりまぜて著き憎怨、恐怖、戀愛等の感情を描きたり。この卷には又序文に少しく劇に關する議論を附し開卷第一には "Basil" と呼べる書齋劇(クロセットドラマ)を載せたり。さて此の書忽ちに遠近に傳はり期年にして三版を重ぬるに至り中なる一篇 "De Monfort" の如きは上場せられて頗る喝采を博

き。さて一千八百二年に同じく第二卷をものし同十二年に第三卷をものし其の間に"Miscellanious Plays"といふを著しき(一八〇四出版、後ち短篇の詩文若干を加ふ)。されども女史が作は大躰に於て演じてよりは寧ろ讀みて趣味あり。其の悲劇の無韻律語は文字精練なれども熱誠の神興に乏しく又多くは地方の特風と時代の特風とに偏しビザンチン、サクソン或は文藝復興等の一時一處の類型的人物を以て主とせるが故に個人の性格は漠として捉へ難きを常とせり。喜劇の作には時に無邪氣の可笑味なきにあらねどこれはた大躰科白上の滑稽に乏しきと破綻和解の因緣を人物の性質に置かざりしとによりて興味深からざるは惜むべし。要するに女史の一世に名を成しゝは其の作のさまで價値ありしが爲めにあらずして當時あらゆる文學の間歇期にありしが爲めなり。

かくて十九世紀の初めつかたより所謂技巧悲劇 Artistic tragedy (artistic comedy に對す)なるもの起りて劇界に新現象(好現象とはいはず)を呈し來りぬ。其の由來を案ずるに當時に出でし英氣の作者は第十八世紀劇は畢竟價値なき佛劇の影響かさなくば荒唐なる夢幻劇の類ひにして到底爲すに足らざるを知り遂ひに十七世紀に泝り直ちにシェークスピアを摸範とし之れに十九世紀の新思想を注ぎて一新劇を鑄造せんと企てしに出づ。蓋し是れ例のローマンチック派の運動の一種なり き。されど此の劇の起るやまた固より偶然にあらず。之れより以前に遡りて探り見るに彼のチャールス、ラムに"John Woodvil"といふ作あり。ゴドヰンに"Antonio"といふあり。彼のバイロンが悲劇は詩としても他の諸名篇に劣り劇としても舞臺的効果乏しかりきと雖もまた決して劣作にはあらず。たゞしスコットに至りては作劇の才全く無くシェリーが"Cenci"も詩才の燦然たる割には劇的趣味に乏しかりき。特りコールリッヂに至りては劇の才能一派に冠絶し舞臺の成功はた頗る著く中にも"Remorse"及び"Zapolya"の如きは當時には珍しき傑作なりき。然れども演劇をして(若しくはせめて劇詩をして)趣味多からしめんの企圖は念々に息まず如何にもしてこれを進め行かんと試みしは明かなる事實にして或はベードースが傳奇劇復興(エリザベス朝の人にあらざれば到底夢幻劇の成功覺束なきこと猶ほ我が今日の夢幻劇の新作の到底元錄享保の夢幻劇に及ぶ能はざるが如きものなるに拘らず)となり或は所謂學者劇(アカデミックドラマ)となりしが(ミルマンが"Fazio"タル

フォールドが"Ion"などは學者劇の兩極端の標本なり)而もいづれ一つとして成功の著きものなかりしがタルフォールドが作は端なくもブラウニングが新作の先驅となり此の大鬼才をして神韻幽渺たる"Stafford"及び情感深刻なる"Blot in the Scutcheon"を著さしむるに至りき。此の後者はたしかに當世紀の一種の作意を代表するものにはあれど演ずべき劇としては尙ほ不具なる所夥しく到底抒情詩劇を以て目せざるを得ず。

かくて當世紀上半の文學と劇とをして全く分離せしめしは James Sheridan Knowles (一七八四—一八六二)とす。彼れは名門に生れしかば少にして文壇知名の士と交りしが長ずるに及びて一たび民兵隊に入り又藥劑師となりしが性來の嗜好は藝苑に馳せて禁ぜず遂にとある劇場に入りて俳優となり又舞藝の師となりしが著き成功を見ず遂に三十歲の頃より劇作者となりぬ。さて彼れが作は當時殆ど確言視せられし「劇場の實際知識なくては好脚本をものする能はず」といふ言と「文學の才に秀でし人は不思議にも劇場に意を得ざる世なり」といふ言とを實證せり。但しこは反面より實證せしにて彼れが作は彼れが劇の實際知識を有するが爲めに劇場に於びて成功したる割に文宗の才はとしかりしなり。彼れが悲劇にて最も著名なるは"Virginius"にして作として最も善きは"Caius Gracchus"(一八三六)及び"William Tell"(一八三四)なり。而して喜劇にはなほ良き作あり"The Hunchback"(一八三二)及び"Love Chase"(一八三六)等いづれも例の Artificial comedy をやゝ改善せるものと見るべし。彼れは本來神與によりて筆を馳せしことなきが上にあまりに多く舞臺の事情に拘束せられし爲め其の人物動作等いつも型に拘したるものとなり文學上及び美術上の價値を損したるは亦た已むを得ざる結果なりき。

舞臺上の成功はシェリダンに次ぎ文學上の價値も彼れに敵せしはバルワル、リットンの脚本なり。"The Lady of Lyons""Richelieu"(一八三八)"Money"(一八四〇)等は盗し其傑作なるべし。"Richelieu"は甚しき妙所なき代りに咎むべき難なく出來上りたる所は頗るシェリダンの作に似たり"The Lady of Lyons"は劇場的に大袈裟なる笑ふべしと雖も其の自然の哀情には皆人の同情すべき處あり。而して"Money"に至りては例の技巧的喜劇 artificial comedy の上乘なる者なり。其の他"Duchesse de la Valliere"を始めとして作あまたあれど皆文學としても劇としても以上三作の列に

あらず。

以上の作者はシェリダンを除く外は大抵專門の劇作者にあらずいはゆる劇の極衰期にいでしが爲めに多少の名をなしゝ門外文士なり。されかるにとゝに門外文士にして流れ〳〵で竟に劇界文士となりしもの一人あり James R. Blanche 是れなり（一七九六―一八八〇）。彼れはもと古物學者にして多少の名ありしが一千八百十八年頃より著作に從事し飜譯創作の長短篇合せて百餘に及ぶ中にて劇の作は正劇より端物に至る頗る多けれどいづれも輕妙にして自由也隨うて文致精練なられど流石に巢てがたき所あり又抒情的文字に富む所其の特色也。

此の外當世中脚本に指を染めたる人々を擧げ來らばミットフォードよりテニソンに至るまで詩人小說家の名若干を擧ぐべき筈なれど彼等の作はもとより其の本領にもあらず且つは劇壇を輕重したるものにもあらねば今は總て省くことゝせむ。要するに

「十九紀に於ては文學者の戲曲はおしなべて貧かに其の人々の詩歌小說の作に劣り詩歌小說に秀でざりし人々の脚本は文學的價値殆ど皆無なりき」

既に論述したるが如く第十九世紀の新文學は前世紀の末に起りし歐洲革命の所產にして其の萌芽は既に十八世紀の末にあり就中一千七百八十年より一千八百年までの間に此の氣運最も著かりしなり。されば此の間に出でたりし作は單に文學として見るときは價値多き者にあらず。現今に於ても、文學鑑賞家といはるゝ人々は概ね此の期の文學を喜ばず、ボスエルが『チョマソン傳』、バルンスが詩歌の數篇及び "Lyrical Ballads" 等を除くの外は大に見るに足るものなしとなし小說のごときも荒唐荒雜稚氣を脫せざるもの多きゆゑに未だ以つて人の讀み物となすに足らずとなす。さもあれ比較研究者文學史家、國史家たるの見地より見來れば流石に作の價値以外に於いて無限の旨味の湧き出づるをおぼゆ必しも輕々しく拋棄すべきにあらざるなり。例へばクラッブ若しくはクーパルをとりてゴールドスミス若しくはトムソンと比較せば如何、更らに之れをチルヂチルス若しくはコールリッヂと比較せば如何かくの如く比照するときは當時の詩人が片々の作も別に多少の意義を有し來る況んやバルンス及びブレーキが新聲を以てソウシー、コールリッヂ及びチルヂチルスが初期の作と比照する時に於てをや。所詮過渡時代

の作の價は作其のものゝ價よりは後の傑作の導火たりし上に存す。

小說界に於ける此の期の狀況またこれにかはらず。其の作家が後代を指導せし力は詩人のに比して微少なりしが如くなれど其の苦心の點に於てはなかく〳〵に彼れに過ぎたり。ベックフォルドが物語はバルンスが詩歌と對すべくホルクロフト、ゴドヰン等の小說はグリーバル以下の作と相照らすべし況んやスコットが小說上の新事業はヲルポチルス、コールリッヂ等の事業よりも或意味に於ては困難の努力なりしをや。また之れを詩歌の方面に見んに當時の詩人にして若し十八世紀の無氣力と腐爛とに厭きたりとせんか彼れ等は直ちに古に復りて其の師表を紀元前四五世紀の希臘に求むるを得べく中世の伊太利に求むるを得べく、文藝復古時代の各國に求むるを得べかりしが特り小說に於てはさる便宜を得る能はざりしなり。小說作家の則るべかりしものは自國十八世紀の作物かさなくば佛蘭西、伊太利の物語類ありしのみ。而もこれ等の作は新小說の創始に對して殆ど何の裨益する所なかりしものなれば其の困難推して知るべきなり。彼等はかくの如くして徒らに闇中を索摸せりき。其の得る所果して幾許かあるべき。吾人のスコットの作の多とする所以は蓋し此に存す。

評論壇神學壇等の模樣亦た詩歌小說壇と大差なし。要するに此の二十年間は一般文學界各々其の緒を求むるに汲々たりし時なりといふべし。

さてそれより今日までの樣を見るに第一詩歌界の變遷は明かに五期を劃せり、就中第一期第三期及び第五期は創才ある眞詩人の彬々として輩出せし時代にして第二期と第四期とは其の名作の相接踵して出版せられし時代なり。即ち第一期は一千七百八九十年代即ちスコット及び湖上派詩人を首としてシェリー、キーツなどの出生せし時代也。第二期はこれより十五年間を占め第三期は一千八百十年前後より又十五年間。第四期はそれより一千八百三十六年まで第五期はモガリスの生れし年より今日まで。

此の第一期に於てはローマンス復古の勢ひめざましく、中世文字の復活、佛蘭西革命の影響及び神秘的觀念の興起等はこれを助けて力ありき。「自然に復れ」「新たに立脚地を自然界に求めよ」などいふ聲は先づ半無意識にクーパルとクラッブとによりて揚げられ全たく無意識にバルンスとブレークとによりて助長せられ程なく

"Lyrical Ballads"は出版せられ遂に確固たる精神的のものとなりてヲルヅヲルス、コールリッヂ、シエリー及びキーツよりスコット、バイロン以下ソウシー、カムベル、レーハントモーア等に傳はりたり。即ち當時の詩壇は自然主義を以て一貫したりきといふも可なり。而も其の詩人の社會に及ぼし、勢力の多少に至りては件の精神を享受せし度には關せざるとおほし。スコット、バイロンの如きは詩人としてはヲルヅヲルス、コールリッヂ、シエリー、キーツの下にあり自然主義はた四子に及ばされども其の社會より受けたりし名聲に至りては遙かに其の上にありしなり。レー、ハントも詩人たる天才と技倆とは更に一段の下にありしも其の詩形の勢力はヲルヅヲルス、バイロンに越ゆるものありたり。但しそれ等の詩人は早晩いみじき勢力を得來り社會の待遇粗略ならず遂に相集まりて十九世紀の詩歌全盛期を作りき。さてこゝに注意すべきことあり何れの代にても名匠巨手の輩出したるあとには騷壇の景氣一時沈落するに至るか、さなくば小手腕の作家が模倣の作を以て滿たさるゝが常なるに此の十九世紀に於ては毫もさることなかりしこと是れなり。テニソン、ブラウニング、アーノルド、ロセッチ、モオリス、スヰンバルンの如き俊

兒がヲルヅヲルス以下前代名家の後嗣として一層の光彩を門戸に生じたりしは更にもいはずフード、ブレードブレード、マコーレー、テーロル、ダルリー、ベッドース、小コールリッヂ、ホルン等の如き第二流小詩人すら各〻獨得の伎を有して他の模擬を事とせず兎に角に一家の詩躰を持して此の間に參はりしは眞に奇觀といふべし。實に彼れ等群詩人のヲルヅヲルスに對するは晩エリザ朝の劇詩家のヂョンソンフレッチャルに對し其の詩人のスペンサルに對するが如くにあらざりしのみならず或る意味に於て大に英國の詩歌を富贍ならしめたり。ベッドースの天上界を歌へる、ブレードの愼重なる社會歌、フードの痛切なる哀情歌、ホルン、テーロル等の森嚴なる道德歌等一つ〳〵に取りいでゝこそ見どころも少けれ全躰より評すれば容易に得難きものとたゝへつべし。

さて次ぎにあらはれしはテニソンとブラウニングとなり。共に詩歌の才能といはんよりは寧ろ天才（ジエニヤス）といふべきものにして全く同一時に出で同一の行路を取り作詩に從事すること共に六十年、修養の爲めに久しく作を絶ちしこと其の修養の大効ありしこと、爾來孜々として作詩に從事し終生之れを怠らざりしこと等に於

て兩者全く同じかりしのみならず其の作詩の質に於ても一人の差はチウサル、スペンサル、チルヴチルス、シエリー等の個々の間に存する差異の如き著大なるものにあらず。彼れ等は共に意識的に現在を歌ひ又未來を歌へり。其の差違は縱かに此の未來を謳歌せし分量と作詩の技倆とにあり。かくも同樣なる天才の同一時代に出で同一の方面にあらはれて半世紀以上の文壇を飾りたりしは稀有の盛觀といふべきなり。

テニソンとブラウニングとが作を師するに方りて常に回起せらるゝはキーツが事業なり。彼れが作詩は量多からず又社會に對して勢力あるものにあらず。然れども彼れは明かに第三期の首に坐せりしもの、彼の十九世紀詩歌の特質の一たる歴史を歌ひ美術を歌ひ文學そのものを歌へるが如きは一にキーツによりて端を發かれしものなりといふべし。是に於てや人或はキーツを以てテニソンの祖なりとなす、實にかゝる意味より言はゞ同じくブラウニングの祖なりともいひつべし。さてテニソン、ブラウニングの二文木が枝を交へ葉を重ねて蔚々葱々一世紀間の文園を蔽ひし間に幾多の名草芳樹其の下蔭に生長しき。詩才に秀ぬるに

批評眼を以てし春秋の眺めもあかねはマッシウ、マーソルトが楓の一もと異邦の手ぶりゆかしき梅柳の兄妹はロセッチの一家清影月を迎へ琅玕風に鳴るはモオリス、スチルレベルンが修篁の一叢、クロフト、ロッカル、リットンの諸英どの間を點綴して紅紫繽紛、正に是れ不老長春園、仙鶴松韻に和し鶯語雨聲を縫ふの概。

テニソン、ブラウニングを以て十九世紀の詩歌は其の頂點に達じこれより暫時また衰期に向はんとする徴あるは第一期第二期に皆無なりし模倣といふ事の此の時に起れるを見ても知るべし。もとより大詩人の作は或は想に於て或は形に於て後代に影響すること夥しく現にチルヴチルスの如きは殆ど一百年間多數の人々(散文家をも含む)の間に大なる勢力を有し、シエリーの如きは或百年代間盛んに模倣せられしことにあらねど要するに第二期第三期の作者は決して一二詩人を標的とせず寧ろこれを階段として一層の高處に登らんとするの氣概ありしなり。而して今やテニソン、ブラウニングの出づるに及びては十九世紀詩人の達し得べき頂點こゝに定まりぬといふ聲と共に只管にこれを師表とせんとするもの續出しき。想に於て二人の如くならんと勉むる或は可なるべし、晦澁險怪なるブラウ

ニングが詩形を學びてそも何をか爲さんとすらん。

この模倣の卑しきを知り獨立して自家の感想を歌ふべしといふ主意を立てゝ現はれし一派あり。さもあれ此の派のうち一人の深大なる詩想を有するものなかりしかば其の作爲せし所は本來の目的にたがひたゝ新事項を歌ふを事とし新聞紙の雜報を韻語とせるが如き淺薄露骨の詩を出だすに止りしは十九世紀の中葉に暫く榮えし所謂「暫旦感動派」これなり。實に英國十九世紀後半の韻語史に於て最も注意すべき一つはこの模倣と創作との關係なり。現にマッシュウアーノルドの如きは晩年に於てこそチルヅナルスを排斥したれ一たびは熱心なるチルヅナルス崇拜者たりき。チルヅナルスの詩風は彼れが一生の詩歌に浸潤せしのみならず彼れは其の他にギョオテ、テニソン等の詩風をも取り入れしは明かなる事實にして或る評家の如きはアーノルドをして若しかゝる先輩に影響せらるゝとすくなく獨立して其の詩歌をものせしめば其の成功一層なりしならんといへり。アーノルドの果して然るべかりしか否かは容易に斷じ難けれども「ロオド、リットン」に至りては明かにこの前人模倣の弊に陷りしものにてそれが爲めにや當時にては「暫

に近づくは詩をして拙ならしむる所以といふ說一般に行はれしが如し。而してアーノルドが其期に於て第一の詩人たりしは爭ふべからず。センツベリーがいへる如く人は前代の詩歌を記憶するによりて始めて詩作し得べしともいふべからず又記憶せざるによりて名詩を得べしといふべからず、而も前人の作を讀み無意識に其の影響を受け或は意識的に之れを排斥するは止むを得ざる所」所詮大詩人は如何なる位地にありても兎に角に自家の一風を持するを得べきものにして如何ばかり前人に私淑することあるも其の中に自家を沒了するが如きは蔑これなかるべきなり。

次ぎに第四期に於て最も注意すべきは「先ラファエル」と稱する一派の事なり。此の派の生起せし動機は寧ろ美術界にあり。且つ繪畫彫刻に於ては現今までも其の勢頗る盛んなるものにして詩歌に於ける其の代表者はロセッチ兄妹モオリス、スヰンバルンの四家とす。十九世紀後半に於てこの派の勃興せし伏線を尋ぬれば近くはテニソン、遠くはスコット、更に遠くはバルシーのローマンチック主義にありといふべし。これにつきてはセンツベリーの所說最も趣味あり。曰はく

一般の歴史に應用して最も趣味あるは曾てアリストートルのものせし問答の際語なり問に曰はく「汝等若し水を喫して嗜息すさせば更に何をか飲まんとするぞ」對へて曰はく「酒を飲まん」。或は曰はく「更らに多量の水を飲まん」と。然りこの二條の答へは共に當れりといふべし歴史の現象につきてこれを見るに事件の迅線轉換殆ど此の二途の外に出でざるが如し。更に「先ラファエル派」の興起に見んか中古の風に復らんとするローマン派の運動は文學上美術上等に於てバルシーよりチユソンに至るまで既に頗を接して起りぬ。バルシーはバルシーの主義を以て、主張しスコットはスコットの主義を以て起りテニソンまたテニソンの主義を以て、試みき。かくの如き復古の運動は相併び相立りて十九世紀中葉の英國詩歌の明頭に充塞しぬ。この時に方り取るべきの方法は斷然これを排して別種の文學を起すべきか然らざれば一層盛んにこの主義を推進せんかの二方法ありしのみ。十九世紀中葉の詩人は其の後者を選びしなり。更らに多量の水を取りて彼の充塞物を嚥下したりしなり。一言すれば「先ラファエル派」は積年停滯せるローマン派の主義を決下して爽然たる神氣を詩歌界に興へしものなりき

實に此の派の復古は復古と稱して當然なるのみならず或は古へに復りて更に一歩を高めたりしものと稱すべし。彼の單に趣向のみを古風にし言語のみを舊稱にするが如き復古は文學上より見て何の進歩ともいふ可からざる也。「先ラファエル派」は別に見る所を立てたりロセッチの多感にして感情燃ゆるが如きロセッチ嬢の宗教的にしてやさしくみやびたるは更にもいはずスチンバルンの言辭流るゝが如くにして韻調鏘然たるモオリスの物語歌の美妙にして温雅なる何れも近代の佳什にして上代にも稀れに見る所の珍品たり。實に此の派の詩人は中古の作の骨髓を取り之れに與ふるに十九世紀風の精神を以てしたるものといふを得べし。中古の作多くは荒唐奇怪、言華燦爛趣向意表に出で九霄の天を穿ち九地の底に達する水晶宮の大迷路に入るがごときものありと雖も十九世紀の眼を以て見れば其の間に存する生氣は茫莫捉へがたく朦朧見るべからず爲めに彼の輪奐たる大厦も實物と見んよりは寧ろ銳裡の影なるが如き觀あり。此の不可思議の大魔宮を十九世紀の英國に移し來り十九世紀的精神を以て其の本尊となし更に新様の裝飾を添へて以て世界の一奇觀を作りたる「先ラファエル派」の偉業また特筆すべきものといふべし。

第十九世紀は實に詩歌の全盛期なり英國詩歌の全盛期なり其の量より見るも其の質より見るも其の主題の範圍より見るも古今に通じ内外に亘りてかばかりの盛況に達したりしはあらず。請ふ"Ancient Mariner"より"Crossing the Bar"に至る九

十年間の作物を見よ。其の價値の度(デグリー)の上より見るも世界中何れの國の詩歌か多くこれに凌駕すべき。其の詩風の上より見るもシェリー、チルヂチルスの如きは他國に於て其の比類を見る頗る易からざる者に非ずや。加之彼の往昔に行はれたりし長篇の物語歌の如きだにも一種不可言の妙趣の其の間に伏在する由の認められて之れを再興する擧あり要するに詩歌は及ばん限りあらゆる方面に於て其の發暢を試みられたり其の成功せざりしは僅かに彼の劇詩を有韻にすることゝ深刻なる諷刺詩を試る事の二つのみ。其のゝち後者は彼の深刻に過ぎて美感の範圍を逸するまでに至らざる輕快なる諷刺には頗る成功の跡あり其の他所謂應用詩歌の類皆興らざるなし。一言すれば十九世紀の英國詩歌は其の完全なるとに於て殆ど希臘の昔に比するを得べく其の範圍の廣きことに於て世界の詩風を籠蓋せるものともいふべきなり。「詩中の詩」たる抒情詩に於てこの域に達したる近代英國の事業羨むべく稱すべし。十八世紀英國詩歌の此の域に達するにつきて四の短期を通過したりしとは以上いへるが如し但しこはたゞ大躰の別にしてもとより各詩人につきて其の詩想發達の期、試驗の期、修養の期、成功の期等を精査せば千樣萬態際限なかるべく且つ其詩人が通般の變移のあとは到底他人の心を以て察知すべきものにあらざれば今はたゞこれにて止むべし。

さてこれより小説につきて一言せんに十九世紀の小説は其の興起の初めに於て大躰の標準なかりしが爲め五里霧中にありしことは前にもいへるが如し。十八世紀末二十年間及び十九世紀の初十五年間の中にて見るべきものは僅かにエッヂヲルス女史の傑作二三篇若しくは異種の作 "Vethek" 等に過ぎず。スコットの韻語より散文に轉ずるに及びて近代小説はこゝにローマン派の一風を加へ今に至りて絶えず。其の作 "Waverley" の如何に成功せしか、其の成功の如何に急速に歴史小説を誘起せしか。歴史小説の如何に時風(マンナース)小説を誘起せしかこれと共に起りしテオドル、フックが滑稽小説は如何。この兩者の間に立ちしリットンは如何。さて十九世紀の中葉に至りて歴史小説の火氣一たび熄み更にキングスレーのローマンスを以て如何に万丈の光焔を擧げしか、これと共にサッカレー。ブロンテ女史。ヂオルヂ、エリオット。アントニー・トロープ。ヂッケンス等の起りし摸樣は如何。更に現今に於て諸種の小説の如何に一層の小區分をなすに至りしか等は略〻これを説きおきた

れば今これを重說せざるべし。然れどもこゝに注意すべきは詩歌の全盛と小說の全盛につきての關係なり。今少しくこれを覘はん。

詩歌と小說とは共に十九世紀英文學の最大現象にして共に近世大革命の影響によりて現はれしには相違なけれど詩歌と小說とは元來其の勃興の動機を異にせるものなることを知らざるべからず。何時の代何處を問はず人の或る場合に臨みて詩情を起すは其の天性なれど各人皆必ずしも他人の詩歌を玩讀するを好むものにあらず。かるが故に各國各代に通じて詩歌の詠は頗る多かるべきも其の後世に傳はるべきは實際少數なり。其の作の同時代に傳播する範圍また知るべきなり。されば幸ひにして多數の讀者を得る作者だに尙ほこれによりて生計を立つるは難し。隱りてこれを小說に見んか何時の代何處を問はず斬新にして趣味ある話說を好むは等しく人の天性にしてこれを語るもの又これを聞くものゝ多きは言を俟たずと雖もこれを組織し又は之れを文に草して一部の小說となす技倆あるものに至りては少數なり。此等の事情によりて詩歌と小說とを比較せんに前者は需要少くして供給多く後者は供給少くして需要多し。かるが故にホ

ーマルは食を市に請ひリットンは一作數十万金を得たり。以上は一般の上より見たる詩歌小說の讀者に對する事情なるが今これを英國の十九世紀に見んか文明の進歩は日に月に著く教育は急劇に普及し國民は全躰に文字を解せざるものなきに至り多數の社會はまた生活の餘裕を得たりしが故にこゝに娛樂を求むる心生じ第一に小說類を歡迎しき。かるが故に少しく文才と機智とあるものは筆を小說に染むれば其の作としての價値は兎も角も裕かに一生を支ふるを得るに至りき。こゝに於て僅かに五六十年間の作は其の數に於て過去全躰に幾十倍するに至りたり。さはれ此の間に出でたりし小說は必ずしも悉く拙劣なる急作にはあらず其の質に於て概して十七八世紀の幼稚なるものより進歩せるは更にもいはずこの五六十年間と雖も年を逐うて著き進歩をなせるは事實なり。さて其の間の變遷を一瞥するに小說の作は今より大凡三十五年乃至四十年の頃を以て極盛の期となす。チックンス、サッカレー、ジオルヂエリオット、アントロハーブ、キングスレー、バルワル、ヂスレリ等の名家は皆千八百五十年代に最も多く傑作を著しゝものにて當時の如きは彼の小說を以て文學の生命とせる佛國と雖もこれに及ぶ

能はず。これより二十年が程のうちにはサッカレー、ヂッケンス相次ぎて歿しトロロープもエリオットもまた大作をものせざるに至りキングスレー、ベルタル亦た漸く老衰するに至りしかば作の質はやゝ低落せし觀あり然れども第二流作家のものせし作の數量に至りては寧ろ前代に倍せんとし社會の歡迎はいよ〳〵進み遂に或る社會にとりては單に書物としいへば小說の如くになりやゝ上等の社會にても文學と小說とを同一視するを常とするに至りき。而も一世紀の前に於て率先して小說界の榮華を闢き此の全盛の種子を蒔きし功は殆んどスコットの一身に歸せりともいふべし。

要するに詩歌と小說とは等しく十九世紀に全盛を極めしなり而して其の動機を察すれば前者は全く自動的に革命の潮氣に感じて續發せしにて後者は重に他動的に社會の要求に應じて起りしものなりといふべし。

詩歌小說の勃興と共に注意すべきは定期出版物の進歩なり。彼の新聞雜誌的小冊子の政治界などに頗る勢力ありしは遙かに前の時代にして當時は其の數もいと少かりしがアヂソン、スチフト、さてはデフォーなどの頃はこの業大に衰へ一般に價値なきものと見做され掲載の記事なども纔かに "Robinson Crusse" "Sir Launce-lot Graves" 等のものてはやされしのみにして評論の文章の如きは一向に世の冷遇を受くる樣なりしが十八世紀の末に至り一葦水を隔てゝ佛蘭西革命の大活劇の演ぜらるゝや英國民は爭ひて其の事相を知らんと欲し新聞紙の勢力はこゝに一轉することゝなりき(これにはまた讀書社會の擴張などいふ內部の因緣の添ひしはいふを俟たず)。さて讀者の歡迎につれて發行者の方にても成るべく記事に趣味を加へてこれを誘ひつゝきて起る他の出版物と相競爭してこゝに一時の亂發を見るに至りき。加之當時ヂヤコビン黨は活潑の運動をなし彼の新聞雜誌を機關とするに至りしかば反對者もまた同じくこれに據りて議論を闘はせいよ〳〵看客の注意を惹くに至り程なく便利なる新聞紙條例も定まり印刷術の進歩と共に價額も減じ益々其の隆盛を來したりき。要するに何れも時勢の結果なりき。さる程に定期出版物は文學の全領土を占め詩歌小說の創作より歷史哲學宗敎科學の評論に至るまで大概の著作は其の單行する前に一たびは新聞雜誌に掲載せられずといふことなく每日、每週每月、每季等の出版物を通覽すれば文學の全豹は窺

ひ得て遺漏なきに至りぬ。定期出版物と文學との關係はこれに止まらず其の盛んなる頃は大抵の文士は皆これに關係を有するに至り小作家小評論家もなほこれによりて生活し彼のグラブストリートの文學ごろの如きものは全く其の跡を絶つことゝなりぬ。即ち定期出版物の力が或る意味に於て文學者の地位を高めしなり。さて終りに一言すべきはこの定期出版物に掲載せる文章詩歌とも大かた匿名を用ふるを例とせしことと是れなり。特に十九世紀の初めつかたの如きは何れの新聞雜誌も徹頭徹尾匿名を用ひしかば所謂文章通にこそ其の所論筆致等によりて流石に大凡の見當もつきたれ一般の讀者は全く曉ることを能はず人を離れて文のみを讀みたりしが後には此のことを却りて一種の愛嬌となりて知名の文人等はわざと帔衣(エール)を用ひたり遂には大雜誌の主筆さへ異樣なる別號を以て社說をものするに至りき。さるほどにいつしか此の風も止み追々其の本名を署することゝなりしが其の何時の頃より又何々の理由といふことは到底明知し難し。"Household-Words"にチックンスの人物評論を公然署名したるなど其の早きものなるべくひき續きては週刊の"Academy"月刊の"Fortnightly"などの佛蘭西風を用ひて匿名を廢せしなど最も著き例なり。但し批評文の如きは今日に至るまでも以前と異ならず。投評文に匿名を用ふるときは何となく記事に責任輕くようせずば刺傷嘲謔の道具となり、さらでも作或は作者の眞價を穩當に論定するよりは寧ろ自家が着眼の奇警を衒はんとするが如き傾向となるは必然なれどさりとて全く本名を署することゝしては其の寄書もかれ〳〵となるべく讀者の快味も減少すべし。要するに定期出版物の狀況はすべて今の我が邦の新聞雜誌に徵して大かたは察知せらるべし。

さて又或る意味に於て科學に屬すれどもまた文學に密接の關係ある(いはゆる純文學と科學との中間にある)歷史につきては十九世紀中さして目覺ましき事ありしにあらず。されど其の研究の勞及び其の未來の史家に資供せし便宜などにつきて考ふれば其の事業決して他の文學に讓るべくもあらず。ケムブリッヂ大學の教授アクトン嘗て學生に語りていはく「歷史は今や歷史家と離れて獨立す」と。この警語はよく十九紀歷史事業の得失兩方面を藏へるものといふべし。これを希臘羅馬の古へに徵するに有名なるシウシヂヂーズ、ヘロドタスなどの歷史は單に直

接に明視せる事柄又は自家が感激せし傳說等によりて綴れるものにして今の史家の眼を以て見れば到底不具なるを免れず。而して爾後數百年の後に至るまでも歷史は各國共に同樣の有樣なりき。是の如くにして成れりし歷史は史家が知識と感情との範圍內に於ける歷史卽ち主觀の歷史にして眞正の客觀的歷史にはあらず。十七世紀の終りより十八世紀の初めへかけて英のギッボン卓越の識見を以て史の研究に佛蘭西派の風を用ひ周到綿密一に事實の採拾に從ひしが當時獨逸にても此の種の研究行はれ大勢茲に定まり遂に十九世紀に至りては其の極端まで推進するに至たり。マコーレーカーライルの著の如何に經營慘憺たるものなりしかを見ば明かならん。是に於て往時は荒唐無稽の囈語として棄てられし傳說記錄の類も今や史料の最上級を占め出所不明の逸話をさへ拾摭してひたすら其の博を衒ふに至りぬ。然れども傳說記錄の類やもとこれ杜撰、相互の矛盾あり意外の過誤もあり之れを統べ之れが隱微を解釋し之れを有機躰として生命を賦與するは一に史家の手腕を要す。然らざれば死記死誦の徒が千百の機械的考證竟に何の爲す所かあるべき。主觀に偏して詩歌的なりし往古の歷史は今や

容觀に偏して無機無生のものとならんとしき。皆これ歷史攻究法の不備より來れるもの也。歷史が歷史家を離れて獨立するは可し而も歷史家は到底活人情活世相と離るべからざるなり。彼のマコーレー、カーライルフルード等の史は幸にして如是死物とならざりしも尙餘りに同事物の考證に密なりしが爲めに十二年間の記事に四卷を費し五六十年間の歷史に十二卷を費したるが如き未だ時弊を免れずといふべし。要するに十九世紀中の史的事業は過去の獨斷の風を矯めんが爲めにあまりに機械的に流れたりし憾あれども夥多の史家が銳意に研究し出だしゝ史料は今や積んで山の如く以て後の眞史家の出づるを待てるが如くなれば歷史の地盤はやゝこゝに固きを得たりといふべきなり。

十九世紀に於て最も振はざりしものは劇文學なり。もとより其の量より見れば敢て前世紀に讓らざれど臺帳となりて舞臺に演ぜられしものに至りてはいと稀少なり。劇の形式上の工夫、古大作の研究などは大に歩を進めたりしも新作に至りては大抵は凡上劇學者劇、文學劇たるに止まりき。其のうちリットンの作二三篇は屢々、テニソンの全盛時代の作は稀に、演ぜられしことなきにもあられど大なる

興味を看客に與へたりとはいふべからす。かくて追々文學と劇場との間に一大溝渠を見るに至りしかは學者はさまん〳〵に其の原因を求めて調停の運動もありしかとさせる功果もなくて今日に至りぬ。要するにこは作劇そのものゝ困難なるによれるものにしてシエリダン以後英國に眞の劇詩家の出でざりしは主として之れに因るなるべし。

●さて應用文學のいま一つなる神學につきて見るに其の振はざること遙かに歷史の下にあり。概言すれば神學の著は十七八世紀より追々と不振に赴きたるものといふべし。十九世紀の初めつかたにはやゝ見るべきものなきにあらざりしかど其の中頃より今日に下るに及びては其の不振いよ〳〵甚し。單に出版物につきて見れば其の分量他種のものに讓らずと雖もこれを文學的方面より見れば其の價値はいよ〳〵少く彼の讃美歌の如きも現今のに至りては情高きにあらず趣清きにあらず辭妙なるにあらず無味乾燥なるを常とせり。此の間たゞ僅かに歷史熱の餘勢より高僧の傳記、宗派分裂の手續き若しは教義の變遷等を記せるものの讀むべきあるのみ。されば宗教神學に關しては有名なるアー非ンクチャルマー

ス等の如きも寧ろ人物としていみじきのみにして著述の上より見て大なるはたゝニウマン一人のみといふべし。

さて又文學と最も緣遠き科學の方面より二三の文章家を出だしたりしは頗る奇といふべし。科學其のものゝ性質より察すれば其の說明に美文を要することは萬とれなかるべきも科學者の或る人につきて見れば天性文學の嗜好に富み若しくは其の文章の職らず知らず修辭の法にかなへるもの鮮しとせず。第十九世紀の科學者中ハックスレーを首としてかゝる人々の多かりしは時運の然らしめしものとやいはん。

終りに科學よりは文學に緣近き美學家、博言家等につきて一瞥するに其の聰明なる一二を除くの外は概ね蛙鳴蟬噪の徒にして未だ文園を飾るに足らざりき。似而非美學家が二三の書物によりて得たる覺束なき智識を基礎として一足飛びに批評壇に上り自家が賞鑑力判別力の不具なるをも知らで杓子定規の批評を試るの片腹いたきは更にもいはず、純文學の修養もなき博言家が手當り次第に外國文學をとりて紹介若しくは批評して俗耳を驚すなど何れの國にもありがちながら

特に英國近代の騷壇に此の輩の跳梁の盛んなりしを見る。これも文學全盛の春風にふきあげられたる大路の塵埃の一團といふべきのみ。

近代文學の概況はほゞ以上に盡きたりと信ず。こゝに一言を加へたきは第二十世紀に於ける英文學は如何なるべきかの問題にしてこは讀者諸君を益することは頗る多かるべきものなれど今ま輕々しく予の斷定する能はざる所且つやこゝに少許の紙上に於て試みん程の事は諸君が聰明なる耳目を以て現今の狀勢より推究すれば察知し得らるべければ今はたゞ現今評論壇の名家ドウデン、センツベリー等二三氏の所說をかい集めて其の大要を下に掲げるかんのみ。

つら〳〵現今の英文壇を見渡すに此の世紀の初めつかたに生れ出でし名家は大抵齢を易へ中葉に出でたる人々が今ま騷壇の牛耳をとり論に作になほ盛んなることなれば今後の狀況はなほ望みなきにあらねども暫く眼を轉じて過去の一百年間を一瞥すれば吾人豈に多少の感なきを得んや。見よ詩壇に小說壇に批評壇に其の他あらゆる文學凖文學の壇に、何ぞ名家の雲の如く星の如くに多きや。正にこれ芳芬漲天の春、虫聲滿野の秋、天上地下の眺め轉換して盡くるなきの概。吾人は既にスコットを有せりバイロンを有せりシェリーを有せりキーツを有せり。ワルヅワルスを有せり、テニソン、ブラウニングを有せりカーライル、マコーレーを有せりヂッケンス、サッカレーを有せり。エリオット、キングスレーを有せり。これを今の文壇に見んか彼の今に生存せる二三の老作家を除くの外滿目悉く黃茅白葦、然らざれば春葩の艷を摸して至らざる狂花のかへり咲きに過ず。是に於て人或は曰はく現今の文壇は沈息せりと又曰はくこれ更らに一轉するの兆と。實に沈息にあるか轉機にあるかは今の疑問ならめど兎に角に文壇の絕えて振はずあるは事實なり。一百年間(文學隆盛期として未曾有の長日月)榮えにし文壇は英國人の力を以て更らに百尺竿頭一歩を進むるを得べきか否か十八世紀末より十九世紀の初めへかけて起りたるが如き世界的大革命の再び起ることなくして英國人(沈着なる)の更らに激發することあるべきか否か。彼の如き動機なく彼の如き素養なく彼の如き感奮、激怒、恐怖、希望等のなくして更らにかの如き狂奔疾驅をなすを得べきか。これ吾人が問はんと欲する所なり。

更らに又この十九世紀をとりて以前の文學隆盛期たとへばエリザ朝、アン朝など

と比較し或はこれを外國の近代と比較すれば興味はいと〳〵多かるべけれどこは元來精密には行ひ難きことなるのみならずこゝには其の略をも試る能はずたゞ大づかみに各方面にわたりて過去全躰の文學と比照すべし。

第一　詩歌　につきて見んにバーンス、ブレーキ、クーパルよりチルヅチルス、コールリッヂ、ソウシー、バイロン、シエリー、キーツを經てテニソン、ブラウニング、アーノルド、ロセッチ幷びにモオリス、スヰンバーンに至るまでの作は質に於ても量に於ても亦た其の範圍に於ても決して過去の何れの代にも讓らず。第二　小說　に至りては過去全躰の作を集め來るも今の百分が一にも當らず。即ち純文學の重なる方面に於て過去の全躰に勝れり。　第三　文學の最も大切なるものゝ一なる戲曲に於ては不幸にして過去の匹敵にあらず。　第四　歷史　また進歩のあと明かなり。　第五、神學宗教に關するものは過去に比して概して熱情と崇嚴の度を失へり。　第六　定期出版物の雜種の散文に至りてはさま〳〵の方面に發達し變化多樣また前代に比なし、即ち彼のモンテーン、ベーコンの代、ドライデン、カウリー、テムプルの代、若しくはアヂソン、スチールの代、ヂョンソン、ゴールドスミスの代と雖も到底チャールスラム、ヰリアムハズリット、レーハント、トマスデクヰンシーの代に及ぶ能はず、マコーレー、サッカレー、カーライルの代に及ぶ能はず、況んやアーノルド、ラスキンの代に及ばんや。然り散文の進歩は非常に速かなりき彼の雜誌上の評論に於て華麗巧緻なる一躰を揣めたるはデ、クヰンシーにしてこれより人々の心々にさま〳〵の躰を工夫し出でしとなるが其のかくの如くに至りしはさま〳〵の因緣あるとにして或はこれを定期刊行物の隆盛に因すとし、或は韻語(想形とも)の發達に影響せられしものとなす。なほこの外に思想の進歩とゝもに文章の緻密なるを要する自然の傾向なども與つて力あるものなるべし。さてかくの如く神速の間に進歩して成れる今日の文躰は早晩また一變すべきか、これ實に趣味ある問題なり。今センツベリーの解答をかゝげて參考に供せん。曰はく

壓制政治の眞に止むは國内の最下級人がかゝる政治を怖るゝに至りし後なるべし。時尚(ファッション)の(ことに文學的時尚の)眞に變するまた國内の最下級までもこの時尚にあき足りたる後にあるべし。今や英國の社會文學の傳播日に進み教育の進歩と共に讀者の數はいよ〳〵增加の途にあり、現今の散文の一般國民間に於ける勢力は非常なり、この時に於て僅々二三子の運動を以て文躰の變化を企てんことは實に容易のことにあらず。云々